
荒唐無稽ビビッドハイスクール！

SAI-X

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

荒唐無稽ビビッドハイスクール！

【Nコード】

N0892P

【作者名】

SAI-X

【あらすじ】

日本列島の、たぶん近畿地方の辺りにある【六波羅商業高校】。

そこに通うは、刃野マサキなる男子生徒。

根は真面目ながら、やたらハイテンションな言動とゲーヲタなのです。すっかりクラスのコメディリリーフと化している、

愛すべきバカであった。

そんな彼を取り巻くは幼稚園からの幼馴染み・神戸レンと、高校から知り合った同級生・氷室リョウ。

こいつら3人や周りの人々が繰り広げる、著作権ギリギリ・マニア

ツク系ハイスクールコメディ！
冴えないヲタクもんとその友人たちは、どこへ向かうのだろうか…
…。

#1（前書き）

第一話 『嵐を呼べるかどうか分からん男』

#1

俺は刃野マサキ。

俺はくだらない争いと残酷な殺し合いと醜い小競り合いばかりのこの世界が嫌いだ。

幼い頃テロに巻き込まれて父と母を失い、妹は交通事故で亡くなった。

今となっては、高校生活だけが俺の心のオアシスだ。待っているのは、誰も呼びびじゃない『虚無感』だけ。

——そうさ。俺の友達は、孤独感と寂しさだけ……

「そのモノローグが嘘だ」

「——っ……ぐわっ……！ な……何故だ、何故お前に分かったんだ、リヨウ！？」
これがブラックなジョークだって！？」

「さあ、な？」

——まあ、アレだ。さっきのは、嘘です。ちよつとラノベ臭い嘘のナレーション入れちゃったね。俺は刃野マサキ。今年から六波羅商業高校に入った1年生だ。ちよつと紫っぽい黒い短髪に、どんなヤツでも俺の魅力でしびれさせる青い瞳の、ラーメンつけめん、ぼくイケメン！

容姿はそれなりで、成績もまあまあ、かな？ 真面目でクールできれいでかっこいい。それが俺なのさ。

ちなみに六波羅商業高校は近畿地方の琵琶湖の近く——にあるんだよ。分かるかな？ ここがある町は、近畿地方でも有数の大都市

なのだ。っていうか、県庁あるから、首都。駅は——京都とかに比べてシヨボイかも。

「マサキさー、お前脳内で中学生が流しそうなナレーション流して楽しいの？」

「ハハハ！ 何、気にすることはない。ケセラセラだよ」

「あゝ……ケセラセラじゃねえだろ。jk……」

黒髪のロン毛でちょっとニヒルなこいつは、氷室リョウ。漢字で書くと『氷室 涼』だ。一見クールな一匹狼だが、本心はお人好しのいい奴なのだ。まあ不断は生意気だけだな！

#1（後書き）

はじめまして、作者のSAI-Xです。

お時間がおありの時に読んでいただけると幸いです。何卒よろしく
お願いします。

#2

——まあ、そんなこんなで、我がダチ公と話していると授業前の休み時間は終了。うん、ビビった。マジで焦った。いつものようにサクッと、時にモヤツとしながら授業を受けていったぜ、と。内容は——えっと、理科だったかな？ 理科——だったよな。

「おーい、リヨウ、理科だったよなー!？」

「ん……？ マサキの声がしたけど、気のせいかな」

——聞いちゃいねえー……まあいいや。今日は水素と酸素を袋に詰めて、火を点けて『ドカーン!!』というのをやったんだ。当然理科室でやったのだが、学校中に響いていたらしい。——凄いなあ。これがあの国民的RPGゲームでいうイ○ナズンなのだろうか？ いや、規模的にはイ○だったな……。

——放課後——

「ふぁ~~~~」

「今は別にいいけどさ。授業中にまであくびしてんじゃねえよ、バカかお前は」

いやいや。あくびしたぐらいで怒るなよ。ホントにリヨウのやつはツンツンしてるなあ。え？ 状況を説明して欲しい？ よし、ちょっと待ってておくんはなれ。

オレンジ色の暖かい夕陽を背に受けながら、俺はいつも通りマイ

フレンズと共に帰宅する準備を進めていたのだ。で、もう一人のフレンドを待っているというわけだ。お分かり？

「ごめーん！ リヨウ、マサキ！これから本借りに行くから、先に帰つていて。ぼくもあとで行くから！」

「あいよ、分かった」

「ダッシュで来いよ」

俺とリヨウは彼の用事を知ると、先に帰ることにしたのであった。何の本だろうね。ラノベか？ いや、まさかな。それともマンガかな？ でも、ここにあんのは一昔前のやつしかなかったような。手塚治センセーのアレとかソレとか。

——あ、もう一人のフレンドの紹介が遅れた。スマンね。

栗毛の外ハネヘアーをした彼は、俺の幼稚園時代からの盟友・神戸レンだ。

漢字で書けば、『神戸 蓮』。『ハス』ではないぞ。ハスコラ呼ばわりしていじめるようなヤツは表に出たまえ。『本の角でアア』タタタタタタももももももア！！』の刑だからな。

明るい性格でツツコミ役を自称する彼だが、ぶっちゃけこいつは俺から言わせればボケだ。ボケボケのボケボケの、そのまたボケボケだ。どっちかというと。けど、そこが良いのだ。

ちなみにこいつは俺に比べればまだ浅いが……いや、俺以上かな？ ふかーいゲーマーだ。ジャンルは無○シリーズや戦国B○S○RA、クラ○シュバ○ディ○ーなど色々ある。かの国民的RPGも大好きだとさ！

軽くジョークを交えながら快くレンの頼みを承諾した俺達は、い

よいよ下駄箱へ辿り着いた。
そしてクツを履こうとした

「あ、マサキくーん。ちよつといい？」

――のだが。そこで、同級生の女の子が声をかけてきた。きれいな茶髪のセミロングに、吸い込まれそうなエメラルド・グリーンの瞳。手ごろなサイズの――

――おっと。

何が手ごろなのかは――分かるよね？ 別にセクハラしようってんじゃないからね！

#3

「あつ、エリカか。どうしたの？」

「この封筒、あなたのお母さんかお父さんかのどっちかに渡して、お金入れてもらってきてね!!」

集金の封筒をとともかわいらしく渡してくれた彼女の名は、山科エリカ。俺の隣のクラスである、1年D組に通う女の子だ。とてもマジメで一途で優しく、それでいて明るい健気な子。

不真面目なことが大嫌いで、不しつけない輩には容赦ない制裁を浴びせるのだ。また、生徒からは大人気で信頼も厚い! とくに男子にはね。でも、女子にも女子で大人気だぜ。

彼女には、実はこの学校で保険医をしているお姉さんがいる。その名は、山科エリノさんだ。すぐく美人で優しく、天然なところもある天女のごときお方だ。また今度、じっくり紹介しよう。

「あ、ああ、分かった。じゃあな〜!」

「絶対、忘れないでね?」

さて! そんなエリカと別れたところで、俺達は帰路につくとうよう。

——通学路——

俺は六波羅商業高校へはバスと電車を使って通っている。家から遠いんだよな。電車は何とかなるけど、バスは朝イチの6時58分を逃すと銀行前のバス停で待つしかない。——みんなも想像してみりゃあ、分かるはずだ。経験者なら尚更分かるはず。

結構大変なんだよ!？ 暇なんだよ!？
つついけータイをガチャガチャしちゃうくらい暇なんだよ!？

「なあ、レン」

「なんだい？」

「さっき、何の本借りてきたんだ？」

レンと合流した俺とリョウは、早速彼が何の本を借りたのかを訊ねてみた。

「へへっ、何だと思う？」

「ゲームの攻略本! (キリッ)」

レンは筋金入りのゲーヲタだ。ゲームソフト、ましてや攻略本なんてうっかり貸しちゃったら返しそうにない。そのまま借りパクさ。まあ、俺も人の事言えないんだけどネ……。

「ブブー、はずれ」

「……マジでエ？」

「なん……だと……?」

リョウも俺もこれには驚いた。いや待て、冷静に考えてもみよう。そもそも、だ。

ガッコの図書室に

本
な
ん
ぞ

置
い
ち
ゃ
い
ね
え
！
！
！

ゲ
ー
ム
の
攻
略

#3 (後書き)

実はエリノさんとエリカさんを間違えていました。

ご指摘ある前から気付いてはいたのですが……なぜ直さなかったし。そんな自分がはずかしいiiiiiiiiiiiッ

#4

「違う……だと……?」

リョウどうした。お前マジでどうしたんだ。俺もちょっとヘンだけど、お前はもっとその——ハイになっちゃったの!? リョウはクールキャラじゃなくなってるし、俺は普通に行こう……

「なあ、何なの? 違うなら何なの? ねえ教えて。教えてちょ教えてマジ教えて!!」

助詞がない? ——そんなの知るか。何故なら俺はこのときキョドるあまり冷静さを欠いて錯乱していたからさ! ほらこんな感じ何となく分かるだろ? え分からない? やだなー文章だけでも伝わるよな伝わるよなあ伝わら……ない?

「ふっふっふ。教えたところでマサキくんには分かるまいよ」

俺がキョドるのを見て嬉しそうに、レンは自分が借りて来た本を出した。ケツ、インテリぶっちゃって! お前普段ボケてるくせに、何で今日に限ってはこんなに冴えてるんだ。

「あっ! そ、それは……」

俺が面食らうのも無理はない。何故なら、それは俺の愛読書——

「じゃじゃじゃーん。なんと『デイブレ』の最新刊だッ!!」

『DAYBREAK OF DARK』——略してデイブレ。副題は『闇の夜明け』。ジャンルは王道の冒険小説で、評価は人によってまちまちだが、俺はとってもいい作品だと思っている。それはレンもリョウも同じだ。多分。

「おい、待てよレン。それ確か、いわゆるラノベの類だったよな？
なんでラノベが図書室にあるんだ？ 本屋さんの間違いじゃ……」
「うるさいうるさいうるさいッ！ 人の話を聞けエ、スケコマシども！！」

リョウがツツコミをすかさず入れた。しかし、自分で自分のクルキアラを自ら崩していることにはツツこまないようだ。——って、おいおい！ なんてひどい事を言うんだ、レンのヤツめ。誰がスケコマシだ。俺は女の子にひどいことするようなゲス野郎なんかでは、断じてないぞ！

「とりあえずクールになれよ、リョウ。な？」

「あ、ああ、そうするよ……うん」

「なあ、レン。えっと、それたしか5巻だよな？」

「そう。だから最新刊ってワケ♪」

デイブレについて説明しなければなるまい！ 1巻は旅立ちを描いた1章と新天地での冒険を描いた2章。2巻は砂漠の国が舞台の3章。3巻はリーネが初登場する4章と物語が第2部に突入する5章。4巻には洋画のごとくオッサンとスケベ野郎が冒険する6章が収録されている。

そして、最新刊である5巻ではお待ちかね！ リーネがメインの第7章が収録されているのだ。内容は海水浴に誘拐に観光に火山の探検——こりゃあ、おもしろいぜ！

ちよっとややこしい形式だが？ その章のストーリーが短い場合

は2つの章がひとつの章に収録される形式となっているんだ。

リーネは前述の様に4章から登場するんだ。メインヒロインにも引けをとらないどころかヒロインと仲が良い為、イケない人たちが二次創作で百合百合なSSなりマンガなりを同人誌に――

――いかん。俺もどうかしてた。好きな作品を語ったもんだからさ、熱くなりすぎちまったぜ――ちよつと屋上に来いや。松○修造さん？ 誰それおいしいの

#5

——ちなみにさっき言った『デイブレ』のメインヒロインは、金髪のくせっ毛ショートが愛らしすぎる『ラウム』ちゃんだ。服装は黒い神官服……とのことだが、ワンピースかドレスに近いやもしれぬ。そんな感じなのだよ。あとは腕に銀色のブレス。それとミュールだったかね。

——ま、そんなうんちくはさておき。

「俺達地方の在住でよかったよな」

「何だよ？」

「おいおい、リョウ。お前にや分からんらしいねエ。だってアレじゃん？ 最新刊の発売日と言うのは都会ならとくに売り切れてるモンだが、レンを見てごらんよ。場所によるけどねー、田舎じゃ発売日でもまだ売れ残ってたりすることがあるわけよ」

「え、そうなの？」

きょんとした顔でそう聞いてきたレンは、やっぱりボケだ。いやでも、逆のパターンもありうるけどな。さっきのは——。

「じゃあなー、レン」

「また明日ねー」

さて。お喋りしてるといつの間にか駅についていたお。俺はここから電車に乗り、降りる駅のバス停の1番のりばからバスに乗って帰路へつくんだ。

「ついでにリヨウもさいなら」

「冷たいなあ。オレはついでですかそうですか……」

こうして俺はいつも通り電車に乗り、降りた駅のバス停でいつものバスに乗って、銀行前から歩き――。

「ただいまー！」

おうちへ着いたのであった。

#5 (後書き)

マサキです。

みなさんは兄弟姉妹とかわいますか？

俺は妹がいて、親戚に叔母さんもいるんだ。
どっちもかわいくて美人なんだぜ♪

次回、『俺の妹がこんなに可愛いわけがあるだろ』
おいらのママンも出るぞ、お楽しみに！

#6 (前書き)

第二話 『俺の妹がこんなに可愛いわけがあるだろ』

#6

「ただいま〜！」

「おかえり、バカ兄貴〜♪」

「えーっ……」

やあ。オレは刃野マサキ。これ、決して罵られてるんじゃないんだよ。妹の、不器用なりの愛情表現なんだぜ。かくして、俺を罵るかのように、そう出迎えてくれたのは——正真正銘、世界にたった一人の妹だ。

「なあ、ルミ〜。いい加減、俺の事さー、『お兄ちゃん』って呼んでくれちゃったりしてくれないかなー？」

「ヤダ！ あたし、そんなガラじゃないもん」

俺のお願いには聞く耳持たぬ。妹はえへへと笑いながら、見事になじってくださいました。——ひっで！ ひどくない？ ひどいと思うよね……。

でも、それが妹のいいところだ。ツンデレの妹なんて、最高ではないですか。それにお母さんはおっとりした美人妻で巨乳。やっぱ俺って、まじリア充！

そうそう、彼女の名はルミ。漢字で書けば『留美』。リユーマンじゃないぞ……。って、それだったら中国人になっちゃうね。でもそれでいくとセレブになるし、まあいっか。

「そう言わなくてもいいじゃないか。ねえ？」

「ヤダヤダ。兄貴ったら、だらしないんだもん！」

またまたー。しかしだ。たとえ容赦なくなじつてくれても、踏ま
れたり蹴られたりしても、お兄ちゃんは諦めないぞ。何せ、妹はデ
レよりツン成分の方が強めなのだ。いつもこんな感じなのだよ。

ひでエと思うか、むしろご褒美として受け取るかはー、モニタ
ーの前のキミ次第だ。おい、見てるんだろ？ 知らんぷりしたって
ね、筒抜けだぜー！

「素直じゃないなー、ルミよ。お兄ちゃんはな、お前に俺の事をお
兄ちゃんって呼んでもらうまで絶対に諦めないぞォー？」

——え？ 『そういうお前はどうかんだ』って？ 君もバカだなー。
だいたい分かっているはずだよ。妹の成長を願うならば——恐らくは、
いや……絶対に後者だッ

どんな罵言雑言でも、どんなになじられようとも、どんなに、ど
んなに叩かれたり蹴られようとも——。いつも16時前から17時半
に帰ってくる俺へのご褒美だと考えれば、苦にならないッ！

「へへーんだ。やれるもんなら、やってみなよー」

ふふふ——。そうは問屋が卸さない。さあて、ウチへ上がろうか
の。

#6 (後書き)

※補足

なぜ留美で『リユーミン』なのかと言うと…

『機動戦士ガンダム00』という作品に、『^{ワン・リユーミン}王 留美』というキャラクターが登場するのですが、

それと『留美^{ルミ}』をかけたネタです。

中国で留美さんはリユーミンっていうんでしょうな、うん。

#7

「相手をよく見なさい。○ボタンで通常攻撃だ！」

「えっと、こうすればいいのー？」

帰ってきて早速、俺は妹にゲームをやらせてみた。え、勉強しろ？ うるさいなあ。今は妹と遊んでてそれどころじゃないんですヨ
オー！ あとでやるから別にいいでしょう。で、何のゲームかっていうと……まあ、その、アレですよ。お察し下さい。多分『キングダム』なんとか『王○心』とか——だったとは思うよ。

「よし、○を連打でコンボだ！ 敵を倒しなさい」

「うりゃー！ これでもかー！ おらおらー！！」

うは、ルミったらまじノリノリ。子供っぽくはしゃぐルミもかわいいのう。

「いいぞおー、ルミ！ よし、×ボタンでジャンプだ。今だ！ ジャンプしながら、攻撃しなさい！」

「あれー、外れた？ おっかしいな……」

「もう！ R2ボタンでロックオンしてないからだろうが！ オー
トに任せっぱなしはやめなさい！」

オート、マニュアル。このゲームは以上の2種類のタイプの照準で、敵をロックオンして視界に捉えることが可能だ。しかし、こちらが敵から離れすぎると意味がない。ちなみに、小型の敵がうじゃうじゃしている場合はオートがいいだろう。

この時にマニュアルにすると、やりづらいからね。ただ、マニュアルでもうまくL1ボタン……だったか？ それでターゲットを変

えられるから、要するに自分の腕次第というわけなのよ奥さん。

「わ、分かってるより！ げっ、強い！ うわぁ……こいつやばい。強いよー……にげよっ」と

「こっ、コラ！ 妹は、お兄ちゃんの言う事を聞くものだぞ！ 逃げちゃダメだ。シンジ君も逃げずに使徒サキエルに立ち向かったんだぞ！ 諦めるな、ルミ……！」

ルミは俺に比べて、どちらかといえば下手なほうだ。でも、ルミもクリアしたゲームは何本もあるし、普段アクションゲームとRPGばっかやってる俺に比べて――。

SLGとか音ゲーとか、ジャンルはルミの方が多くやってるな。ルミは、ルミなりに上手なんだよ。何しろ自慢の妹だからな、ふっふっふっ……。

「マサキ、ルミ。おやつよろ。ゲームばかりしてないで、たまには休憩してね」

後ろからおっとりとした、あまーく儂げな、しかし優しい美声が聴こえてきた。俺とルミの母さんである彼女の名は、刃野さきこ。

――最初に言っておく。かなーり、美人だ！ それでいて優しいぞ！！

そりゃあもう、周りからは俺とは歳の離れた姉弟、ルミとは歳の離れた姉妹と思われるくらいだ。知らない人から見れば、なおさらそう見えるだろう。

「うふふ。マサキとルミったら、ゲームしてるときは仲良しこよしなのね」

——はうう、わ、我が家の、我が家の地母神さまの微笑みだ——
！！
癒される。癒される。癒されるううううう

#7 (後書き)

※補足のこーなー

『○国心』とか『キングダム』とか書きましたけどもー
カンのいい方なら分かるはず、『キングダムハーツ』のネタです。

ちなみに無印のトラヴァースタウンの2番街のイメージで書きました(何

#8

「ねえねえ、アニキいー」

「なんだい、ルミ？」

ルミがそうやってきたのは、ママンが出してくれたおやつを食べてスナックタイムを絶賛満喫中のとき。

暑いよなあ。アイス、食べたいよなあ。

ルミー、あーいーすー。

「るみー、あーいーすー」

「唯ちゃんかっ！」

「そういうお前はターニアちゃんが好きでたまらないランドくんですかあ？」

『唯ちゃんって誰よ？』と思った方は、ぜひググってみてください。
REPEAT AFTER ME?

「えへへ。ねーねーアニキ、ところでさー、高校って楽しい？」

——楽しいかどうかと聞かれたら。

どうするかは、答えるまでもないだろう。

「あつたりめーじゃん！ 友達とおしゃべりすると楽しいし、何より宿題も家に遊びに行ったり誘ったりすれば教えてもらえるし。あと部活も楽しいんじゃないかな。俺は、帰宅部だけどネ……」

――帰宅部。そう、帰宅部。

俺にとって部活といえば、小学校高学年時のイラスト部とコンピュター部、

そして中学からずっとおなじみの帰宅部。

――何だよ、何だよ。そんな白い眼で見ないでくださいよー。俺アどうせ、文系で運動向きじゃないですよーだ。そんな俺を小ばかにしつつも見守ってくださいっている皆様に、これから帰宅部の素晴らしさについて語ろうと思ふ。おかしかったら、どうぞ笑ってくださいませ。

いいかな、帰宅部とはその名の通り帰宅することがすべての部活。
——じゃない、下校して帰宅することそのもの。

それをカッコつけて我々は『帰宅部』と呼んでいるのさ。楽しいんだぜー？

ちょっと大げさかもしれませんけどねー。ガッコからの帰りっていうのはねー、命懸けのエクストリームスポーツなんですよねー。ですよ、ですよねー。それが楽しいんですよねー。お客様。今ジヤ○ネットっぽく言ってみましたが、いかがです？

お分かりいただけましたよね？

「——ぬうおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおッ!!
なんとか、言ったらどうだあああああああああああああ
あああああああッ!!」

「うわ、アニキが……」
「あら、マサキが……」

「突然大声で叫んだ!？」
「そうみたいね」

「しかし、ただでさえ小学校の時から冴えないコンピュータ部だ
ったアニキが帰宅部ねえ……。キャハッ! 超だっさー♪」
「笑うなルミいいいいいいいいいいッ!! ……」

俺はもう、ぐうのおも——もとい、ぐうの音も出ません。

だがしかし、妹の罵言に喜んでいるのも事実。

「……ごめんごめん、さっきは取り乱しちゃったな。そういやあ、ルミは部活ナニしてたっけ？」

「むう、ナニよ、そのヤらしい言い方は」

妹が、妹がむすっとしてしまった――。

「ルミ、最近部活どう？」
吹奏楽部ではうまくいつてるのかしら」

あ、そうだ。確か吹奏楽だったよ、ルミは――。

「母さん、ありがとう！」

「？」

可愛らしい表情で首を傾げて、頭上に『？』マーク。俺のサムズ・アップでどんなレディーもイチコロだ、ブーン。

そして俺も、悪意も毒気もないうっとりとしたタレ目の前にイチコロだミャー。

#9

「うーん……」

まあまあかな、と言いたげな顔をしているな。でも母さんの前でもそんな事を言ってしまうえば、

『しょんぼりしそうだ』と思ったルミは――。

「どうしたの？」

「い、いや、何でもない。楽しいよ、吹奏楽部！」

ウソが下手だなー。なんていう俺の弦きがウソだ。

ややこしいが、要は俺が今ルミの言葉に対して呟いた一言がウソだったのだよ。

え？ 余計に分からない？ そりゃあ、失敬でござんしたねえ。

「あらあら、そうなのお。ルミが楽しそうで、お母さん安心したわ」

「エヘヘ♪」

「うんうん。微笑ましい光景だあ、これが母と子の愛情ってヤツなんだなあ。しくしく……」

——吹奏楽部を嗜む^{たしな}一方で、
高校に進学したらけいおん部か文化部に入部するつもりだとルミは
話している。

あちゃー、ルミ。俺の影響でそんな事に——。
やめとけー、リアルけいおん部は放課後ティータイムみたいに優し
くはないぞう——……。

お兄ちゃんはなー、お前を心配してダナ——。

まあいっか！ ナニ部に入ろうがそこでナニをしようが、ルミが決
めることだしな。
俺があーだこーだ言ったって無駄だよな。

—という事で翌日—

「……でさー、昨日ヒロユキたちとき。あのあとゲーセン行ってたんだよ」

俺がリョウやレンと話していたのは、いつものように昼休みのことだった。

リョウはあのあとダチとゲーセンに行き、レンは全力で家まで自転車を漕いだという。

あ、そうそう。リョウが言っていた『ヒロユキ』というヤツのことなんだけど、

そいつは1年B組の『寺辺^{てらべ}ヒロユキ』の事だ。髪染めててさ、少しはっちゃけてるヤツなんだよ。

「クラス違うのによく仲良くできるねえ、チミたち」

「それはー、僕に対するイヤミですかー」

棒読み調の抑揚がない口調でレンがそう言ってきた。

「いや、そんなつもりで言ったんではないんだ。許しておくれエ…」

∴
」

「うわーんひどいよマサキいー」

まだ棒読みを続けるか！

やめてくれ。俺の腹筋が、フツキングム宮殿が崩れてゆく！

#10

「そういうマサキくんはおうちへ帰って何してたのかな？」

「ぐぬぬ……」

くそう、レンのやつ。人を食ったような顔しやがって。

棒読み止めた途端にこれだよ！

「まったく、しゃあねエなア。これだから知りたがり屋さんは……」

なんかムカツ腹が立つので適当に、しかし分かりやすく三行にまとめて帰宅後の出来事を話した。

「はぁー、なるほどね。ルミちゃんだっけ？　いいよね、マサキんちは妹さんいて」

「君もお姉さんは大切にしなよ？」

「ふふん、分かってますよ」

ハッ、何を今更――。

ルミはかわいいからね。

これほどルミのお兄ちゃんとして生まれてきてよかった、と思ったことはないぜ。

「そういやルミちゃんの顔見てねーや。今度行っていいよな？」

「あ、そういやリヨウはまだ見てなかったね。ルミたんの顔とか」

「かわいいのか？」

「うん、とってm」

「あったりめーだろうがア、バカヤローこんなにやろーめエ！

ルミは天使のごときかわいさだ！ マジ天使だもん！ 今でこそツンだが、じきにデレる！

トゲがとれて素直になれば、大天使に昇格するぞお！」

なんという名演説――

これで俺に惚れたお嬢様、お姉さま方は今すぐ俺に愛の告白を！

――ただし、野郎は来るな。

俺はBLは嫌いなんだよ！！ 百合はオツケーだけど。

俺はな、BLなんぞに興味はねえ。

お姫様に恋して無双したいんだよ！

「――まあ、自慢話はおいといてだ。リヨウよ、あまりゲーセンでお金使うなよ？」

「む……」

「親御さんも心配するぜ」

「わ、分かった。肝に銘じて、今後は自重する」

「キリッが抜けてるぞォー」

「やかましいッ！」

――放課後――

授業も終わり頭が冷えた頃、俺はある事を思い出した。
集金袋を持ってきてはいたが、それを渡し損ねていたことだ。

「やっべ、エリカ怒ってないかなあ――」；

心配になってメールしたところ、今生徒会執行部の用事が終わった
んだと。

下駄箱でエリカが降りてくるのを、俺は待つ事にした。

「まーだーかなー……」

と、俺が思っていた矢先にエリカがやってきた。

「つて、おおッ！ エリカ様きたーッ！ これで勝てるー！！」
「マサキくーん、待たせてごめんねー」
「いやいや、いいんだエリカ。朝早くに渡さなかった俺が悪いんだし……」

「はい、これだったよな」

すかさず集金袋を取り出し、渡す。

「ありがとう♪」

わお！ エリカたん大喜びだっぜ。

「ハハッ、今日も一段と笑顔が素敵だなあ。お姉さんに似てきたんじゃないね？」

「えーっ、まだまだお姉ちゃんにはかなわないよお」

「ハハハ、ウブなエリカちゃんもかあいいのうw」

これぞ微笑みの爆弾かー。みんな、俺は今天使にふれたよ！

山科姉妹は、二人揃って天使のような笑顔を持つ。

彼女らの健気で穏やかな笑みを見ると、自然とやましい心は浄化されるのだ。

さあ、君もウォッシュユセよ！

心の中の世界のゆがみを、駆逐するのだ。

「今回のお金を何に使うか、楽しみにしててね♪」
「うん！　というかもう待ちきれないぜ！」

やだ、もうたまんね

結婚しちまおうかな！　でもまだ、婿として修行が足りないしなあ――。

#10 (後書き)

えっと、こんにちは。いや、こんばんはだったかなあ……。

山科エリカです。あたしにはエリノっていう保険医のお姉ちゃんが
いるんですけど、

すごく美人で優しいの♪ そんなお姉ちゃんに恋してる人がいるみ
たいなんだけど……

でもお姉ちゃん鈍感だからなあ、気付いてもらえるといいんだけど
ね。

次回、『とある高校の保険医^{マイエンジェル}』！ お楽しみに♪

登場人物のコーナー（前書き）

三話行く前にどうぞ！

※ネタバレあるので気をつけてください！

登場人物のコーナー

刃野マサキ

性別…男

年齢…16

誕生日…10月21日

星座…てんびん座

身長…180cm

体重…72kg

趣味…ゲームにマンガにパソに、それから……あーもう数えてらんねー！

家族…父、母、妹

好きなもの…DS及びゲーム全般（ただしホラーや手強いシミュレーション等は守備範囲外）、かわいこちゃん、セクシー系お姉さん、プリティー系お姉さん

嫌いなもの…不真面目なヤツ、馴れ馴れしい態度をとる後輩、納豆（匂いの時点でもうイヤ）、レディの扱い方を知らないマダオ

好きな色…黒、紫、藍色

主人公。

ゲームや漫画、アニメ等を愛し、礼儀と位階ヒエラルキーを重んじる真面目なオタク系好青年。

だが、普段からハイなテンションのせいでクラスのコメディリリーフになりがち。

中学時代に暇さえあれば英和辞書や和英辞書を読み漁っていたため、英単語に明るい一面も（ただし、知ったかぶりも多い）。

妹のルミと仲は良いがなかなかお兄ちゃんと呼んでももらえず、苦戦する毎日。

フェミニストで男には厳しいところがあり、とくに女性の扱い方も

知らないような輩には容赦がない。

神戸レン

性別…男

年齢…15

誕生日…2月1日

星座…みずがめ座

身長…170cm

体重…54kg

趣味…ゲーム、深夜アニメの観賞、テレビ観賞

家族…父、母、姉

好きなもの…無双できるゲーム、アクションアドベンチャー、RPG
嫌いなもの…嫌いなわけじゃないけど少女とシヨタに興味はありません

好きな色…水色

■マサキの盟友とも言うべき少年。だが別のクラス。

幼稚園時代からの付き合いであり、お互いによくゲームや探検などをして遊んだ仲。

最初は単なるゲームとアニメが好き少年だったが、中学になった辺りからオタク化が進行し今に至る。

ツッコミ役を自称するがリヨウで間に合っている上、むしろボケの方が多い。

最近、オタク化どころか空気化も進んでおりガチで危ない状態。彼の明日はどっちだ

けいおん部では梓が好きらしい↑

氷室リヨウ

性別…男

年齢…16

誕生日…7月23日

星座…かに座

身長…168cm

体重…48kg

趣味…アニメ観賞、マサキをからかうこと

家族…父、母、弟

好きなもの…幼女、美少女、ひんぬー

嫌いなもの…巨乳（完全に、というわけではない）

好きな色…黒、緑

■クールなマサキの同級生で、高校に入ってから知り合い。

皮肉屋かつ苦労性で、ヒンニュー教徒。ただし巨乳が完全に嫌いと言う訳ではなく、

ただ単に苦手意識を抱いているだけである。主にツツコミ担当。普段は冷静だがその本性はロリコン。

しかし決して年上キャラや熟女をババア呼ばわりするような低俗な輩ではなく、各々の魅力と存在意義を理解している好青年。

山科エリカ

性別…女

年齢…15

誕生日…8月24日

星座…おとめ座

身長…158cm

体重…44kg

趣味…花の水やり、友達としゃべる事

家族…父、母、姉

好きなもの…家族、クッキー全般

嫌いなもの…トマト、暴力を振るう人、不真面目で校則を破る人
好きな色…赤

■マサキの同級生でマサキと同じクラス。学級委員であり、ゆえに真面目な性格のしっかり者。

その可愛らしい容姿と誠実な性格からか、男女問わず生徒からの人気はすこぶる高い。

六波羅高校で保険医をしている姉『エリノ』を持ち、彼女もまた人氣が高い。

ゲームはぷよ○やPSPのボカロの音ゲーをたまーにするぐらいだが、割と上手。

薙屋リサ、薙屋ゆうこ

性別…女

年齢…16

好きなもの…たこ焼き、お好み焼き、広島焼き、阪チンタイガーズ
嫌いなもの…小日ドレイクス

■大阪から通学している双子の女子生徒。どちらも関西弁を話し、お喋り好きな方が姉のリサ。彼女に比べて大人しい方が妹のゆうこ。

寺辺ヒロユキ

年齢…16

好きなもの…肉、女の子

嫌いなもの…かぼちゃ、自分以外の野郎ども

■1年生でもきつての問題児。というかバカ。

髪を茶色く染めているためヤンキー臭く見えるが、実際は少しやかましいだけで気のいい男。

エリノ先生にぞっこんだが彼女の元へ向かうためには手段を選ばず、それが原因でマサキから目の敵にされている。

最近打ち解けたが、いじられキャラというぞんざいな扱いに。ひでえ……。

敦賀ミカ

性別…女

年齢…15

■いつでも強気な女子生徒。負けず嫌いで陽気なアネゴ肌で、クラスでは慕われている人格者。

マサキ曰く『ガラが悪いけど気のいいねえちゃん』。C組の橘とは仲良し。

橘アヤ

性別…女

年齢…15

■C組に咲いた一輪の花。やや控えめな性格の草食系女子だが意外にも肉系がお好きらしい。

ダディではない。ついでにいうとギャレンでもないし、ダディアーナザンでもない。

山科エリノ

性別…女

年齢…23

好きなもの…母が作ってくれるオムレツが好きです

好きな色…こむぎ色

■六波羅商業に勤務する保険医のおねーさん。

おっとりポワポワしていて、天使のごとき笑顔には男女を問わず誰もが癒される。とくに男が。

その麗しの天使さまに寄ってくる男はたいがい思春期の下品なサルなのだが、彼女はそんな連中にも分け隔たりなく接してくれる。

また、マサキ曰く『ボインで優しいし年上だし、エリノ先生マジ天使。いや女神だ（キリッ）』。

何より、きれい。かわいい。エロいだス。↑おまえら……

刃野ルミ

性別…女

年齢…14（※中3）

誕生日…3月22日

■茶髪のツインテールをした、マサキの妹。兄のことが大好きだが素直に『お兄ちゃん』と呼べないツンデレお嬢であり、

いつも兄の事を罵るように『（バカ）兄貴』と呼んでいる。3月生まれの為、兄とは年齢が2つ違う。

刃野さきこ

性別…女

年齢…禁則事項よ〜♪（ホントは35よ〜）

■マサキとルミの母。艶のあるお肌と、流れるようなまさに濡鳥ともいえる黒いロングヘアーを持つ。

二次の母としてはかーなり若い（外見、年齢共に）、どうやら高3の頃に学生結婚した様子。

おっとりしていて、何から何まで全部エロい。マサキがあそこまで元氣なのも、彼女のグラマラスな肢体を見て育ったお陰だろう。

ちなみにどこが一番グラマーかというと……お察し下さい。

#11 (前書き)

第三話 『とある高校の保険医』
マイエンジェル

#11

あっついねー。

今日も、あつがなついねー。

——それは、春も過ぎてやってきた、ある初夏の日のことだった。

俺たち1年生は体育の授業でグラウンドに出ていたのだが、これがもう白熱しまくってさ

クラス対抗で、全速力で走る俺たち。

D組からは俺が、A組からは大阪から来ているという双子の姉妹の姉である薮屋リサさんが、

B組からは寺辺ヒロユキが、C組からはレンが、E組からは気の強い敦賀ミカさんがそれぞれ代表として走ることになっていた。

女子二人には悪いが、この勝負——負けるわけには、いかないんだ。

「お前さあ、独り言でナレーションとか恥ずかしいからやめてくれよ。顔から火い噴きそうだよオ……」

「そりゃあ悪うござんしたねえ、氷室さん……ケツ！ ケツ！！」

「こらあ、刃野オ！ D組代表のお前がこんなところで何をボサツとしている？ さっさと持ち場につかんかア！！」

「げええシンスケ先生！」

このちよつとテンパな髪した男の先生は、『長浜 シンスケ（伸輔）』さん。

ノリがよく、それでいて真面目で剛毅な体育会系の先生ズラあゝゝ。

ただ、ちよつとキビシーんだよこのオッサン。でも俺らには厳しくても女の子には優しいんだよなあ。

女の子に媚び売ってモテようとは、ふてぶてしい！

そんなセンサーに俺は引っ張られ、持ち場に着いたのであった。

全力で走る俺たち。

「負けへんで」

「こっちの台詞だい！」

「この戦い、勝たせてもらう！」

「勝つのはあたしよ！！」

なんてみんな強気で呼びかけながら、
それぞれスパートをかけていたが――

「あゝあああ――――ツと足すべったアアア！！」

なんとここで、ヒロユキが転倒！

まあ、この時は頑張りすぎてコケたと、思っていたさ。

だが――現実には、違っていたのだ。

やつは、『わざと』転んでヒザをすりむいた。
理由は、保健室にいるエリノ先生に会うためだ。なんて、
なんて汚いんだ。

汚いマネをしたこいつに俺のエンジェルを、女神様を汚させるわけにはいかぬッ！

「ウヘヘヘ、これで天使えりーんはオレの嫁！ ヒヤッホーイ！！」

「――寺辺ヒロユキ、油断のならぬヤツだ……」

授業を終え、休み時間。

きみよんな笑い声を上げながら保健室を目指すヒロユキを、俺は追跡することにした。

ヘラヘラ笑いやがって、あんな大ケガして痛いと思わないのか？
おかしいヤツだ――ヒロユキ、お前はどうかしてるぜ！

ここからは俺のターンだ。断罪だ！

エリノ先生を傷つける悪しき魂に天罰をくだしてやる！ ザッツァ
――パニッシュ！！

「も、もう少しだ。もう少しでエリノ先生が待っている保健室に……待っててね、俺のえりーん!!」

えりーん——はっ、えりーん!?

い、いかんいかん。俺は、東の方は守備範囲外だ。

何を言って——

とにかく。

「なんて不埒なヤツ。エリノ先生は、俺のエンジェルなのに……。よし、ストーカーしちやる。あ、いや……。不埒者めエ……。俺が、俺が成敗してやるッ！」

こうしてヒロユキを尾行したのはよかったのだが――

「マサキー、お前ここで何やってんだ？」

「えゝゝゝッ!? りよ、リヨウ……お前、なんでここにいのォ!?」

#12

びっくり、サプラアアアイズッ!!

まさかりヨウにあとをつけられていたとは思わなんだ。

「い、いや、あの、その、ね……えっと……あつと……」

「何だよー。遠慮しないで俺に言ってみ？」

そう言われたんじゃない仕方ねエー——話してやるか。

「実は……かくかくしかじか」

「……そうか。そいつはけしからんこった。ヒロユキの野郎……お灸をすえてやろうぜ！」

リヨウに正直に説明したところ、あいつは独りでにヒートアップした。

やめれ、暑苦しい。お前クールキャラじゃなかったのか。わけわからぬ……

まあいいか。

付き合ってやるとしよう。

元はといえば俺が思いつきでとった行動だ。やりかけでドブへ捨ててしまうのは、もったいない。

「お灸じゃ足んないよオ……引き摺り下ろして細切れにしてやる！」

「ああ、血祭りにあげてやろうぜ！」

「……あのー、そこまで言わなくていいんだよ」

リョウのやつ——暑さで頭をやられましたか？

いや、これは絶対やられたな。でなきゃあんなに過激な発言はできねーもん。

いつもあいつはクールだから。それともオーバーフローを起こしたか？

まあ、いろいろあったんだけど、

俺達はストーキン……げふんげふん、尾行ミッションを始めることにしました。

「俺のえりょーん！ えりょーん！！ えりょーん！！！」

——ダメだこいつ。俺が言うのもアレだけどさ、こいつ本当にどうかしてるよ。

頭に砂でも詰まってんじゃないのか？

こうしてヒロユキのやつはことごとくエリノ先生を愛称で呼んだり、まるで自分の彼女にでもしたような気分で呼び捨てしたりしながら保健室へ向かっていた。

奇行さんまいだ。こいつのイカレ具合には心底ゾーツとさせられる。

ホラーゲーでおばけ屋敷の探索してるみたいだよ――

――寺辺エ！

いや、松野だったか？ どっちにしろ、あのバカのような不埒者――
この俺が放っておくわけがない。絶対に許さない。

絶 対 に だ ！ ！

「――首を洗って待ってやがれ、寺辺ヒロユキイイイイ！……！！」
「なに叫んでんだ、耳がア！ 死ぬう！！」

リョウよ、何か言いましたか。
俺には聞こえませんでした。声が小さいぞ。

まあいい。尾行ミッションを続けよう。

#13

「……こちらマサキ」

「どうやら潜入できたようだな」

「ああ。現在、目の前にTHを発見した。ヤツの尾行を続ける」

「……健闘を祈るぞ」

氷室大佐を隣にたずさえ、俺は今回のターゲットであるHTを追っ
ヒロユキ・テラベ
ている。

——HT、許すまじ。

ヤツは、世界の歪みだ。

世界の歪みは——破壊するっ！！

「大佐、THは保健室へ入ったようだ。これからやつを追い詰め、
駆逐する」

「健闘を祈るよ……って、オイ！　いつまでやらせんのだ？」

——なんて、メ○ルギアごっこをしながら俺達はTHを尾行していた。

「えー、それはひどいな。キミがそんなにノリの悪いヤツだったなんて、見損なったよりヨウ」
「あのなー……もう目の前なんだし行ってこい。ホラ！ 早くしな
いか！」

「へーい」

いよいよ悪くて厄介でうっとうしいお友達とご対面サ。

さあ、突入だ！

ー保健室ー

「失礼しまー……」

「失礼チョリース！」

むかつくのでヒロユキの声を大声で遮ってやった。ハッ、ざまあねえな。

——まあそれはさておき。

作戦はこうだ。こうだ。こうだあああああああああああああああああ
ああ！

ヒロユキと一緒に保健室へ入り、シメる。

以上。

「あら、マサキくんと、それにヒロユキくんね」

このおっとりした、黒糖のように甘く、ふわふわしたウールのよう
なゆるーい声の持ち主は、

他ならぬ、六波羅商業の天使。保険医の『山科エリノ』先生だ。

彼女の名を聞いてピンと来なかったかな？

そう、いたよねえ。俺のクラスメイトに、学級委員の山科エリカさ
んが。

そう、エリノさんは彼女の実の姉なのだ。これ、ホント。ウソじゃ
ないよ。

「へへ、エリノ先生。あのおー、そのおー、なんつうか、そのね、
ヒザすりむいちゃってエ」

「そうなんだ。先生が診てあげますね」

「ギギギ！ くそッ、寺辺エ……」

#14

「ついでだし、マサキくんも診てあげましょうか」

「いえ、俺の病気は、……恋の病です！」

俺の告白アタック！——しかし効果はないようだ。

エリノ先生は俺をウザいと思ってはぐらかしたのではない。

彼女は天然さんで、恋に鈍感。素でこういう反応をしたのだ。

「うは、告白失敗してやんの」

こいつめ……よほどあとでよしもののハリセンを食らいたいらしい。

「うーん、そういうの、わたしにはよく分からないなあ。専門家の人の方が詳しいと思うよ」

「ははっ、そうでしたね。すみません……」

―保健室前 廊下―

「失礼しましたー……さて、と」

俺はヒロユキの耳たぶを掴み、体育館の裏へと連行した。

「お、おい、何しやがる！ イジメか!？」

「そんなじゃないよ！ とにかくついて来い……」

体育館裏。

口笛を吹くと同時に、リョウとレンが推参！

「完璧イジメじゃねーか?!」

「ちゃうちゃう、ちゃうー。イジメなんかとちゃうー、個別指導やあ」

「こ、公開処刑かなんかと間違えちゃいねえか?」

お前の言い訳なぞ聞くものか――

「さあ答えろ。なぜ今日の体育の時、お前はわざと足をすりむいたんだ?」

リョウが気迫のこもった尋問をはじめた。
レンと俺は後ろで待機。

「え、エリノ先生に会いたいから……」

「……そっか、お前もエリノ先生のこと好きみたいだもんな」

首をへし折ってやろうと思った。そのくらい俺は目の前の不真面目なやつに対してイライラしていた。

でも許そう。エリノ先生を愛するもの同士だからね。

「よし、いいだろう。さっきはすまなかった。お詫びとして寺辺、君を山科姉妹ファンクラブの会員第一号として迎え入れようじゃないか」

「そんなのあったっけ？」

レンもリョウも、そして寺辺が驚くのも仕方ない。たった今作ったからだ。

「なんだよ、辛気臭いなア。よし！ そろそろ教室戻るぞ！」

そして――授業へ戻る。

さっきイライラした反動かすげえ眠い。先生のティーチングをシカトして居眠りしたい気分だ。こういうときに限ってお日様も気持ちよく、つつい眠気が……

「3かける2のにじょーとか、わけわかんねえっしょ……ぐごおー」

あ、寝ちゃった。ヤバイ、先生きつと怒るぞ。

「あーあ、俺もうしらね」

この時、リヨウは汚物でも見るような視線で俺を見て呆れていたらしい。酷い話だよな――。

#14 (後書き)

最初はキレたマサキが本当にヒロユキの首をゴキツとやってしまうシーンを入れる予定だったのですが、

それだとこの小説の雰囲気に対応しくない陰鬱な展開になってしま
うのでやめておきました。

っていうか、書き出す寸前で仲直りする展開にしてよかった（^^；

#15

―翌々日は、土曜日―

「おっ、今日のファルコンズは強いな。かっこいいぞ！」

「負けるな小日い！」

いろいろあった俺だけど、ルミやママンと一緒に野球中継を見ていた。

今日の試合は楽珍ファルコンズVS小日ドレイクス。

俺は楽珍を応援していたのだが、なぜかママンとルミは小日を応援していた。なにゆえ――

「アッー！ バッターアウトだ、楽珍が優勢だったのにー！」

負けちゃった、ドレイクスが。楽珍なんかに、何故だ。

「今日の小日は強かったわねえ、あのピッチャーはカッコよかったと思うわー」

「そ、そうだよねー。あはは……」

ママンが言うなら仕方ない。っていうか、ママンが発言するだけで

場が和むんですが！

ルミはソファの方でケータイをカチャカチャ。俺はママンとまったりお茶とおかし。

「ルミ、ケータイばっか触ってたら目が悪くなるぞー。おやつにしようなー」

ルミは気だるそうに返事をする、すぐテーブルにやってきた。いつつもバカバカ言うけど、なんだかんだ言って俺の事好きなお兄ちゃんっ子なんだよな。

だが、もし……ルミが別の男に盗られたらと思うと……。

く妄想しようそうしようく

知らない男と妹がデキていたら。パターン1。

「じゃあルミちゃんに言うぞ、あんたが妹離れできてないってこと。そして俺と何度も戦っているということを」

道端でこんなやり取りが始まったら、俺は見知らぬ男にきつところ言うだろう。

目を見開き、鼻の穴を開いて。

「そんなこと言ってみろ……オレアクサムアヲムツコロス!!」

あ、舌がオンドウるった。

「嫌われるよ、おしゃべりすぎるヤツは」

たとえキレても俺は笑顔を欠かさない。怒りんぼは嫌われるでの。

で、マジな顔になり。

「……誰にでも言われたくないことがある。忘れるんだな（キリッ）」

そして、またにこやかな顔で妹を盗った男とさよならバイバイする。

あるいは――彼氏に盗られる前にルミをやってしまうか。

パターン2。

「ルミ」背後からマサキがルミの肩を掴んだ。

「お前に涙は似合わない」

マサキの暗い眼差しにルミの体がピクツと震えた。

「お、お兄ちゃん」

だが、それ以上ルミはなにも言えなかった。ルミの口をマサキの唇が塞いでいた。

Tシャツの下にルミの手が入ってくる。

ブラジャーが引き裂かれ、白い乳房があらわになった。

やめて、お兄ちゃん！

ルミのジーパンが一気に膝の下まで下ろされる。

ルミは激しく抵抗した。マサキの顔に爪を立て、胸を叩いた

――いかん。これでは近親相姦じゃないか。これって冷静に考えたら犯罪じゃないか。

ダメじゃん俺、何やってんだ！　っていうかルミが俺のことをお兄ちゃんって呼んでる！

気を取り直し、パターン3。ライダーバトルというこう。

たたかいをやめさせようと、れんもやってきた。

れん「みんな、ライダーどうして　たたかうのは　やめようって！」

かれし「じゃあ、まず おまえから しんでもらうか」

こういうゴチャゴチャした戦いは嫌いだ。なので俺は巨大な牛の口
ボミたいなモンスターと契約して、マグナバイザー持ってルミの彼
氏をムッコロす。

おれ「みんなよけろ。ルミのかれしだけはゆるさない。」

おれは ルミのかれしに ファイナルベントを
あびせる つもりだぞ。

かれし「へん、ばかめが。やれる ものなら やって みろ！」

そして、発射！発射！発射ああ！！

かれし「おまえが くらえーっ！」

ひろゆき「なに？ぎゃーっ！」

ひろゆきは ルミのかれしに たてがわりに されて しんだ。
ルミのかれしは ひろゆきの モンスターを てにいれた。
なにを たくらんでいるんだ？

りよう「なんてやつだ！」

かれし「へへへっ、ゆかいだぜ」

アレ、ヒロユキがガードベントされて死んじゃったぞ、まあいっか、ヒロユキだし。

「兄貴！」

ゝ妄想終わりゝ

「な、なんだいルミ……」

妄想から目を覚ますと目の前にはルミが。その傍らでママンが優雅に微笑んでいた。

何があったんだ？

ふと、ぼやけていた目を凝らすと。

——ポツキー？ 何をしようというんだ。まさか……。

「兄貴、ポッキーゲームやろ」

「え」

ポッキーゲーム……とは、ポッキーなどのスティック状のスナック菓子を用了たパーティゲームのひとつ。

2人がポッキーの両端をくわえて同時に食べ進むゲームであり、合コンや酒宴で行われることが多い。

明確なルールは存在しないが、一般に遊ばれている場合はいくつかルールがある。めんどいから割愛するけどね。

「わたしも参加するわよ♪」

なんと、ママンも一緒。

——至福だ。実に至福。萌え殺されても文句は言えぬ、余は満足じや。

#15 (後書き)

原文はマサキがヒロユキに対する尋問でやらかしてしまった為、彼の家まで謝りに行く…という出だしでしたが、ちよつと重い展開なのでカット。

その代わりルミとききこママンとの交流、マサキの妄想を入れしました。

ちなみに妄想の元ネタは、上から順に

- ・仮面ライダー剣6話の、ムツコロさんがキレるシーン
- ・仮面ライダー555のノベライズ版のとあるシーン
- ・たのしい幼稚園版仮面ライダー龍騎の、王蛇様専用ガードベントのシーン

です。

#16

―山科家―

ちよろちよろ……と、

庭の花壇を彩る花に水をあげて楽しそうにしているのは私、山科エリカです。

今日は休日。

高校で保険医をしているお姉ちゃんも一緒です。

一人暮らしをしていたお姉ちゃんのもとに預けられる……っていう形でこの家までやってきて、一緒に暮らしているの。

パパもママも多忙で、自然とこうなっちゃったのよね。

「最近こういう人多いよねー」

テレビでアニメや漫画のキャラのコスプレをしている人たちのニュースがやっていて、

それをお姉ちゃんと見ていました。私は、

「変なのー……」

と思いました。お姉ちゃんはなんだかそうでもなさそうです。

「えー、そうかしら？楽しそうで、いいんじゃないのー」

お姉ちゃんはいつもこんな感じですよ。はんなりしています。でも、それがいいのかも。

―神戸家―

「B連打B連打、B連打……！」

「レ〜ン、そいつさっさと進化させた方が――」

「うるさいよ、僕はこのいつをこのまま育てる！ 進化したら技を覚えるレベルが上がっちゃうんだもん！」

それは休日のことだ。

なんで山科家に俺を放り込んでくれないの！と神様に怒りつつ、俺はレンの家に遊びに来ていた。

――いや待て。

この世に神はいない。

神なんて元はといえば空想の産物だ。熱心な信者が勝手に『妄想する俺kakeeeee!!』みたいなことって、厨二病丸出しで考えたに違いない。

いいや、絶対そうだ。神様考えたやつは誰だか知らないが、いい歳して心は厨二のやつに決まってる。

ああ、ばかばかしい。なんてはずかしいんだ。

――え？ 待てよ。じゃあ――

「俺の女神様は実在していなかったのかア？！ え、エリノ先生
エ〜〜！！」

「うおっ！ マサキが発狂した！？」

俺の心の叫びがのどを伝わり響き渡った。
いや、声に出しちゃったからそうとは言わないよね。

——ってか、発狂したとは不届き千万！

あすの朝日は拝ませないぞ、レンエ……

#16 (後書き)

神戸です。『こうべ』じゃないよ。

テストってあるよねー。アレってお母さんに見せるの恥ずかしくてさ、

点数の高さと低さは関係なしに捨てたり隠したりしちゃったよねえ。みんなもテスト隠したりビリビリ破ってポイしたりしませんでした？えっ、ない？ そんなバナナ。いやバカな……。

まあいっか。次回、『最強最悪の敵』！ ……えっ！？

#17 (前書き)

第四話『最強最悪の敵』

#17

遊ぶ。遊ぶったら、遊ぶ。

今日もいつも通りに帰宅した俺は、勉強をカカツとすませ早速ゲーム遊ぶ。

これ、機種こそダブルスクリーンだけでも、グラはきれいだし音楽も神曲揃いだしで、

神ゲーのにおいししくないのよ。俺が好きなシリーズの、待望の新作っちゅーもあるね。

いやっぱり、任○堂のロールプレイングはハズレなしさね。
好きで良かった。これからも良ゲーをじゃんじゃん作っていただき
たい。

……ん

レンからメールだな。どれどれ――

「『来週期末だぞ』、と。

………えっ?! 期末だって!?!」

『何だって、それは本当かい?』

ここは草加にまんまと騙される木場を演じてみせよう。

『レン、ウソツカナイ』

「……えーっ、先生そんなこと言ってたかあ?」

俺はそんなの信じねえ!

——と言いたいところだが、冷静になれ、俺。

先生は確かに、期末があると言っていたかもしれない——

「ああっ! 思い出した……確かにそう言っていた」

期末試験——ゲームというなら、ラスボス。ではなく、ラスボスより手強い中ボスだ。ああっ、恐ろしい。

「できる。容易に想像ができるぞ、勇者が期末試験という名の大ボ

スに苦戦する姿が……
そんな勇者を助けに現れる、もうひとりの勇者……作業用BGM
ッ
！！」

ヤツにハンパな攻撃は通用しない。正攻法ではダメだ。
勉強して経験値をためないと。こういうときは、はぐれていてメタルなヤツがオススメなんだが……どっかにいないかなあ。

ー翌日ー

「えっ、え、エリカ！ いや、エリカさーん！」

この際だ、勉強もよくできて可愛いあの子に力を借りよう。
あの子ならきつと助けてくれる！

「なにかしらー？」

「……頼む。俺に、俺に力を！ 悪しき期末試験を討ち滅ぼす力を
っ！！！！」

必死だった。猫の手も借りたい気分だった。

なんてやってたら本の角で思い切りしばかれた。



「教科書とノート貸してあげるけど、その代わり二度と校内で悪ふざけしないでください！ わかった？」

「も、もうしません……」

そうだ……エリカさん、超がつくほどマジメな子だった。

#18

―刃野家―

「よっしゃ、テンション上がってきた。首を洗って待ってろよ、期末試験！」

エリカから貸してもらったノートと教科書――というしかるべき資料を参考に、俺はさっそくテスト勉強に取り組んでいた。

いやあ、分かりやすい。シチュエーションもよかったし至れり尽くせりだね。

「……トランザムッ！」

トランザム、それは一時的にスペックを3倍に上げ火力や機動力を向上させる『切り札』。

詳しくは、機動戦士ガンダム00を見てちょ。

トランザムしたおかげでスラスラ進むぞら。

さしずめ、エリカのノートと教科書はオーライ〇ーだなっ！

……と、このようにトランザムっちゅーもんはすごいのだが効き目が切れるのはい。

サラマンダーよりはやーい！

スペックが低下し装甲もろくなる……。よーするに、パワーアップの反動で弱体化してしまうのだ。
と—————っても危険なのだ。

「つ、つかれた。お茶とおかし……」

みんな、確かに勉強は大事だけど無理しちゃいけないぞ！
こまめに休憩入れながら、じっくりしっかりやっていこうぜ。

—翌日—

「めんどくせー、ド○キーやろーっと」

1日休む。

—翌日の翌日—

「うおおおおおおおおお！！」

1日がんばる。

—そのまた翌日—

「だりー、久々に詰んでたト○プリでもやるか」

1日休む。いいじゃん、ちょっとぐらいサボったって。高校生だもの。

―翌日の翌日のそのまた翌日―

「一夜漬けだあああああ!!」

最後の手段・一夜漬け。

ハイリスクだが、期末の勉強をサボったからにはやらねばならぬ。
ならぬと言った!

―運命の当日―

マサキ「チクショオオオオ!くらえ期末試験!新必殺一夜漬剣!」
期末「さあ来いマサキイイ!オレは実は一回ペン回しされただけで
落ちるぞオオ!」

(ザン)

期末「グアアアア!ここのザ・難関と呼ばれる期末テストが…こ
んな小僧に…バ…バカなアアアアア」

(ドドドドド)

期末「グアアアア」

中間「期末がやられたようだな…」

卒業「フフフ…奴はテストの中でも最弱…」

新司法「人間ごときに負けるとはテスト四天王の面汚しよ…」

マサキ「くらええええ!」

(ズサ)

3人「グアアアアア」

マサキ「やった…ついにテスト四天王を倒したぞ…これで就職試験のいる指導城の扉が開かれる!!」

「よく来たなソードマスターヤマト…待っていたぞ…」

(ギイイイイイイ)

マサキ「こ…ここが指導城だったのか…!感じる…ベルゼバブの魔力を…」

就職「マサキよ…戦う前に一つ言っておくことがある お前は私を倒すのに『面接』が必要だと思っているようだが…別になくても受かれる」

マサキ「な 何だって!?!」

就職「そしてお前のPCはやせてきたのでお前の部屋へ解放しておいた あとは私を倒すだけだなクックク…」

(ゴゴゴゴ)

マサキ「フ…上等だ…オレも一つ言っておくことがある このオレにすっかり消してしまった画像フォルダがあるような気がしていたが別にそんなことはなかったぜ!」

就職「そうか」

マサキ「ウオオオオいくぞオオオ!」

就職「さあ来いマサキ!」

マサキが内定もらえると信じて…! ご愛読ありがとうございます!

えっと、すまん。分かりにくいので噛み砕いて説明しよう。
三行でね。

- ・エリカにノートと教科書を返却
- ・テストはスラスラ解いてやった
- ・あとは結果を待つだけだなクックク

ざつとこんなもんだ。

あゝ……これだからテストはやなんだ。ただでさえ普段使わない頭をフル稼働させなきゃならねーんだぜ？
めんどくせえったらありやしない。

そうだ、帰ったらゲームしよう。

#19

それはある帰りのバスの中でのことだった。

「あっ……盗まれてるうゝ！」

俺はケータイをカチャカチャ触ってアプリでゲームをやっていたのだが。

「おれのチキンが喰えねえのかあゝゝゝ！？」

ふとケータイをしまい、外の景色を眺めていたら言い争う声が聞こえてきた。

自分の向かいで酔っ払いのおっさんが、わけの分からない事を言いながらきれいなお姉さんに絡んでいたのだ。

おっさんの方は見るからにくたびれていて、お姉さんのほうはおっとり系の優しい人だった。

「やめてください、離して！」

か弱いレディが襲われている姿を見て俺がブチ切れ金剛にならないわけがないだろう。

天誅だ！ 天誅を下してやる。

「あ、あんた何やってんだ。その人から離れてください！」

そこから先は、さながら電車男のよーな展開だった。

「助けてくださってありがとうございました。あの、よければお名前を……」

俺は酔っ払いを追い払ったことでお姉さんから感謝された。とても癒される笑顔だった。俺も嬉しくて、ちよっとテングになっちゃったくらいだ。

「名乗るほどの者ではありません。それじゃあまた、どこかでお会いしましょう」



「つてことがあったワケよく、そのおねえたんとはその後会ってないけどな」

「てめエ……フラグ立てやがったな……ギギギ」

何があったかというと、この前あった出来事をリョウたちに話してあげていたのだ。くふふ、あのクールでキザなりョウが嫉妬に狂う顔は実に愉快じやうのう。

「つまりそのお姉さんはエルメスたんで、マサキが電車男ってことか。でもさ、君って場所的に電車じゃないでしょ」

「バス男ってか？」

3人で納得すると、豪快に笑い飛ばした。

ただ、廊下からも聞こえるほどでかい声だった為エリカに注意されてしまった。

ダメじゃん俺、最近エリカたんに怒られてばかりだお。このままじゃ嫌われちゃうお……。



その人の噂は、何度か聞いたことがある。

その人はとてもケンカが強いと、聞いたことがある。

その人はガラがすごく悪いと、聞いたことがある。

「今日も先公うざかったなあ！」

「ホント、ホント！ あんなキモガリ野郎より美人な姉ちゃんに教えてもらうほうが嬉しいつつうのによォ！」

でもその人は、悪い人ではないらしい。

「おいおい、他人の悪口はそうそう言うもんじゃないぜ？」

「げええ朝霧さんッ!？」

「す、すんませんでしたァ！」

見上げるほど身長が高く、目付きもとても鋭く見るもの全てを震え上がらせるほどのコワモテ番長なんだって。めっちゃもて委員長じゃねーぞ。

でも義理堅いその人は、ケンカはしても女の子は絶対殴らない主義でフェミニストらしい。

すっげーな、カッコいい！

「なありョウ、その朝霧って人は何年生？どこで会えるの？ねーねー、教えてよ！」

「騒ぐなよ、うっさいなあ……2年生らしいぜ、朝霧さん」

リョウによれば、そのカッコいい朝霧さんは二年生だと。だがもつと、俺には情報が必要だ……聞き込みと参ろうか。

#20

「ゆうこちゃん、2年の朝霧さんって人知らない？」

「朝霧はん？ 悪いけどあたし、その人のことあんま知らんねんか。あ、でも、ウチのお姉ちゃんなら知ってるかもしれんわ。何にもお役に立てへんで、ごめんなあ」

「わかった、ありがとね！」

まずA組の部屋ゆうこさん。けど、朝霧さんのことは知らないという。

「朝霧学はん？ うーん、名前だけなら聞いたことあんねん……けどなあ。その人は名前しか知らんわ。かんにんな！」

「あー、そっか。こっちこそ無理に聞いてごめんヨ」

同じくA組の、ゆうこさんの姉リサさんもダメだった。名前だけしか知らなかったらしい。

よし、次はB組じゃい！

ヒロユキのやつなら顔は広そうだし、何か知ってるかも。

「おい、寺辺」

「何だ、マサキじゃねーか。オレに何の用だい？」

「おまえ2年生の朝霧さんって人知らね？」

「あー……朝霧さんね。オレなあ、この前の休み時間に廊下でアキヒコと話してたら、あの人にシメられて注意されちゃってさー……」

超高速でヒロユキの話から要点のみを抜き出し、
すかさずメモに書き記す！

「そうか、だいたい分かった。じゃあな！」

「お、おい、マサキ！？ 人が話してるのに！」



小うるさい寺辺くんから逃げたところで、今度はC組……おっと、あとにしよう。

先にE組からだ。C組のレンは、最後の頼みの綱だからね。

E組には、この前体育の授業で競争した敦賀ミカさんがいる。
ガラは悪いが気のいいねえちゃんだ。面倒見のいい人なんだぜ。

「朝霧さん？ この前C組のアヤちゃんがお世話になったらいいよ。
刃野くんさえよかったらあとで寄ってみなよ」

「ありがとう！ 本当に感謝している！」

ふう。先にE組の教室に入っておいてよかったぜ。
さて、皆さんお待ちかね。C組へ行こうじゃないか。

「颯爽登場！」

さあ、戦いだ！

まずはアヤさん。彼女のフルネームは、橘アヤさんらしい。

「えっと、確かに怖い感じの人だったけどすごく優しくったよ。

この前運動場で足くじいちゃったんだけど、その時に保健室までおぶってくれたんだ。エリノ先生の前ですごくデレデレしてたっけ」

「ふむふむ。そっか、そんなことがあったんだね。続けて……」

実に興味深い。やっぱり、いい人なのかな。

「とにかく、女の子には優しい人だったよ。でもよくケンカしててケガ多いから、エリノ先生に厄介になってるみたい」

「ふむふむッ！　そうかッ！　なるほどッ！

じゃあ、これからエリノ先生にも聞きに行くね。アヤさん、今日は本当にありがとう！」

「いえいえ。どういたしまして♪」

アヤさんに別れを告げ、俺はきれいな女神様が待つ保健室へ――

「マサキ……iiiiiiiiiiイ!!!」

「あうおー!？」

そこにレンがゾンビさながら、いきなり飛びかかってきたではないか。

「アヤちゃんにハナシ聞いておきながら僕はスルーしようたって、そうはいかないぞ……!」

さあ、聞きたいことがあったらドンドン聞いてくれ。僕たち、友達だろ?」

ちょっと悩んだ。けど、すぐに答えを出した。

「すまん、もう情報はじゅうぶん集まった。なので君に話すことは何もナッシング。アディオス、アミーゴ! ハッハー!」

「ともだちイイイイイイイイイイイ!」

我が友の悲痛な叫びを聞きつつも、その足は既に保健室へと進んでいた……と。

#21

「エリノせんせーっ！」

「あらあ、マサキくん。ご用件は何ですか？」

ぴゃあ、相変わらずエリノ先生はキレイじやのう。
おっぱいも大きくて、何よりただならぬ母性を感じる！
この人は現代のマザーテレサと呼ばれるにふさわしい！

「あ、あの、その、朝霧学って人来てませんか？」

「2年の朝霧さんかしら。まだ来てないよー」

そう聞いてホッと一息。ついていたのだが――

「失礼しまーす。エリノ先生、荷物運んでたら足くじいちゃって…
…むむっ!？」

「むむむ!?!」

なんか怖そな人キター!?

でもカッコいいルックスで、いわゆる『ちよいワル』系のイケメンだね。もしやこの人が噂の朝霧さんかな。

だが、それとこれとは話は別だ。俺のエンジェル——エリノ先生に近づくやつはムツ殺す!!

「誰だお前!?!」

「あんたが噂に聞く朝霧さんか!?!」

なんてこった。お互い指差しあったと思ったら、いつの間にかケンカになりそうだぞ。

オイラ、ケンカは苦手なんだけどなあ。

「まさかと思えますけど俺のエンジェルたるエリノ先生を傷物にしようって考えてませんよね? 先輩ッ!」

「そういうお前こそエリノ先生をやるうとか考えちゃいねえだろうな? どの馬の骨かは知らねーがよ!」

そしてにらみ合いに発展する! いろいろとヤバイ、こいつはヤバイバ! しかもエリノ先生の目の前だし。

まあ大変、どうしましょう。できれば話し合いで解決したいけど。

「け、ケンカはやめてください。やるなら外でして下さい!」

ああっ、エリノ先生に怒られてしまった。

「ご、ご、ごめんなさい! 元はといえば僕がこの人にケンカを売ったばかりに……」

「す、すみませんでしたッ! そもそもは俺が彼にメンチ切ったせいで……」

やや?

どうしたことだろう。反省の言葉が同時に飛び出たぞ。

俺もこのちよいワル兄さんも、エリノ先生が好きだってことに変わりはないんだな。

その後、お互いすぐに謝った。

「二人とも、殴り合いはダメよ」

エリノ先生はそれを笑顔で赦してくれた。無論、女神の微笑みだ! 嬉しいという気持ちが俺と朝霧さんの体に吸い込まれていくようだったよ。

「俺、1年の刃野って言います。同志として今後とぞよろしくお願い致します！」

「おう、刃野っていうか。じゃあお互いよろしくな。後輩！」

こうして俺と朝霧マナブ先輩は手を取り合い、エリノ先生に思いを寄せる同志となったのであった。

あれ、この前も同じように和解したやつがいたな。誰だっけ？

まあいいや。

無理に思い出さないほうが自分の為だもんな。

——よくじつ！——

「チヨココロネはどこから食べたらいいいんだろうね。穴が大きい方か？ それともしっぽの方かな？」

ここで俺をバカだと嘲るのは早計というヤツですよ、みいなすわぁん。

かの伝説の少女Aもこうやって真剣に悩んでいたはず。

端からみればアホ臭く見えるだろう。けどね、これでも考察してんのよ。

どうか分かってちょんまげ。

「そんなこと知らないよー。それはおいといて、みんな知ってるか？」

おや、柄にもななくん蓄を喋る気だな。どーぞご勝手に。
俺は食べ方の考察でもしておこう。

「一時期立命館大学の投書に『チョココロネが買えない』という旨の書き込みがあったそうだよ。アレだね、ラッキースト」

「しかしマサキくんはそこでレン君の口にチャックをするッ！」

うっかり危ないところまで言いかけたレンの口を封じ、再びチョココロネを噛みしめる俺。

ふがふがうるさいが、全力でスルーさせていただく！
なぜ友達をスルーするかって？ いちいちかまっていたら、せつかのディナーが楽しめないじゃないか。たったそれだけでゲソ。

「マサキー、おまえ今日チョココロネしか昼メシねーの？」

リョウが冷笑しながらこっちを見てきた。
少しムカついたので、置いていたビニール袋の中身を見せびらかしてやるとすぐにきょんとした目になった。

「なワケねーだろ!？」

「こいつうゝ……あんまり人をおちよくっえとるとぶっ飛ばすぞ!」

「ひっで! 俺、エリカと一緒にランチタイムしてくる! じゃあな」

「お、おい、マサキ!? 冗談だったのにー!」

今更言っても遅いわ!

俺は麗しの学級委員長とご一緒する。すると言った!

#22

深夜アニメというのは夜中にやってるからってグロい演出ばかり、という認識を持ってしまいがち。

なのだが、オレから言わせてもらえばそれは誤解だ。いわゆるゆるーい日常系や萌えうなアニメも普通にやってるさ。

「か、かわええ！」

ちなみにそんなオレは、マサキの友達2号のリョウだ。1号は神戸くん。

何を見てかわいいと発したのかって？

ようじよだよ、ようじよ。幼女いいよな！

だが女子中学生も、女子高生のみなさんも好きだ。

マサキのヤツは失礼なことに、オレを『幼女にしか興味がない』だの『性犯罪者予備軍』だの『変態ペド野郎』だのと、こき下ろしてくるんだ。

ひどい話だよなあ……………。

ちなみにオレが夜更かしして深夜アニメを見ているときは、当然だが他の家族はおねんねしている。

エキサイトしたいが、あまり大声は出せないし騒げない。やったことある人なら分かるはず。

深夜アニメ観たいけど、バレるのが怖い！
そんな人は録画するといい。液晶テレビとかなら番組表から録画予約ができるしな。

これ、常套手段だから頭に入れておくといざというときに助かるぜ。



「うわーん！」

泣いて。

「あははー、うふふふー、えへへへー」

笑って。

「いい話だなあーっ……！！！」

そして、感動した。

「というわけだ。君たちにこの本をオススメしよう！」

まさかラノベで泣くなんて。

このすばらしさ、みんなにも分かってもらいたいなあ。

そう思い、俺はこうやって布教をしているのだ。

「いや、それ持ってるからいらない」

「ラノベかあ。ぼく、漫画のいいな」

さっそくりヨウとレンに布教を試みたが……

ご覧のありさまだよ。くそっ！

やはり万人受けはしないのだな……。

「普段ラノベなんかそうそう読まない俺がこうやって布教してるっていうのに、なぜだ!？」

「コレ分厚すぎじゃねえか！ 軽く凶器だぞ！ 人叩いたら殺せるぞ！」

柄にもなくキレたりヨウが、俺が布教したラノベの角で殴り付けてきたっ！

……えっ、ちょっとタンマ。

「や、やべえ、オレやつちまった……」

もしかして、幽体離脱う~~~~。

——したのか？ なんで仰向けで頭から血ィ流して倒れてるオイラがいるの？

バカなの？死んじゃったの？

クラスみんなは大騒ぎだ、黙祷してるやつもいればフィーバーしてるやつ、更には黒魔術で生き返らせようとしているやつもいた。

あるえ？ さっきまで学校にいたのに、街中に出てるぞ。

あつ、リヨウがタイーホされてる！？ レンが、やさぐれてる？！
な、何コレ？ 今度は俺のお通夜か？

あーっ、エリカとエリノ先生は泣きじゃくって――

か、か、母さん泣いてる！ 父さんからも涙の滝が溢れてる！
る、ルミが号泣しながら部屋閉じ籠ってるし……

「天国でも、どうか安らかに」

うげーっ！

俺が焼かれてる――や、やめて
死んじゃうよお

☆☆☆☆☆☆☆☆

「うわああああああああああああア――……ッ！
？」

そこで目が覚めた。

つまり夢だったのさ。ああ、夢でよかった。

ある日曜日のことだった。

「おかあさん」

これは、あとでママンから聞かせてもらったのだが。ルミが、

「あたしにも弟が欲しい！」

と、ママンに駄々をこねたそうだと、うちのママンは、

「あら、それは大変。お父さんに相談しなきゃね」

こう答えたという。

——反応に困るといいたいがそうはいかない。ママンもずいぶんブラッくなこと言うんだなあ！

#22（後書き）

さて、次回の『ビビスク』は？

ルミです。

さきこです。

そしてわしが、刃野家の大黒柱にしてゴッドファーザー。

カツヒサでございます。次回は多分わしが出るから、見逃さないでくださいね。

もう、あなただったら。目立ちたがり屋さんなんだからあ。

ホントホント。次回、『時計仕掛けのみかん』。お楽しみに！

#23 (前書き)

第五話 『時計じかけのみにかん』

#23

「むーん……」

「どうした、リョウ君？らしくないぞー」

ある日のことだ。ちよいとA-squareのアニ○イトに行ってみたのだが、実ははじめてだったのよ。ここってずっとアニソン鳴りっぱなしなのな。ものっそういうるさい。生まれつき、うるさいのがあまり好きじゃない俺としては少々気が滅入ってしまう場所だ。そんな場所へ俺は連れてこられたってハナシなのよ。無理矢理ってわけじゃないけどね。そして本を買いたいというリョウ君に付き合っ
てあげているっちゅーわけよ。

「なに迷ってんだよー、決めるんなら早く決めちゃいなよ」

ちよつとせかしてみよう。リョウのやつったら、慌てて目ぼしいものがないか探し始めたぞ？

「これか？ それか？ いや違う、俺が欲しいのはこんなんじゃない……くそっ！ ここも売り切れか」

「あー、もしもし。リョウ？ 迷ったら買わない方がいいんだぜ。俺たちや、庶民だし。迷った挙句買っちゃうのはお金持ちがするこ
った」

おじいちゃんが言っていた――。

『迷ったらものを買わない方がいい。迷った挙句に買ってしまうのは、金持ちがやることだ。』

――うーん！ これぞまさに名言、だなあ。俺もおじいちゃんの

言ったとおりにしているつもりだ。

「欲しいもん見つかなかったんだろー？ 大丈夫だ、問題ないって。いつも地元の本屋で妥協してる俺にとっちゃ、目当ての本が見つからないなんてよくあることだしサ。遅くなっちゃうからもう帰ろうぜ？ な？」

「うっさい！ 俺はお前とは違う。なんか買って帰らなきゃ気がすまん。そんなに帰りたいたいなら一人で帰ってくんね？ けどさ、お前ココ来んのはじめてなんだろ？ だったらそれこそ、何もなしで帰ったらダメなんじゃね？」

あっ、気にかけてくれた。

しかし、そんな意外と優しいリョウ君にゃ悪いが、俺は……

「えっ、おみやげなら買ったぜ？」

既に関ってあったのだ、おみやげを人知れずに！

リョウが迷いに迷い、gdgdになっている間にね。

「お前いつの間にッ!？」

#24

「ただいまー」

「おかえり、アニキ。遅かったじゃん？」

「だから……お兄ちゃんと呼びなさい！　いつも言ってるだろうっ」
「お父さんもう帰ってるよ」

ルミは相変わらず、俺をお兄ちゃんって呼んでくれないのな……

しょんぼりしつつも玄関へ上がり、荷物を置いて着替える。いや待て、アレだ。先に手を洗うべきだよな……？

洗面所で手洗いうがいをすませ、さっそくりビングでくつろぎ、
「あー、疲れた！」

「おう、マサキ。お前にしちゃずいぶん遅かったな。どこで道草食ってたんだ？」

「おいら草なんか食べないよ。帰りに友達のリョウ君と、ちょっとア○メイト寄ってたんだ」

言い忘れていたけど、我家のリビングは広めで、こたつ置くことが前提のコーディネートをしている。

だって冬は寒いだろ、こたついるじゃん……。ストーブもあるけど、あれは灯油入れるタイプだからなあ。クサくて仕方ない。

「おみやげあるか？」

「そう言うだろうと思った」

「なあ、出してくれよ。買ってきたんだろ？　萌えキャラちゃんのグッズを。さあ、わしに見せてくれ！」

「残念、父さんには買ってません。俺へのおみやげは買ったけどね」

父さんがぐぬぬ、と、ハンカチを噛んだ。

「うう……こうやって、親不孝者が出来上がっていくんだな。わしや悲しいぞ、マサキい！」

「母さーん、今日の晩ごはんはなーにー!？」

「無視すなあ！」

父さんを振り切り、台所で母さんを手伝う。こたつで父さんが念仏のような、呪いの言葉のような何かを延々つぶやいていたが気にしない。

「あらあら、お父さんったらそんなことを。この前メイド喫茶行ってたのにね」

「えっ、そうなの？ 父さんメイド喫茶行っただの？」

「そうよ。それも普通のじゃなくて、つ……えっと、何だったかな。つ、ツンドラ……」

「ツンデレ？」

「そう、それよ！ 確かそのツン……どらな感じのメイド喫茶だったそうよ」

「もー、母さんったら、そういうトコ可愛いんだからあ」

「えへへ♪」

我が家のママンは天然ぎみの傾向がある。だがそれがいい。

#25

「昨日の帰り、二人で一緒に帰ったんだってな。それで、立ちついでにどちらかの家に寄ったとか聞いているが……待てよ。もしかして……、ふっふっふ。俺の見込みでは、あの二人は付き合ってるな。間あ違いない」

「マサキくん。それって、誰と誰の話なのー？」

「わわっ！ な、なんでもないでっす」

彼女は聞いていた、の巻。うっかり口に出してしまったぞ。こんな妄想全壊なトーク、人に聞かれて恥ずかしいくないわけがなからう。友達でも恥ずかしいわいっ！

「あはは！ お前やっちまったなあ。はずかしーっ！」

「うっさいバーカ！」

むかつ腹が立ったので、とりあえず罵って唾を飛ばしてやる。リョウのイケメンも台無しというもんだ。

「わ、悪かったよ。それで、なんでお前はさっきあんなにパニックってたわけよ？ よっぽどマズイ発言しちまったのか？」

「……百合だよ」

「あんだって？ 百合……？」

そう言った瞬間に、リョウは何やら申し訳なさそうに後ろへ下が
る。震えながら。また、マズイと言っちゃったんだろうか。

「リョウ？」

「同志よ！ オレも百合が好きだ。いやあ、アレほど萌えレベルの
高いものはないよなあ。少なくとも、オレは百合以上の萌え要素に
会ったことはないぞ」

「……あー……」

どうやら、事態は俺が思っていた以上に深刻だったようだ。まさ
か、まともだと思っていたリョウが、ここまでハマっていたとは。
反応に困るってレベルじゃねーぞ！

「あ、でも、それってお花の百合だね？ アレって花粉にやばい
成分含まれてるらしいから、あまり近寄らない方が……」

「何言ってるんだ。お前知ってるくせに知らんぷりか？ 百合といや
あ、ガールズ・ラブの隠語……」

「ストおーーっブツツツ！！！！ その発言をインタラプト
！」

あらゆる手段を使い、相手の行動を何が何でも中止させる禁じ手。
それがインタラプトだ。ただし、1シーンに一度だけしか使えない。
要するに1日一回、だな。と、ゲームの技っぽく、大げさに解説し
てみる。実際はただのお口にチャックよん。

「はいはい、暴走特急はここで停車。クールな氷室くんに戻りな

さーい」

「ん？　なんだか、立場が逆転してたような……」

「え？　さっきおもつきし暴走してたじゃん。覚えてない？」

「えーつと。うーんと。あーっ……と……思い出せねーや」

なんということだ。こいつ、スイッチ入ったときの記憶がなくなってる？　リヨウとは高校入ってから短いつきあいではあるが、こうやってまだまだ多いであろうこいつの変な部分を知っていくことになるんだろうなあ。ちよつと、勘弁してほしいなあ。――と、マサキは心の中で考えています。

「よし、ここなら誰もいないな。いいか？　一回しか言わないからよく聞いとして。ゴニョゴニョ……」

もったいぶってから耳打ち。どうじゃ。まあ、さすがにあまりやるよーなことではないよな。ギャグでやるなら、ありかも分からねけど。

「！？　え、エリカとアヤが付き合ってるって！？　それは本当か！？」

「しーっ、声が大きいぞ！」

廊下のスミッコ、しかも男二人でナイショ話。我ながら、なかなかシュールな光景だなあ。これこそ見られたり、聞かれたりでもしたら恥ずかしいぞ。そりゃあ、顔から火が出るくらいには。

「ふたりはレズか……ガチではなさそうだが、ありだな。うん」

「言いたいことはこんだけじゃ。教室もどるぞ！」

#26

「今日の授業難しかったよなー」

「ホント、ホント。先生もたまには簡単な問題出してほしいよなー」

「なあ、今日の帰りゲーセン寄ろうぜ」

「いいねー、賛成！」

「そこっ！ 聞こえてるわよ！」

「ひええ！ ごめんなさいッ！」

最近、休み時間に先生の愚痴をこぼす方の多いこと……。正直許せません。二年生だからまだいいだなんてよく聞きますが――来年からもう、三年生ではないの？ 下級生の方々の大先輩になろうというのに、そんな調子でどうするのかしら。

「あのさー、三ノ宮さん。あんまり注意しすぎると煙たがられちゃうよ……」

「みんな上級生としての自覚がなさすぎるわ。来年からしっかりしなきゃいけないのに」

「あんまりうるさく言うのもどうかと……」

「だからってちゃんとしないうままでは、我が校のイメージダウンや成績の低下につながります。時には、諫めることも必要だと思うわ」「ごめんなさい……ボクが悪うござんした」

みんなが私のやり方を受け入れてくれるかは分かりません。ですが、わたくしは次期学級委員長候補に選ばれた身。今よりもっとしっかりしなければ、それは務まりません。

「うんうん。その通りだ。最上級生になるからには、しっかりしな

きやいかん。そうでしょ、ユカさん！」

「はい、一緒にがんばりましょう。朝霧さん！」

彼、マナブさんとは考えを共にする同志です。そうそう、わたしは三ノ宮ユカと申します。武家を祖先にもつ家系に生まれでて、周りのみんなが言うにはいわゆる『お嬢様』というものらしいですの。世間知らず故まだまだ知らないものもたくさんありますが、どうかよろしくお願い致します。

「なんでこんなガラの悪いヤツと仲良くしてるんだ？　まずはこいつ更正させろよ……」

「朝霧さんになんてことを！」

「ご、ごめんなさい！」

彼は、尼ヶ崎翔伍。ちょっと嫌味で口の悪い方なの。人のことばかり口を出して、自分には甘くするなんてとんでもない。しかも先生に何度注意されてもまったく懲りないのよ。ひどいと思いますせんか？　彼は一度自分を見つめ直して、反省した方がいいと思います。

「ケンカはもうやめたけど、次は何をどうすりゃいいんだろう？」

「ケンカしない、夜の12時までゲームを遊ばない、夜更かししない、ナンパしない、R指定の画像やサイトは見ない、むやみに保健室にいかない。あなたの場合、以上のことを守っていただければよろしいのでは」

「……きびしいっ！」

「誰か、この問題を解けるヤツはいないかー!?」

「……あの、センセー」

「おう、刃野。答え分かったか？」

「そんな根拠のないこと聞かれても、みんな解答に困ると思うんですけど」

あちゃー、まずいことしたわ。こりゃ言いすぎたな。俺の発言が原因で、周りの空気がエターナルフォースブリザード。相手は死ぬ。死ぬまでいつてないけど。

「……さ、さて。他に意見のある人はいないか？　じゃあ、こうしよう。オレ僕私なら、答えられますって思ってる人ー！」

長浜先生が必死すぎて笑える。いや、そういう自分は人のこと言えないクチだけどね……。ただ、このノリのよさとテンションの高さはもっと評価されるべき。ハイテンションなキャラは好きだ。俺だったら余裕で腹筋崩壊、おなかよじれます。

「……えっ、いないの？」

く休み時間んんんく

「シンスケ先生面白い人だと思うんだけど、評判イマイチだよなー。なんでだろ？」

「そりゃあ、アレだよ。みんな暑苦しい野郎より、華を求めてるんじゃないイカ？」

「……美形のナルシストとかか？」

「バカだなー」

リヨウってちょっと考えがズレてるな。と、この時俺は思った。

「みんなが求めているのは、美人の女教師だ。メガネにスーツ、ミニスカにナマ足、極めつけはニーソと絶対領域だぜ？ 好きにならないワケねーじゃん。シンスケ先生？ あの人は体育専門にでもなってるってんだ」

「あー……っと。マサキ？ あんまり悪口言わない方がいいんじゃないかねえか……？」

リヨウが俺の席のうしろを指差している。なんだ？ 誰か来たのか？

「刃野オ！ あとで職員室へ来い。今日はみんなが先に帰るなか、お前だけ生徒指導の刑だー！」

「ひええー！ ごめんなさい！ もう悪口言いませんっ！！」

「あーあ。だから言ったのに……」

ああ、なんてバカなことをしてしまったんだろう。『人の悪口を言うヤツは死ね』とはこのことか。夕方5時まで説教を食らい、家に着く頃には6時を過ぎていましたとさ。ちゃんちゃん。

「それっ！」

ある日の放課後。寄り道先で見かけた、カン・ビン・ペットボトル用の金網でできたゴミ箱。そこへフリースローを決める俺。かっつこいいい。

「んっんー……」

「どうしたんだい？ ゴミ箱のぞき込んだりして」

「なあ、レン。さっきガシャーン！ みたいな音しなかった？」

「したした」

いつも思う。割れてないかな。破片飛び散ってないかな、とか。ついつい心配しちゃうんだよなあ。

「いつも思うんだけど、アレってビンが割れたSEとかじゃないよなあ……」

「バカだなく。あのぐらいで割れてたらあとで回収するとき困るでしょ」

「そうか。げに恐ろしきは割れた時に鳴るヒトの不安を掻き立てる音ではなく、想像力が豊かなヒトということだな……」

ネガティブスイッチ、オン！ しかしガチで暗い気持ちになったわけではない、あくまで冗談である。ということだから、レンをちよっただけ困らせてやろう。いたずらに理由はない。そこにあるのは、からかってやろうということだけである。

「ま、マサキ？」

「つい連想するんだよ、あの音を聞くとねエ……ブフフ」
「うわぁ……」

あ、ドン引きされてる。やりすぎたか——？ ならば、仕方がない。作戦変更！

「っていうのは、うっそー♪」

「なんじゃい、嘘だったんかい！ 心配して損したわっ！」

「心配イ？ どう見てもひいとったやないかい！」

こいつめ、鋭いツツコミ攻撃を食らえ。うりやつ、これでもか。

#28 (後書き)

さあて次回はッ！

どうも、朝霧マナブです。見た目で損する人、多いですよ。

実は俺もそうなんですよ。見た目が怖いから、って理由でみんなから避けられがちなんです。

どうすれば、怖く思われないんだろーなー……。

次回、『夏といえば』 え、今夏なのか？ お楽しみに！

#29 (前書き)

第六話『夏といえば』

#29

アホほど眠たい土日の朝。たとえ休日でも、この小うるさいアラームは容赦なく騒ぎ出す。うるさくて寝られません。

「うるせえなあ〜……ふえ？ まだ7時じゃねーか。寝よ寝よ」

うざったいことに、この騒々しいアラームにはスヌーズ機能がついていて。何分かおきにセッティングし、アラームが止まっていた場合またアラームを鳴らす優れものだ。しかしながら、この時ばかりは自分のマジメさを呪ったぞ！ うっさくてまともに眠れやしない。

「また鳴ってる。寝させろよう……」

こっくり、こっくり。何度めなのか覚えちゃいないが、静かにすやすやと寝息を立てる。昨日遅かったからなあ。じっくりゆっくり、焦らずゆとりを持って寝ちゃおう。寝ちゃおう。寝ちゃおうっ！

「起きて、お兄ちゃん！」

「ハッ!? その声は……る、ルミ……なのか？」

ゆめかまぼろしか？ ねぼすけなお兄ちゃんを起こしにきたのは、お尻の下まで届きそうなくらい綺麗にまつすぐ髪を伸ばした、茶髪ロングヘアの少女だった。瞳はツリ目の琥珀色。かわいいな。そして、誰かに似ている気がするぞ。エリカかな？ でも、エリカはそんなに目はつり上がってない。第一あの子はアイカラー緑色だし——じゃあ、どちら様？ いつも夢の世界からお呼びにやってくる

る睡魔さんは、髪色がグラデーション効いてもうちょいにぎやかな感じだしなあ。本当に誰なんだろう。でもまあ、いいや。この子俺好みだし、こんなにかわいい妹を持てて幸せだあ！

「……アニキ、起きて！」

「あ、兄貴ィ！？ バカちん、お兄ちゃんって呼びなさい。お兄ちゃん……って、アレ！？」

「何よ、どうかしたの？ もう10時前だよ！」

「うっそーん、そういうことか……」

「つべこべ言わない！」

何故か、すこぶる機嫌の悪そうなルミに連れられ1Fへ。朝からカンカンに怒られると、堪えるなあ……。

なぜかわからんが、視界がぼやけて全然見えねー。老眼か？ 若年性の老眼なのか？ いや、違う。寝起きで目がしょぼしょぼしてるだけだ。とりあえず目薬を差し、ソファーに座る。

「あ、おいしそうだね」

キッチンテーブルにおかずが置かれていた。恐らくママンが、家族のために早起きして作ってくれたんだろう。感謝感激雨あられ！ とりあえず、フライポテトをつまんでみた。どこでも売っている感じがだったので、冷食と思われる。

「いてっ」

いざ食べようとしたら、ぺちっ！ とデコピンされた。やったのはうちのママンだ。

「マサキ、おはよう。つまみ食いしちゃダメよ。めっ！」
「やっちゃったなあ。デヘヘヘ、ごめんなさい」

とてとて、と、ソファーに戻ってテレビを点ける。んー、この番組はともハードボイルドな内容らしい。どちらかといえば父さんが好きそうな感じだなあ。

「これじゃない、違うのにしよう」

次に回したチャンネルでは、昼ドラみたいになぎなぎとした感じの

番組がやっていた。違う、俺が見たいのはこんなものでは断じてない！
仕方ない、変えよっか……。

「母さーん、チャンネル変えていい？」

「うーん。CM入るまでそのままにしておいて」

母さんの命令、いや、言うことは絶対だ。逆らったりなんかしないよー。なんて言ったりやすぐにCMが来た。これは変えざるを得ない！ 早速回そう。さて、何チャンにしようか……。とりあえず、アニメが見たいな。アニメにしよう。アニメやってるチャンネルに回すと、こんな朝っぱらからロボットアニメがやっていた。熱いねえ、おいら男だけこういうのは好きだよ。……えっ、ルミはどうしたかって？ 俺の隣で一緒にアニメ見てるよ。すげえノリノリで！

「あっ、ところでさ」

「なあに」

「今日ってどっか行くんだったっけ？」

「もおー、マサキったら忘れんぼねえ。今日は家族で海に行くのよ」

「う、海……！ そうか、海かつ！」

——海。そう、海。海といえば、みんなは何かな……？ 俺にとって海といえば、やはり水着のねえちゃんだな。いや、スク水の少女も捨てがたい。え、そんな話をしたいんじゃないかって？ いやあないなあ。そうならそうって先に言ってほしかったな。他にも海といえば、空で輝くお天道様にさざ波、そして定番スイカ割り——。

「イイイイイヤツフウウウウウ！……！」

「あ、アニキ!？」

「あらまあ。うふふ……」

#31

——そんなこんなで俺達は海水浴へ行くことになった。

無論、気分は上々だ。場所は和歌山の辺りで、なんでもそこはマ
ンボウで有名ならしい。

もちろん車に乗っていくのだが、残念ながら父さんだけ仕事で行
けないのだ。もちろんほかの家族は車の運転なんちできません。じ
ゃあ、誰がするのか？ それなら今に分かる——。

「ヤッホー！ みんな、久しぶりねえ。元気してた？」

「こっちこそ。しずか姉さん！」

彼女は親戚の姉さんだ。名前は守山しずかという。

守山というのは、母さんの旧姓だ。母さんとは年が離れた姉妹に
当たる関係らしいが、その他はあまり分からない。また今度聞くと
しようかね。

「あたしならバリバリ元気だよ！」

「私も元気ハツラツよ」

「そっか。あれ、カツヒサさんは？」

「ゴメンね。今日お父さんだけ仕事なの」

なぜ父さんがいないのか、その理由を母さんが簡単にしずか姉さ
んへと説明してくれた。

事情を聞いた姉さんは、快く車に乗せてくれた。ディープブルー
の車体がカッコいい、

五人乗りの標準的な自動車だ。シートベルトをしっかりしめてと
言われたので、言われたままにきっちりとした。これで安心！
と、思いたかったが——。

「うおおおっ！　なんか燃えてきたあああああ！　マッハで振り切るわよー！！」

「げっ、姉さんがヒートアップした！」

「うそ、お姉ちゃん！？」

「あらあら、すごい。ジェットコースターみたいねえ」

戦慄を覚えるほどの超スピード、半端ないドライビングテクニク。

青い閃光が高速道路を駆け抜ける。違う世界に來たんじゃねえかと、

一瞬だけ我が目を疑ったくらいすげえ光景だった。お陰で目が回る、回る、回る、回る、回って回って――。そうしているうちに、サービスエリアに辿り着いた。中くらいの規模で、休憩にはもってこいの場所だった。

「ふうー、ちょっと飛ばしすぎちゃった。みんな、休憩してく？」

「す、する。ちゅーか、させてくり……」

「ほげ……」

「やだ……、みんな踊ってるわ」

「それじゃあ、休憩に決まりね。みんな降りましょ！」

降りて速攻トイレに駆け込む。もちろん男子トイレだ、野郎はおれ一人。

野郎ひとりに対して女が三人。――ん？　これってハーレムじゃね？　きつとそうだ。

周りには大中小ときれいに揃った女の人が三人。男がその中にひとりだけ放り込まれた。あとは分かるね？　ああ、なんて幸せなのだろう。

そうしてトイレを出て、女性陣を待ってみるがなかなか出てこな

い。五分待っても誰も出てこない。もしや混んでいるのか？　これは困ったなあ――。

「ごめん、お待たせーっ」

「遅いよー。もしかして混んでたの？」

「うん、そうなの。なかなか入れなかったのよねー」

そう不満げにしずか姉さんへ問いかけると、彼女の口から出た答えはYESだった。

「そっか。なあルミ、おもらしとかはしてないよな？」

「バカ！　アニキに言われなくてもしないわよ！　あたしだってもう大人だもん。するわけないじゃん、もう……」

ちょっとルミをからかってみた。けど、やらかした感が否めん。あとで謝るべきだろうか……？

そのあと昼食をどうするかについて話し合ったが、家族間会議の結果、海の家で食べることになった。そりゃ、そうだ。どうせ食べるなら海の家で食いたいよなあ。さて、どんなメニューがあるんだろうか。そもそも海の家なんてあるんだろうか。ぐぬぬ、ワクワクが百倍になって止まらねえ。焼きそば食いたい！

#32

「きゃっほー！」

「やったなー。えい！」

「やだ、つめたーい！」

「あらあら、うふふ……♪」

「さすがママン、すげえ揺れっぷり。だがしかし、しずか姉さんのメロンも捨てがたいなあ。ルミはまだまだこれからはず、やれば出来る子だから！」

乙女たちが水をかけあい、さざ波が揺れる。更に胸が大きい人は胸も揺れる。

このとき俺は浜辺で肌をこんがりきつね色、いや小麦色、いやいやあめ色に焼いていた。

そしてシートに寝そべりながら、揺れ動く波と激しく振動する姉さんと母さんのボインを眺めていた。

早くポロリしないかなあ、なんて無粋なことも考えていた。だって男の子だもの、少しぐらいスケベでもいいじゃない。

何が悪いの？ 男が自分の気持ちを押さえてどーすんの。

俺なら本能に従順忠実にするよ、だってそれがおとこのサガだから。

つまり——亀仙人は偉大だったってことだ！

「にひひ……おじいちゃんが言っていた。『女の乳や太ももを見て鼻血を垂らすも垂らさないも、その男に権利がある』……ってなあ」

そういうことなので双眼鏡は片時も離すことは出来ない。

え？ ご飯のときはどうするかって？ そんな無粋なことは聞かないでくれたまえよ。

「おーおー、そっか。……お前の爺ちゃんスケベだなあ」

聞き慣れたこのよく言えば清涼感のある声、悪く言えば薄っぺらでチャライ喋り方の声――。

まさかと思い、お隣のシートにいるやつの顔を見ると……！

「りよりりヨウ！？ お前なんでここにいるッ！？」

「オレも水着のねえちゃんを拝みに来たのさ……言わせんなよ、恥ずかしい」

「へえ。貧乳好きのロリペド野郎が、珍しい」

「うるせー！ ボインはお前だけのもんじゃねえんだ。たまには巨乳でハッスルさせろやアアア！」

「黙れヒンニュー教めがあああ！ お前に巨乳はもったいない。つるぺたで十分じゃボケがあ！」

その場の勢いで乱闘が始まった。

やがてそれは巨乳派VS貧乳派の、壮大で世界一ショボい小論争へと発展する！

「はいはい、ケンカはそこまで」

――かに見えた。

まさかの仲裁役が現れ、事なきを得た。

「……ん？」

「どうしたの？ 僕の顔に変なものでもついてる？」

「いや、違う。どこかで見たことあるような、ないような……でも、見ず知らずの人が俺らの喧嘩をみすみす止めに来るはずはないし」

「言われてみればそうだよなあ……」

「きゅ、急にどうしたんだよ。僕たち、友達じゃないか」

「えーっ、友達？ 今日始めて会った僕らがあなたとですか？」

いきなり見ず知らずの人から友達と呼ばれても、こっちとしては判断に困るっていうのが正直なところ。

——っていうのは、ウソ。彼は紛れもなく俺の友達なんだけど、だからといって普通にあいさつしてはつまらない。

だからこうやって、敢えてからかってやっているという訳だ。訳ありありなのよ。

「——ん？ いや待てマサキ、そう言い切るにはまだはやいぜ……。俺、お兄さんのお顔をどっかで見たことあるよ。テレビで」

「えっ、マジ？ ホント？ どんな感じだった？」

「確か、有名人だったような気がするぜ」

リョウが珍しくこっちのノリにあわせたぞ。

さて、あとは彼に任せて、俺は引き続きボインを拝もうかね。ふひひ

「有名人？ いやったー！」

「でもあんた、不倫して話題になってたぞー？」

「な、なんだって？ まだそんなトシじゃないのに！ うわーん」

後ろからレンの叫び声が聞こえた。

浮かぶ、浮かぶぞ。あいつが苦悶の表情を浮かべている姿が——。

「お母さんおっきーい！」

「そうかな。しずかちゃんの方が大きいんじゃないかしら」
「うん、よく言われる。けど、さきこ姉さんほどじゃないヨ」

聞けば聞くほど唾をぐくりと飲んでしまふ、渚のガールズトーク。
いや、レディーストークだろうか？ どちらにせよ、我々の業界
ではご褒美です。

ちっぱいが大きなおっぱい同士に挟まれば、きつとご利益もら
えるさ。

君は将来大化けするぞ。がんばれ、ルミ。我が妹よ。お兄ちゃん、
応援してるからな。

「萌えるなあ。萌えるーわ。ホント萌えレベル高いわ、百合っての
は」

「へへへ、そうだろー？」

そんなに一緒にボインが見たいのか、隣にリョウがやってきた。
いつものクールなお顔が台無しなくらい、下品ににやけていた。

「もしかしてかまってほしいの？ ったく、しょうがねえなあ……
ところでレンは？」

「あっち見てみな」

するとリョウが岩場を指差した。

そこを向いてみると、岩陰でレンがうずくまってどんよりと落ち
込んでいたのだ。

「いじられたっていいじゃない。少しくらいからかわれたっていい
じゃない。だって人間なもの」

気のせいかな、文末に『れん』と印鑑が押されたような。

なんか可哀想に思えてきたが、とりあえず今はそつとしといてあ
げよう。

あいつのことだ、またすぐにでも元気になるだろう。

#33

「ねえママー、それにお姉ちゃん……」

「なあに、どしたの？」

「お腹すいてきた……」

「あっ、そうなんだ！ 実はちょうど、あたしもお腹減ってたの」
「私もよく。じゃあ、ごはんにしよう」

なんてやり取りが双眼鏡の向こうで繰り広げられていた。
うん、そういえば、俺も腹が減ってきたぞ——？

「ねえ、マサキ」

やがてママンたちが上がってきた。ママンが優しく俺に呼び掛ける。

「なんだい母さん？」

「そろそろお昼にしよう」

「うん、分かった！」

砂にまみれたブルーシートを片付け、ママンたちについていく。
ママンの後ろにぴったりくっついてな。言っておくが、後ろから胸を揉んだりお尻を触ろうって魂胆じゃないからな！

「ここにしよう」

そう言いながら、母さんはにっこりと微笑んだ。

海の家だ、今日のお昼はここで決まりっ！

ママンが決めた以上取り消しは効かない。ここで決まりと言った

ら、決まりなのだ。

我が家の地母神様に逆らうなど、もっての他じゃい！

「いろいろあるねー。何にしようかな」

「おじいちゃんが言っていた。『空腹になったときのレストランや飯屋のメニューは、見るものを惑わせる魔性の女のごとき存在。惑わされず、逆に虜にしてやれ』……みたいなことをね」

「マサキのおじいちゃん、そんなこと言ってたっけ？」

しずか姉さんがメニューを見ながら、俺の渾身のギャグに対して鋭い刃物のようなツツコミを炸裂させた。

これは痛い、痛すぎる。血がどくどく溢れてそうなくらい痛かった。とはいえ、自ら痛い子アピールをしちまったようなものだ。ならば、先んじて受け入れねばなるまいっ

「ひどいやねえさん……」

あらら！ 言ったそばからこれだよ。一体どの口がこんなことを呟いたんだ。

「ところでルミちゃん、何食べたいー？」

「あたし、焼きそばがいいなあ。しずかお姉ちゃんは？」

「私はねー……うーん。カレーかなっ」

カレーに、焼きそば。

まさか自分が食べようと思っていたものが、こうも二人に先取りされようとは。

予想外だったぞ！ どうすんの俺……どうすんの！？

「マサキは何にするのー？ 早く決めてちよーだいね！」

「とは言われてもなあ。うーん……じゃあ、俺たこ焼き！」

苦し紛れにそう言ってみた。

ちゅーか、なんだ。そう言わざるを得なかったって言うべきだろうか。

「じゃ、最後にさきこ姉さん。待ってました、今日の主役！」

「えっ！ 俺じゃなかったの？」

またも口から余計な一言が――自重しろ、俺。身の程をわきまえよ。

そんな俺に、姉さんが耳打ちしてきた。

「……いい？ 男が無理に出てくる必要はないよ。こういうときは、女に任せた方が上手くいくものだし」

「い、言われてみればそうだよね」

「だから、今日の主役はさきこ姉さんってことで。いいわね」

なんか論点がずれているような？ まあいっか。世の中気にしたら負けだしな。

ちよつとぐらいおかしくたって、何も問題はねえや。

「さあさあ、大トリ来ちゃったよ。さきこ姉さんは何にする？」

「わたし？ 何にしようかしら……」

焦らし焦らされ……その答えはこうだった。

「わたしも焼きそばにするわねー」

「ルミちゃんと一緒ねー♪ じゃ、注文しよっか！」

——焦らすのが上手い人は、世渡りも上手いって誰か言ってたようなあ！？

俺が生まれるときも、さっきみたいに父さんを焦らして……ゴクリ。

いや、何でもない。さあ、メシだメシ！
家族みんなでごゆるりと、届いた昼食を食べていると——。

「あつ、マサキくんも来てたんだ！」

「どうも～。みんな楽しそうですね～」

「え、エリカ。それにエリノ先生ッ！？」

なんてことだ。この白い砂浜に、天使が舞い降りた。
それも翼を失ったエンジェルが二人も——！

#34

「う、美しい……」

「ま、マサキ？ あんた食べないの？ 冷めちゃうよ、おい」

しずか姉さんの言葉が耳に入らないほど、俺は山科姉妹に見とれていた。

どちらかといえば、やはりエリノ先生を見ていたな。無理もない、あの水着に収まったのが不思議なくらい胸があって、悩ましいくらいにむっちりしていたから。

それに胸もあったし。個人的には腰周りも反則だと思うなあ。いや、やはり胸か？ あれだけ胸あったら視界に入れない方が無理だなあ。

「食べないならあたしがもらうよー」

「エリノ先生、エリカと一緒に食べるんですか？」

「はい。何かオススメのものがありますか？」

「うーん……焼きそばとかいいんじゃないでしょうかね。きつといいですよ！」

「そうですか」

「おい、食べちゃうよ」

いくら注意されても、今の俺は山科姉妹に夢中。たぶんテコでも動かん。

「もしかこれから泳ぎに？」

「ええ」

そしてこのほんわかとした微笑みである。悩殺されても文句は言

わないよー。

「にひひ」

「ど、どうしたのマサキくん？」

「エリカも楽しんできなよー？ エリノ先生や他のお姉さんに負けないくらいなあ」

「ちょ、ちよっとー！」

何故かな、ワシら男は好きな女の子ほどからかいたくなるもんだ。恥ずかしそうにしているエリカの顔もまた、かわいいのう。

「こらマサキ！」

なんてニヤニヤしていたら、しずか姉さんに引っ張られて現実に戻された。致し方ないことよ、悪いのは俺だから。

「あーぶないあぶない。もう少しであんたのたこ焼き、食べちゃうトコだったんだから」

「もうー、待つ方の気持ちも考えなさいよー」

「今ならまだ温かいよ、アニキい！」

しずか姉さんも、母さんも、そしてルミも。ちよっと怒っていた。けれど、みんな食べるのを待ってくれていたのだ。ルミは食べかけちゃっていたがー。

「ごっ、ごめーん……もう水着のお姉さんには見とれないことにするから、許して！」

「本当だなー？」

許しを懇願したら、隣のしずか姉さんがニヤニヤしながら肩を組

んできて……。別に何もされなかったから大丈夫だけど。

しかし、学校でも思ったことなのだが、みんなで食べるお昼ごはんはうまいものだなあ。

そして、昼食後。もう二度と水着の女性は見ないと誓った俺だが、募る気持ちは抑えられず――。

「ほっほーい！」

「マサキ、これ！」

「あいよ！」

それは昼からの話。俺がリョウやレン、そして山科姉妹を交えてビーチボールを楽しんでいたのたときのことである。

「エリカあーっ！ そおれい！」

ボールをエリカにパスするはずだったのだが、あろうことか照準がずれて隣のエリノ先生に飛んでいってしまった。はずかし……。。

「ああんっ」

コツン、と、ボールがエリノ先生に軽く当たった。うーん、たまらんなあ。そんなにエロい声を出されては、聞いているこっちの胸がドキドキするぢやないか。

――胸？ 胸といえば……。ああ、エリノ先生の胸が揺れている！

「お、おい、マサキ！ 今の見たか！？」

「ああ、2つのビーチボールがたゆんたゆんって……。！」

「は、はなぢがあ」

「え！？ なんの話？！」

「き、君は知らない方がいいことだ。な、なあみんな」

取り乱すなんて、らしくないと思ったでしょ。

いやね、俺もまさかエリカが話題に食いついてくとは思っていなかったわけなんだよ。

真面目で可憐な学級委員の彼女には、オタクの道は歩んでほしくないのだ。健全な子でいてほしいのだ。もう手遅れかもしれんが――

「オーツすげえ」

それからは地上に上がって、朝と同じようにボインを観察していた。

みんなと遊ぶときにセクハラじみた発言をするぐらいなら、海から上がってひとりで騒いだ方がいいよねえ。

ちなみに何がすごいかって言うのだな――いや、言わなくとも答えは分かるんじゃないかね。少なくとも波ではないよ。じゃあ何かって？ 胸に決まってるじゃん！ 言わせるな恥ずかしい……あつ、言っちゃった。

――それから、翌週の月曜日――

「うっあー。毎日 अच्छいなあ」

「ホントだよなあ。うちわで扇いでも熱風しか来ねえや」

「うおおおお अच्छiiiiiii!」

レンが発火しそうな勢いでなんか叫んでるけど、この際放っておいてもまあ大丈夫っしょ。

夏というのは本当に暑いもんで、極度の暑がりである俺にとって

は地獄のような季節である。

しかし、アイスが食べ放題な上に一番おいしく感じる時期だし、水着のお姉さまもいっぱい見られるので、地獄であると同時に天国のような季節でもあるのだ。

それと夏休みもあるしなあ。なんつと両極端なシーズンでござんしょう。

「ところでさあ。秘蔵の写真があるんだけど……見てみない？」

そうチラチラ見せつけながら、レンが嬉しそうに言ってきた。

レンのやつ、こんな嫌な性格だったかなあ。いや、ノリがいいと言わなきゃならんのだろうか？

「えっ、マジ？ ホントか？」

「当たり前じゃん。僕がウソをつくとも？」

「勿体ぶってないでさあ、見せてくれよお。なあリョウ？」

「ああマサキ！ 秘蔵って言われちゃあ気になるよなあ！」

パシッ！ と、リョウがレンから写真の入った封筒を奪った。その時のレンの驚きようときたらもう……ねえ。

「あっ、コラ！ 返せー！」

「誰が返すか。見ようぜマサキい！」

お互いに期待を寄せあいながら、その封筒を開くと――思わず目を見張るものが入っていた。入っていたッ

「おお、こ……これは、け、けしからんッ」

「ああ……まさしく『極上』だぜ」

それには水着姿で戯れるエリノ先生が写っていた。あまりの美しさにうっとりしてしまいそうだ。誰がいつ撮ったかは知らないが、すばらしい一枚だったよ。

「へへっ、すごいだろ。僕が撮ったんだぜ」

「ああ、スゴいやつだな君は……ほい」

レンに写真を返却した俺は、ちよつと面白いことを思い付いた。

「エリカあー、ひそひそ……」

「うん、うん……えーっ」

俺に何かを耳打ちされたエリカは、眉をひそめて険しい表情を浮かべ――。

「あ、あれ？ エリカさん」

「どうしたのん？」

「神戸くうううん……」

気のせいだろうか？ 後ろで怒りの炎がメラメラと燃えていたような。どちらにせよ恐ろしいことに変わりはない。

「どいて！ 氷室くん」

「は、はい」

すごい剣幕でそう言われたんじゃあ、あのリョウでもしっぽ巻いて逃げるしかないよねえ。

さっきまでCOOLにすましてたのに、血相変えてこっちに逃げ込んできたよ。しかもすっかり腰抜かしてビビってら。

「こ、怖えええっ……」

「いいかりヨウ、エリカは不まじめな人が何よりも嫌いなんだ。レンのやつはいつ何時なんどきもふしだらな上にあんなイヤらしい写真まで持っていた。あとは分かるよな……」

「ろ、ロシアの殺し屋ばりに、いやそれ以上に怖いなあ……ひいいい」

おじいちゃんが言っていた。『この世で本当の意味で恐ろしいものの、それは女だ』、と。

レンの悲痛な叫び声とエリカのやるせない怒号が飛び交うなか、俺はリヨウと一緒に隅っこでビクビクしていましたとき……めでたしめでたし。いや、めでたくねえー

#34 (後書き)

保険医のエリノです。

妹は学究委員長をやっているんですよ。両親もよく言うんですけど、自慢の妹です。

夏——ってことで妹と海に行ったんですけど、夏といえばプールの季節でもありますよね。

ツメが長いと壁に指がぶつかった時、すごく痛むんですよ。この時期はこまめにツメを切ったほうがいいかも知れませんね。

……あつ、ごめんなさい。ちゃんと予告できてませんでした……。

次回、『11歳の夏』 えーっと、もう10年くらいまえだったかしら……お楽しみに！

#35 (前書き)

第七話 『11歳の夏』

夏といえば、海水浴。だがしかし、泳げる場所は何も海水浴場だけじゃない。

みんなが泳いでいい市民プールや温水プール、そして水泳教室。そう、夏といえばプールで泳ぐ季節でもあるのだ！

「はあーっ！ やっとプール掃除終わったなあ」

「やったね。これで明日から、待ちに待ったプールだ！」

プールってのはいろんな理由で汚れてくるもんだ。みんなだって、藻が水面に浮かんでヘドロが底にたまってるような汚水で泳ぎたくないんだろ？

だから、プールで泳ぎはじめる前にみんなで掃除をするんだよ。ぶっちゃければ本意ではあるが——やらなきゃ、泳げないしね。

「にしてもさ、今日はよく寝れそーだな……俺あもうクタクタだぜえ」

「おれも今日は夜更かしはすんのやめとくわ。寝不足で水着が痒めなくなったらイヤだしな」

「そだね」

お楽しみは明日だ。ここで寝坊しちゃあ、カッコつかねえってもんだ。

「ぐー……すぴー」

そして翌朝。俺はぐっすりと眠っていた。

プールのことを思い浮かべていた結果、興奮しすぎて眠れなかったからだ。

やかましいアラームに叩き起こされ、慌てて飛び起きたんだが、時刻を見てみると――。

「んあ……な、7時!？」

いつもは6時ぐらいには何があっても起きる俺だが、今回はついうっかりして一時間遅れてしまった――、つまり寝坊だ。ああ、なんと情けないのだろう!

「マサキ、早くしないと遅れちゃうわよ」

「わわわ分かってます! 早くごはん食べて準備しなきゃ!」

「準備ならお母さんがあらかたやってあげたから、心配しなくても大丈夫よ」

しかし嬉しいことに、母さんが既にある程度を準備をしてくれていた上に、急ごしらえだが朝食も用意してくれていた。

「あ、ありがとう! じゃあ俺急ぐね!」

「気持ち分かるけど、食べるときはゆっくり噛まないでダメよ」
「ごっごめん」

――そんなこんなで、朝からドタバタしながらも無事に学校へ着きました。一時はどうなるかと思ったよ。

「すみません、遅れましたっ!」

「おっ、やっと主役のおでした。マサキ、席につけよ!」

リョウのヤツが必要以上にせかしてきた。
なんか腹が立つ。不本意だが、遠慮なく座らせていただこう。

「お前さ、なんでそんな先生みたいなことを……あれ、そういや長浜先生は？」

「実はな……」

リョウがにやつきながら俺に耳打ちした。
思わず目を丸くしてビックリしてしまったよ。まさかそんな事があるなんて——なんつってな。

「ダアーツ！ はあー、はあーツ……み、皆いるかっ？ 刃野が遅れたそうだが、もう来ているか？」

「き、来てますキテます！」

まさか、まさか。本当にまさか。先生が遅刻したのだ！

「しかし、まさか長浜先生が遅刻とはねえ。あはははは」

「わ、笑うなあー！ こっちだってなあ、電車途中で寝過ぎなん
て思ってなかったんだよ！ あんまりバカにすると先生な、本気と
書いてマジで怒るぞ——っ！！」

なんかヒステリー気味にそう怒鳴ってはいたが、みんなが笑って
いるのを聞いたらそんなのはどうでも良くなったみたいだ。

すぐに機嫌が良くなり、長浜先生もまたゴーカイに笑いだしたの
であーる。

#36

「ふんふふん。ふんふふん。ふんふふっふーん♪」

「ららんららんらん」

「ららんらーん」

ついに来たぞ、プール開き。この時をどれほど待ったことか。

俺たちは水着を入れたバッグを手にとって、三人で仲良くハミングしながらプールへと向かっていた。そのぐらい今の俺たちは気分上々なのらく。さあさ、早いとこプールに向かいましょ。

「おっ、1年の刃野かぁ。それに……そいつら誰だっけ？」

「氷室ですっ！」

「神戸です！」

「あっ、そうそう。そういう名前だったな……もしかしてこれからプールか？」

「もしかしなくてもそうでっす！ いいでしょー」

その途中、2年の朝霧センパイに出会った。

見た目は如何にも喧嘩に明け暮れた番長といった感じでおっかないが、中身は生真面目で人情味溢れるすごくいい人なのだ。

その人柄もあってか男女を問わず慕われているそうだ。更に、同学年のしっかりもので真面目な次期生徒会長候補・三ノ宮ユカさんとは息がピッタリらしい。

なんでも同じ真面目なもの同士、意外とウマが合うんだとか。ちゅーか、そんなに気が合うんなら、もう結婚したらいいんじゃない？ ……？

「ところで、2、3年でオススメな人は誰かいませんか？」

「スク水、スク水！」

「なんだとく？ ……へへっ、お前らも物好きだな。その心意気、気に入った！ それじゃ、俺が個人的にいいと思った人を教えよう」
(ときどき……)

胸躍る瞬間！ でござんした。

俺もそうだが、高校生といえば体がますます大人に近付き、体つきがよくなってくる時期だ。男はムキムキマッスルに、女はムチムチぼいんぼいんに。

個人差はあるが基本的にはこんな感じだ。むっちりした体型の人がスクール水着をつけている姿を想像してくりゃんし？ こりは個人的な感想じゃが、おなかと腰回りとかたまらんぜよ。

「先輩のオススメってどんな人？ どんな人です？」

「まず三ノ宮さんは外せねーなア。いいトコのお嬢さんで、見た目よし中身もよし。スタイルも抜群、まさにパーフェクトだぜ！」

「さすが次期生徒会長候補だ！ すばらしい！」

「他に誰がいたかなア……そうだ、C組の鳥居本さんもいいぞ。スレンダーな体型で小さすぎず大きすぎず、それからカモシカに例えられるほど美しいおみ足がポイントだな」

「おおーっ。俺の好みどストライクだお……」

「あと誰がいたかなあ……そうだ、3年の枚方さんなんか超オススメだ。超ついちちゃったぜ、超！」

「どんな人？ 先輩教えてくらはーい！」

みんなノリノリだった。時間に遅れるのなんかお構いナシだ。この際聞いちゃえ聞いちゃえ。

「名前は平たくて、彼女自身も割と地味で大人しい人だが……実はある部分の自己主張が激しいんだ。それがどこだかわかるか？」

「おっぱい！ おっぱ……いい！」

「そうそこだよ刃野！」

「えっ、じゃあ太ももとかはどうなんスか？」

「もちろんむっちむちさ！」

リョウが唾を呑んだ。俺とレンも胸をドキドキさせながらぐくりと唾を呑んでいた。

地味で大人しいけど、巨乳でムチムチだトー？ それを聞いて興奮しないわけがないじゃないか。すばらしい！

「ありがとうございます！ それじゃあそろそろ行きますねっ」

「おう！ 元気に泳いで来いよ！」

さあ、お楽しみはこれからだ。プールへ行こう！

実はうちのプールはめちゃくちゃデカイ。市民プール並に広いから、のびのびと優雅に泳げるのだ。コースロープかけられたって大丈夫、余裕で潜れちゃうぜ！

「んっふっふっふ……ウォーターボーイズ！」

「気持ちいいぜー！」

「っ、つめたい」

準備体操をすませ、ダイブだ。個人的にブリーフみたいな海パンはあまり好きではないので、俺はトランクスみたいなタイプの海パンを着用している。

ただ、でかいから空気が中に入っちゃうんだよなあ、これが。

「よーし、お前ら！ これから好きな泳ぎ方で向こう岸まで競争だ！」

「おーっ！」

「みんな、張り切っていけよー」

「おおーっ!!」

「ちなみに先生は危ないことが起きないか見張るため泳がないぞー
！」

「えーっ」

せっかくみんな得意気込んでいたところでこれだ。

それが先生の役目だから仕方がないとはいえーあんた一応体育教師でしょーに。それでいいのか、長浜先生よ。俺は嫌だ！

「おりゃー！」

先生によれば好きな泳ぎ方でいいとのことだったが、俺はクロールを選びましたとのこと。

見事、チームがクロールと平泳ぎの2つに分かれたっけな。俺とリヨウはクロールで、レンが平泳ぎだった。

そして必死で泳ぎ、向こう岸へたどり着く。順位をつけるとしたら3位といったところかーって、半端だな、おいっ！ 2位よりマシだけど！ 万年2位よかマシではあるけど！

「なあ刃野オ……女子は平泳ぎよりクロールの方がいいと思うんだが」

「なんで？」

「だって平泳ぎじゃ腋とおっぱい見えねーじゃん！ あの大エロスが拝めないなんて、俺はそんなのヤだ！」

「何をぬかすかこのバカちゃんがっ！」

先に着いた俺たちはおしゃべりしながら待っていた。

が、女子がいるにも関わらず寺辺が空気を読まない発言をしたので懲らしめる。

こんな調子だから皆から嫌われるんだってことをいい加減に学習してもらいたいもんだ。

現にみんな迷惑がっているからなあ――。

「いてっ！ 何をするだあ！？」

「俺はオマエの先生じゃないが……この場は慎みなさい！ こういうイヤらしい話題はみんなの前でするもんじゃねえ。どうせやるな

ら、おうちでやれや。な？」

「あ、ああ……うん」

柄にもなく寺辺に説教をかましたということ以外、その後はとくに問題もなく進んでいった。そして放課後、我が家にて。

「今日は高校行ってからはじめてのプールだったけど、どうだった？」

「うん！ 楽しかった。それに水着の女の子もたくさん見れたしね」
「あらあら。もう、この子ったら」

晩ごはんを食べて、一息ついたときのことだ。

今日の水泳の授業のことを母さんらに話していたのだ。ちなみにルミや父さんも一緒だ。

「この前のお母さんのビキニ姿はご不満だったかしら？」

「いやいやそんなことない。ルミもそうだけど、むしろ最高だった。母さんは最高です！」

「分かっているなあマサキ！ 思えばワシも、さきこに惚れたのは水着姿がきっかけだったなあ。今でもそうだが美人だった。天女が水浴びしてるのかと思ったぞ、ハッハッハ！」

「ちよつと。照れるじゃないですか、二人ともお」

母さんが恍惚を帯びながらそう言った。その美貌と悩ましいボデーでそんな可愛いげのあることを言っていて――すごく、可愛かったです。

同時に父さんの昔語りを聞いたとき、俺のスケベな性癖は父方の遺伝だったのか――と、少し苦笑いしてしまった。やはり血は争えないようだ……。って、これは普通親が言うことだよな

「ねえ、あたしもお母さんみたいにセクシーになれるかなあ」

「えっ……そんなに私って色っぽかった？」

「うん。だってあたし胸小さいし、それにもうこれ以上は成長しそうにないし……」

どうやらママンはあれほどの爆裂ダイナマイトバディをもっているながら、自分自身のお色気には無自覚だったようだ。

実に勿体ない！　うちのダディが既にメロメロになってるっていうのに。

そんなママンみたいになりたいとルミは願っていたようだが、どういうわけかそれは叶わぬ夢だと諦めかけていた。しょうがない、ここはお兄ちゃんである俺がなんとか元気付けなと！

「ルミっ！　いいかい、よく聞けよ！」

「あ、アニキ？」

「ルミはまだ成長期だろ、理想のスタイルを持てるように頑張んなよ！」

「そうだぞ。例えば、牛乳を飲むとか牛乳を飲むとか……」

せっかく良いこと言おうと思ったらこれだよ。途中で割り込んでくるなよー。咳をして、俺は改めて激励をかける。

「だからルミ……あきらめちゃダメだ。もっと夢持とうぜ。な？」

「あ、ありがとう……アニキ」

なんということだ、またそれか。今度こそ違う愛称で呼んでもらえると思ったのに――俺は思わず目を丸くした。

「おいおいー！　せめてお兄ちゃんって呼んでちょうだいよお！」

「へへーんだ。アニキもいつまでも現状に甘えてちゃダメだよー」

「そんなあ……」

でも俺が思ってたよりルミはしっかりしていた。こりゃあ、あまり気になけなくても大丈夫かもしれない。

「うちの子供はホントに仲良しなア。しかし、あんなに小さかったルミも、来年でもう高校生か」

「時が経つのは早いですね。私たちのときもそうだった」

「三年間あつという間だったもんなー。そのあつという間をチビたちには楽しんでほしいもんだ」

「そうね」

「マサキいー！ お前こっち来いよ！」

「ヤダ。ヤダつつたらヤダ」

プールで感じた情熱が冷めやらぬまま迎えた休日。俺たちは例のアニメ〇トがあるショッピングモールにいた。

というか、実は案外寂しがり屋だったリョウに俺とレンが無理矢理付き合わされたのだ。俺もレンもリョウをほったらかしにしてアイスを食べに行ったりユ〇クロに行ったりしていたのだが、その都度呼び戻された。

大変だったんだぞ！ 何回全力で走らされたと思っている！ アスリートでもないのにこんなに走らされたら、もう足はフラフラさ。

「何でもそろってるぞ。お前らも来いよー」

「この前入ったからいい。それにうっさいの苦手だし」

「僕も興味はある。けどまだそこまで落ちぶれちゃいないよ」

珍しく盟友と意気投合した瞬間である。いや、盟友だからこそ気が合うのかもしれないが。それからしばらくして、観念したのかリョウは店から出てきた。

「おう、お疲れ。どうだ、何か買えたか？」

「へへっ……何を買うべきか分かんなくなっちゃまって、結局買えなかった」

「まあそういうときもあるわな。で、これからどうすんの」

俺がそう聞けば、リョウはなんともパツとしない微妙な表情を浮かべた。どうやらアニメ〇イトに寄ってから先のことは考えていなか

つたらしい。

嘆かわしい！　なんと思慮の浅い！　そんなんでは世の中やっていけないぞ。——と、うちの父さんならそういうだろう。多分ね。ん？　そういえば腹の虫が鳴ったような……………。

「……なあ、お昼まだだっけ？」

「そういえば僕もおなか空いてきたなあ。みんなどこ行きたい？」

「一階にフードコートあったよな。外にもいっぱいあったけど、あの辺でよくね？」

腹が減っては戦は出来ぬ。こうして三人一緒に昼飯を食べに行ったのだが——どこも多いじゃないか！　こんなに混んでいては並べない、メシも食べやしない！

もはや日干し並に乾いた笑いか出ないぞ。幸いドーナツ屋やお好み焼き屋は空いているし、少し待っていればファミレスもひとつぐらいは席が空きそうだ。

どちらにせよ、食べなければ生き残れない。食べなくても生き残れない！　いやダメじゃん、生き残らなきゃ。

そうだ、これはサバイバル。世の中は弱肉強食なんだ。強ければ生き、弱ければ——死ぬ。でも俺らって強かったかな。

むしろ弱い方じゃないか？　ライオンやトラみたいに優れたハンターで肉食獣でもなければ、カバやシマウマみたいに草食獣だが実は強いってこともないしなあ。

#39

「ただいまーっ」

「おかえり、アニキー。早かったねー」

「まあねえ」

紆余曲折あったけれど――無事家に帰ることができました。結局ア○メイトには入らず、終始リョウやレンに振り回されるだけの1日だった。だが！ 要所という要所で楽しませてもらったので、一概につまらなかったとは言えないのも事実。どちらにせよ、友達同士で遊びに行ったのだ。楽しかったに決まっているさ。

「おかえりー。案外早かったわねー」

「向こうで遊んでたら、急に帰りたくなってきちゃって。それで帰ってきたんだ」

「分かるわー、その気持ち」

「えっ？」

「最初は楽しいけど……だんだんおうちが恋しくなってきた、それで早く帰りたくなっちゃうのよねえ。私もそういうことがあったから」

「そうだったんだー……母さんにもそんなことが」

「ふふふ」

母さんが微笑んだ。いい笑顔だ、感動的だな。そしてやはり――心が癒される。いやらしさとかそういうの、まったく感じないから本当にすごいわ。つられてニコニコしながら、まったくリビングでくつろぐことにしましょ。パソコン？ ゲーム？ そんなもんはあとでいい。勉強だってリビング借りればそこで出来るし、もはや至れり尽くせりだ。そういうことだし、のんびりテレビでも観なが

らお茶とおかしを味わおう。あ、いや——のんびりお茶とおかしでも食べながらテレビ番組を観よう。……って、どっちでも同じじゃないか。

「えっ、えーっ！　また良いところで終わっちゃったよ……」

「昔っから、ドラマってそういうものよ。果たして次回どうなるか……私も気になるわ」

「刺されたところで終わりなんてズルいよ！　余計気になるじゃないか」

家族そろって、テレビ画面に食い入るように観ていたドラマ。その題名は——『地獄に咲くバラ』。ハードでシリアスかつ、陰鬱いんうつな内容で、生き別れた兄弟が再会するも二人は同じ女性に惚れており、その女性を取り合うドロドロした愛憎劇——という典型的な昼ドラマだ。しかしどこで道を踏み外したのか、だんだんその重々しい展開は気がつけばコメディタッチの笑える展開に変わっていたのだ。兄弟が仲直りしたり、女性が実は双子の姉妹でそれぞれが兄と弟に惚れていました——等々、突然の路線変更に伴う急展開通り越して超展開に戸惑った視聴者は計り知れない。正直言って、俺もこのストーリー展開は解せぬ。だが何だかんだでドラマの世界観に引き込まれて夢中になってる辺り、俺ってこの番組が好きなのかもしれないなあ。ちなみにこれ、再放送である。ご了承くださーい。そして、時は晩飯時へと移る。

「マサキ、またアニ○イト行ってきたのか？」

「うん」

「おみやげは？」

「買ってきてないよ、そんなもの！」

今日なにをしてきたかという話題を振られたので、目をパツチリ

と開き、誇らしげに口元を綻ばせてそう父さんに言っちゃった。所謂『ドヤ顔』という奴だ。父さんの驚いた顔がこの目に飛び込む！漂う謎の優越感――たまにはこういうのも悪くないなあ。ぐふふ。

「ところで父さんは何かあったの？」

「わしか？ わしはなあ……」

「もったいぶらないで言っちゃってよーっ！」

「せかすなよー……今から話すから！ な？」

せがむルミを相手に父さんはタジタジだ。こうやって母さんと一緒に、父さんが困った顔を見るのも楽しいねえ。わがまま言いたい放題の年頃な娘に振り回されるパパか――決めた。暖かい目で見守るぞ。

「今日のわしはな――…会社の若い女の子から飲みに誘われたんだよ」

「へえー。それでそれで？」

「でも断ったんだ。美人だったけどわしには母さんがいるし、それに浮気なんかして母さん泣かせたらダメだと思ったからなあ」

「うっそだあ。父さんのことだ、鼻の下伸ばしてただろ」

「ち、違う！ そんなことはやっくらん」

「あらあら。うふふ」

割とカッコよくて父親らしい台詞を吐いた父さんを敢えて揺さぶってみる。どうやら図星を突いてしまったみたいで父さんは酷くうろたえていた。やはりというかなんといえますか、面白い人だなあ。

#40

「うえー。いま何時だっけ？ げっ！ もう0時前じゃねえか！」

俺は基本的に夜更かしは休日以外はしない。平日になぜしないのかというと、その理由はちゃんと起きられる自信がないからである。だからすぐに寝るように心がけているんだ。

しかしながら、翌日が休みだった場合は余裕で起きます。やってみてあまりいい気分にはなれないけどね。リョウやレンみたいに夜中に起きてまで深夜アニメなんか見ないし。

というか録画する派だし。そう考えるとやっぱり、いつでもそういうのが見られるインターネットって便利なんだなあ。パソコンあってよかったわ、そう思いつつ——わしは寝るぞ！

「寝よう寝よう。そうしよう！」

パソコンの電源を切りコンセントも抜く！ これで節電するのだ。寝てる間は電気使わないからもったいないよねえ。

だからそうするのさ！ 皆さんも是非節電を心がけてほしい。名付けてヤシマ作戦だ、どこかで誰かが電力不足に頭を抱えているかもしれない。だから省エネでいくのだ。俺が節電する！！！！

——翌日——

「おはよー……」

「マサキくん、おはようっ。目の下にクマできてるけど……一体どうしたの？」

「はひよ。クマさん？ えっとね、その……俺さ、昨日夜遅くまで

起きてたんだよ」

「えーっ！　そういうの控えたほうがいいよ」

朝から麗しの学級委員であるエリカ様が出迎えてくれた。せめて生真面目な彼女の前でくらいは俺もまじめにしねえとなあ——うん。

「……ふーん。珍しいな」

「なにジロジロ見てる！」

「いや……お前もついに夜更かしに目覚めたか、って思ってたさ」

「そんなんじゃない！　昨日はたまたま夜中まで起きてただけだ」

リョウの奴め、思ってもいないことをぬかしやがる。ちょっと苦しい言い訳みたいだが本当のことである。だから俺は悪くない。悪くないんだ！

いつも多目に見てるけど今日ばかりは無性に腹が立ったから、別の人と一緒に食べようかね。いやそれがいい、そうと決まれば実行だ！

「あら、マサキくん。今日は氷室くん達と一緒に食べないの？」

「まあね。たまには気分転換もしたいなって思ってたさ」

「へえ、そうなんだ。珍しいわねー」

——というわけで。今日のお昼はせっかくなので、勇気を出して女子と食べることにした。

お相手はみんなが憧れる学級委員・エリカと、その友人で百合疑惑が一部でかけられている橘アヤさんだ。

仲の良さそうな二人の間に入ってガールズトークを邪魔してしまうのは少し気が滅入るが——仕方がない。

「あつ。マサキくんのお弁当おいしそう！」

「すごい！　これ、自分で作ったの？」

「ううん、母さんに作ってもらったんだ」

「卵と一緒にほうれん草焼くなんて、なかなかいい線いってる！」

マサキくんのお母さんに弟子入りしてみたいわー」

「マジ！？　母さんにまた言っとくねー！」

エリカとアヤさん、どちらが喋っているか分かりづらい人もいる
と思うんでここで一応補足を入れておこう。

明るくて純真な方が山科エリカちゃん、明るくて少し大人びてる
方が橘アヤさんだ。って、どっちも明るい子やないかい！

「はい、これで大丈夫ですよ。もしまた痛み出したり、ガーゼが剥
がれたりしたら、また先生に言いに来てね」

「はいッ！　ありがとうございます！」

「いえいえ」

——今日は午後から体育でバスケがあったのだが、その時に足を
くじいてしまったのだ。なので慌てて保健室へ行ってエリノ先生に
診てもらったというわけだ。

しかし、未だに姉妹そろってフラグが立たぬ。姉も妹も鈍感なの
か、それとも俺がフラグを立てるのが下手だっていうことなのか？
ちょっと考え事をしながらも俺はそろそろ保健室を出た。しか
し、相変わらずエリノ先生はエロ……あ、いや、若くてきれいだっ
たなあ。あれでまだ独身だなんてもったいないよ。

「オウ、刃野。おまえエリノ先生になに診てもらったんだ？」

「寺辺か。何かって、うーん……恋わずらい？」

「ウソをつくなーッ！！」

#40 (後書き)

氷室です。

夏休みシーズンが迫りつつあるんだけど、これが楽しいのって途中までなんだよなあ。

終わりが近付けば近付くほど何かしくなるっていうか、不安になってくるっていうか。

緊張感がすげーんだよなあ……。だからといって永遠に続いたら流石にダレちゃう気がするしなあー。うーん。

複雑ツスよねえー。皆さんはどんな夏休みを過ごしましたか？ そのときの体験談とか教えてほしいんで、そういうことなんでよろしくツス。

次回は……『アツがナツい！』　ちよっ、おま……これは寒いだらー！

#41

がたんごとん！ と、電車が揺れ動く。あとどのくらいで目的地に着くのだろう？

車窓から景色を覗きながら、俺はそんなことを考えていた。朝日が昇る丘にマンション、駅のホーム。いろんなものが俺の目を横切った。

「なあ、なんか珍しいもんあったかあ？」

「いっ」

そのとき、後ろから声が聞こえた。驚いて振り向くと、そこにいたのは――ピンク髪の子だった！

「し、しとみや 蒔屋さん」

「一緒になるなんて珍しいねえ」

もう忘れちゃったかもしれないので一応言っておく！ 蒔屋さんは双子の姉妹で、青い瞳の子が姉のリサさん、緑の瞳の子がゆうこさんなのだ。

見分け方はそれだけではないぞ。バリバリ元気な方がリサさんで、マイペースでややおっとりした方がゆうこさんだ。このように蒔屋姉妹は見た目だけでなく、性格でもバッチリ見分けられるぞ。

「おっ、お姉さんは一緒じゃないの？」

「お姉ちゃん先に行ってもうてなあ……しゃあないから、私はあとから来たんだよ。それで刃野さんと出会ったわけ」

「リサさんはせっかちだからねえ……」

なんて言いながら笑いあっていたら、電車はもう目的地に止まっていた。慌てて降りた俺たちはそのまま学校へ向かう。

たとえ通学時であろうと俺は、というかみんなは必死なのだ。理由は簡単、少しでも油を売れば遅れてしまうからである。

「――えー、かの海賊バスコ・ダ・ガマはのちに食卓には欠かせないものとなる、あるお宝を発見したのだが……それがなにか分かりますか？」

今日の最初に行われた授業は社会科だった。

夏といえば海のシーズンであることをよく理解していたのか否か、シンスケ先生は海賊とか大航海時代とかをメインに授業を繰り広げた。

「わかる人は手を上げてください。……おい、上がらんぞー！」

バスコ・ダ・ガマが何を見つけたかは知っているけど、あえては言わない。というか分かりづらいつての！　せめてみんなに分かる問題出さないと。

更に言えば、先生が出した問題の答えはガセかもしれない可能性だってあるのだ。そのことがバレてクビにされたって俺は知りませんよーだ。

などと考えていても誰も手を上げません。このままじゃうだつも上がりません。ならば仕方がない――俺が挙手する！

「先生！　そのお宝って黒胡椒ですか！？」

「ブブー、はずれ。正しくはブラックペッパーだ！」

「何それふざけんな！　どっちでも同じじゃねえか！！　わざわざ

英語で言わなくてもいいだろが！」

さすがにこれは訴えるべきだろう！　そう思っただけの行動だったのだけど……いま思えば怒鳴って大声出すほどのことではなかったな。反省。

「頭ひやせたか？」

「まだ熱い……」

「じゃあ、上から水かぶせてあげようか？」

「おいバカやめろ」

そこからとんで昼休み。わしゃあいつものようにリョウやレンと話し合っていた。俺からは朝の授業の話とか、電車で部屋さんと一緒にあったこととかを話したぞえ。

「へへっ。そうだ、ところで……」

「うん？　なんだ？」

「知っているか！　とある軽音部の日常を描いたアニメの舞台となった学校のモデルとされている小学校の校舎があるのだが、そのアニメが放送されたあとに……なんと！　その校舎がそのアニメのファンが殺到し今や聖地と呼ばれるようにまで発展したのだっ！！」

キャラ作りに必死なレンがまたもマニアックな知識をひけらかした。その知識をもっと他のことに活かせないものかね？　そうすれば成績も上がったはずなのに。

#42

「エリカあゝ」

「なあに？ 橘さん」

たのしい六波羅商業高校ろくはらしようぎようこうでの毎日ですが、最近気になることがあります。それはとっても些細なことなんですが――。

「あたし……その、なんていうか……」

「どうしたの？」

「エリカのことが好きっ！」

今日、橘さんから突然そう言われたときは、身体中に衝撃が走りました。私はそのとき啞然としていました。これって恋の告白だったのかな、それとも友達としての『好き』だったのかなあ――。どう解釈したらいいのか、まったく分かりませんでした。橘さん自身はどういう意味合いを込めてそう言ったのかな――。

「へえー。そんなことがあったのねえ」

「そうなのよ。お姉ちゃんはどう思う？」

家に帰ってから気になって仕方がなかったので、思いきってお姉ちゃんに相談してみました。わたしより人生経験が豊富なお姉ちゃんなら、なにかいい答えを出してくれるかもしれないからです。

「うーん」

お姉ちゃんは最初にちよつとだけ悩んでいる表情を浮かべていて、少し気まづくなりました。でもすぐに、にっこりと笑ってくれて嬉しかったです。

「世の中には同性愛っていうのもあるからね」

「……同性愛って？」

「同じ性別の人同士で愛し合うことよ。男の子なら男の子同士で、女の子なら女の子同士で……みたいな感じかなあ」

！？ 同じ性別同士で愛し合うってことは――、橘さんはあのとき……

「……お姉ちゃん」

「なあに？」

「わたし、告白されちゃったかもしれない」

そう言われてお姉ちゃんはビククリしました。無理ありませんよね、「告白された」なんて言っちゃったもの。

「うーん、でも……友達としての『好き』だったかもしれないわね」「気になるよね。あたしもその辺が気がかりだったの」

「明日橘さんにそのことを聞いてみたら？ 言葉だけじゃ本当の意味が伝わらないこともあるから」

「うん、そうする！」

どうやらお姉ちゃんも同じことを考えていたみたいです。決心がついたので、明日橘さんに真相を聞いてみたいと思います。

「ねえ、橘さん。昨日わたしのことを好きって言ってくれたよね。あれってどういう意味だったのか教えてもらえない？」

——翌日、休み時間に橘さんに会いに行ってみました。そして聞いてみました、先日言われたことの意味を。そしたら橘さんはこう答えたのです。

「えっ、昨日の？ あ、いや……その、とくに深い意味はないよ！」

——やっぱり私の考えすぎだったのかしら。橘さんもとくに私に気があったとか私にホレたとか、そういうのじゃなかったみたいで。これでひと安心——って一口に言っちゃって良かったのかなあ。

#43

ある夏の土日のお昼時。俺はリョウとレンと一緒に冷たいシェイクでも飲みながら、草津の百貨店でランチタイムを満喫していた。

あ、アニ○イトは行ってないよ。しかし暑いね——夏になったから仕方ないとはいえ、妙に暑い。暑すぎる。脳ミソが溶け出しそうなくらいだ。

現に俺なんか湯気が出てしまっている。この暑さにはリョウやレンも少し難色を示しているみたいだ。平たく言えば、——この猛暑に対して不満をつらつらと並べている！

「あっちいゝゝゝ………」

「暑いなあ。君ら夏バテとか大丈夫？」

「俺は大丈夫だけど、マサキは？」

「……俺も暑い！」

思ってることはみんな一緒だ。みんな暑くてかなわないのだ。しかも俺は人一倍暑がりだからなおさらである。シャツも基本的に半袖しか着とらん。そう思いながら俺は、ベーコンレタスバーガーをパクリとかじる。

「暑いと冷たいもん欲しくならねえ？」

「なるなる！　アイスとか冷やソーメンとか食べたくなるよね」

「一方で暑いからこそ熱いもん食べるツワモノもいるんだよね」

なにやら簡単なようで簡単じゃない話をしていらっしやるようだが、そんなことは俺には関係ない。今のうちにベーコンレタスバーガーとポテトを食べちゃうぜ。何せ俺は、おながが空いていたのだから。別にいいじゃないか、食べられるときに食べたってさ。

「マサキは熱いのと冷たいのとどっちがいいの？」

「んー、時と場合による。どちらかといえば冷やそうめんを選ぶけど」

「そうなのか。もしかしてお前、猫舌？」

「んなワケねーだろ！」

猫舌——とは熱いものが苦手で、口にした瞬間に舌をやケドしてしまう人や体質のことである。

熱いものって暮らしているうちに必ず出てくるから、そういう人はみんなで鍋物食べるときに困っちゃうんだよね。

氷入れて冷やしてもらったりとかすれば、なんとか仲間に入れてもらえそうだけど。俺は知らないが、そういう感じの改善方法はきつと何かあるはずだ。みんな、鍋焼きうどんは猫舌の天敵だ！俺は猫舌じゃないけど、皆さんも気を付けてください！

「それよりさ、このあとどうすつか決めてるん？」

「あいにくだけど、予定なんかござんせん。俺たちの好きにしようぜ」

「じゃあ僕、ユニクロにカッコいい服探しに行く！」

「そんじゃ俺、アニメ〇ト。マサキは？」

「んー……」

元気なおバカとクールでイケメンで残念なロリコンという、このメンツの中では比較的マジメで賑やかしみたいなポジションにいる俺は、実はあまり騒がしいのは好きではない。本屋みたいな静かな場所が好きなのだ。

「俺、書店に行くわ！ またあとで1Fの真ん中のエスカレーター前で落ち合おう。それでいい？」

「オッケー！」

「おっしや、わかった」

そうと決まれば早速！ 解散して別れようとした寸前に――やな奴がやってきた。

「オッスオッス！ お前らこんなトコで何やってんの？」

「げえ寺辺！ 君こそなんだ！」

「俺？ ……参上！」

いったい何がしたいんだ、こいつは。俺たちにはまったくわけがわからなかった。

「で？ オメーら何しにきた？」

「俺は書店。リヨウはオタクの聖地で、レンはひとりできびしくフアッションショー行くてさ」

「ひどいよマサキ！ 他に言い方があるでしょ」
「すまぬ」

そんなやりとりをかわしつつ、会話のどっかで相槌を打ちたかったんだけど寺辺のヤツはなかなか話を終わらせてくれない。やめてくれないか、正直うざったいから。そんな中、寺辺は急に腕時計を見始める。

「いっけね、もうこんな時間だ」

「おい寺辺、お前どこに……」

「アニ○イトまで萌えキャラちゃんのグッズ買いに行く！ お前らにやゃんねーよ！」

豪快に高笑い——もとい、バカ笑いを上げながら寺辺ヒロユキは俺たちの前から走り去っていった。

「……夏だね」

「夏だなあ」

「夏だもんねー……」

世間じゃ夏休みが近くなると変なヤツが沸いてくると言われているが——あいつはまさにその変なヤツだったのかもしれない。あいつのアレは暑さでおかしくなったんではなくて、元々だからなあ。

#44

「うーん。そろそろ切ったほうがいいのかな」

「神永さーん！」

「ふえ？」

「帰りスタバいこつ」

「わ、わかった。いいよー」

彼女の名は神永さん。1年E組にいる彼女はむちゃくちゃ髪が長く、なんと地面に着きそうなほど伸びている。俺も何回か会ったことあるけど、見る度に思う。『髪切ったほうがいいんでないの?』と。

「E組の神永カワイイよなー！」

「うんうん！ でもあの子、めっちゃ髪長いよね……」

「確かに。未だに後ろ姿を見るのに勇気がいるよな……」

きれいにまっすぐというか、無造作に伸びたその長髪から由来して、神永さんはよく冗談まじりに『日本人形』と呼ばれている。

そういう俺はきれいだなー、なんて考えとるが——こういう考えはヘンなのかな。おいらああいふ超ロングヘアー、大好きなんだけどなあ。

「ミカちゃん最近どう？」

「毎日絶好調よ！ アヤは？」

「うーん。まあまあかな。神永さんは？」

「私？ えーっと……よくわかんないや」

「パツとしないなー。よし！ どっかでジュース買おっか！」

「それ、いいアイデアね！」

「わたしもさんせーい！」

ある放課後の帰り、秘密裏に追跡していたレンや寺辺によれば、彼女は橘さんや敦賀ミカさんと一緒にいることが多いそうだ。いやあ、こういうとき『だけ』は本当に役立つよなあ。あのドスケベ野郎め。

「――ほんで気になる神永さんの情報は他にねーのか？」

「ちよつと待てよ氷室オ……んーとな、どこにしまったけな」

ちなみに神永さんについて情報を集めてくるよう依頼したのは、俺とリヨウである。

報酬は帰りにアメちゃんをあげるという形で渡す約束となっていた。俺もリヨウも気になって仕方なかったのだ。

とくにリヨウはぞっこんのようで――あれ？ おかしいねエ。こいつはロリコンだったはずなのに。

「あつたあつた！ これだ」

「……それを……、見せろッ！」

寺辺がカバンにしまっていたメモをリヨウがすばやくウヴァいる。この時の様子ときたら、そりゃあもう恐ろしいもんだった。

すげえ勢いで取り乱していたからか、いつものクールキャラが完全に崩壊していた。流石の俺もこれには引くわ……ドン引きだよ、ドン引き。

「ふむふむ、そうかッ！ なるほどッ！ 上から順に90、58、70か！」

「熱心になんか唸ってるけど、その数値はなんだ……？」

「知らねーのか？ スリーサイズだよスリーサイズ！」
「結構エロいんだな」

興奮ぎみにリョウが叫ぶ。こいつ何やってんだ、声がでかいから周りに丸聞こえだぞ。

しかも内容は女子のスリーサイズのことだし。あまりにらしくないぞーもしや暑さで頭をやられたのか？

「それだけじゃねえ！ なんとレッドアイズでブラックヘアーらしいんだ！ 日本らしくて大変よろしいッ！」

「や、闇属性っぽくてカッコいいね。あはは……」

「はーッはーッ。そしておうちは……」

「ダーッ！ これ以上はしゃべるな！ 神永さんが可哀想だろ！」

疾風怒濤の勢いでメモを読むリョウを止め、そのメモも取り上げる。

他の三人も含め、周りのみんなは唾然としていたな。そして俺は、エリカや三ノ宮さんのいる生徒会にこれを持っていき――。

「三ノ宮さんッ！ そしてエリカ！ 大変だ！」

「1年の刃野さんね。何かありましたの？」

「1年C組の神戸と同じくB組の寺辺が、E組の神永さんのことをつけていたみたいです！」

「えーっ！？ 神戸くんと寺辺くんが……？」

「信じがたいことだけど、本当なんだよエリカ。……しかもあいつら、神永さんのスリーサイズまで調べてました。けしからん！」

奴らは何をしたか洗いざらい告白。

リョウも同罪だが、ここはとりあえずあいつらだけにしときまひ

よ。しかしエリカや三ノ宮さんの曇った表情を見ると心が痛む……。

「なんですって！ それは許しがたいわね……」

「確かに……」

「――わかりました。私のほうから先生方に伝えておきます」

「はいっ！ お願いします」

こうして生徒会から先生方にレンや寺辺が神永さんのことを嗅ぎ回っていたということが伝えられ、二人は成敗されたのだった。

しかし後に、二人の供述で俺とリョウが黒幕であることが明らかになり、俺たちも制裁を受けましたとき。――って、なんかおかしな話だな。日本語もなんかヘンだし。

#45

——じめじめしてて鬱陶しかった梅雨も過ぎて、今や夏真っ盛り。
外はお日さまがカンカン照りで、中は扇風機やクーラーが絶賛稼働
中。なんでも今年は超^{スーパー}クールビズと省エネを心がけよとのことだが
——この暑さだ。冷房^{クーラー}を我慢しろだど？ それでどうせ入れるなら
2℃プラスしろだど？ ふざけるな、そんなことできるかあ！ 熱
中症になったらどないするんやアアア！ そうなったら本末転倒や
ないけえ！！ 省エネなんざクソくらえや、わしは無理な我慢はし
いひん！

「あつちいゝ……」

それはさておき……さすがに一日中冷房かけるほど、俺っちもバ
カじゃあない。扇風機を回して窓を開けている。パソコンつけてる
せいか蒸し暑いんだけど……我慢だ。まだ朝だし。昼間に比べりや
まだマシな方——なので、この時間帯に冷房なんてつけたら負けで
ある。点けちゃダメだ、点けちゃダメだ。点けちゃダメだ、点けち
ゃダメだ点けちゃダメだ点けちゃダメだ点けちゃダメだ点けちゃダ
メだ点けちゃダメだ点けちゃダメだ点けちゃダメだ点けちゃダメだ
点けちゃダメだ点けちゃダメだ点けちゃダメだ点けちゃダメだ点け
ちゃダメだ点けちゃダメだ点けちゃダメだ点けちゃダメだ点けちゃ
ダメだ点けちゃダメだ点けちゃダメだ点けちゃダメだ点けちゃダメ
だ点けちゃダメだ点けちゃダメだ点けちゃダメだ点けちゃダメだ点
けちゃダメだ点けちゃダメだ点けちゃダメだ点けちゃダメだ点けち
ゃダメだ点けちゃダメだ点けちゃダメだ点けちゃダメだ点けちゃダ
メだ点けちゃダメだ点けちゃダメだ点けちゃダメだ点けちゃダメだ
点けちゃダメだ点けちゃダメだ点けちゃダメだ点けちゃダメだ点

けちやダメだ点けちやダメだ点けちやダメだ点けちやダメだ点けち
やダメだ点けちやダメだ点けちやダメだ点けちやダメだ点けちやダ
メだ――

「あ、暑い……こんがり焼けそう」

点
け
ち
や
ダ
メ
だ
！

「あつちいいいいいいイもう我慢できん！」

まだ点けないつもり——ではないんだ。でも体が勝手に！

「母さあああん！」

「どしたの？」

「く、クーラー入れていい？」

「もしかして、暑いので我慢できなくなった？」

「そ、そーなんだ！ 今にも蒸発しそうなんだよ！」

「それはちよつと危ないわねえ……」

母さんが目をつぶり、思考する。その間に俺は、お喉が乾いたの
で——お茶を飲みに行く。母さんが冷やしておいてくれたものだか
ら、とてもおいしい！ のど越しスツキリ！ 熱いお茶も嫌いじゃ
ないが、やはりお茶はこうでなければな。夏場のお茶はウマいから
ね。

「あ、あの……クーラー入れても、イイ？」

「い
い
わ
よ
」
♪
「

「——いやつたあああああ！」

「ふふふ」

歡喜。俺歡喜。全俺が喜んだ。ちゅーか他に何ができるさね？
その後俺は、クーラー入れつつ適当に電源を切って空気を入れ換え
るのであった――。

#46

「終わったなあ、終了式！」

「高校でも校長先生の話って長いんだな」

このいかにも不真面目そうな二人が言っている終了式とは――、学校全般において学期を終えるために行われる催しもよおのことである。厳密にはちよつと違うんだが、だいたいはそんな感じだ。この終了式が一年の中で最初に行われるのは7月の夏真っ盛りだ。

体育館の中か或いはグラウンドで行われるのだが、どちらも――暑い！ グラウンドは炎天下だし、体育館にゃクーラーついてないで大変なのだ。

そんな中で校長先生のありがたいような、どうでもいいような長ったらしいスピーチを聞かされるのはたまったもんじゃない。

だが、嫌なことばかりでもないぞ。なぜそうなのかは皆さんならお分かりいただけるはず。終了式の次に来る大イベントといえば……？

「はーっ！ やつとだね、夏休み！」

そう、夏休みだ！ 夏休みとは言うまでもなく、7月後半から8月ぜんぶまで、長期に渡る大型連休のことである。これが待ち遠しくて仕方なかったんだよ。

「うんうん！ しかも高校に入ってからのはじめてだしな！」

「何して遊ばーか？ プールにTVゲームに、それからアニメ……いろいろあって迷っちゃうね」

下駄箱でこんなことを話し合っていた俺とレンだったが、そこにクラスの学級委員であるエリカがやってきた。ちなみにレンはエリカとは違うクラスだ。俺はエリカと同じクラスだけだな。

「こらーっ！　ちゃんと勉強もしなきゃダメよー！」

「え、エリカ！？　聞いてたのか……ご、ごめんなさいでしたあーっ！！」

「べ、べべ勉強します！　しますから許してえ！」

彼女は不真面目な輩が大嫌いだ。とくに勉強してなさそうなヤツに対しては厳しいのだ。俺はそんなに怒られたことはないの、彼女に嫌われるタイプじゃない……と信じたい。

「へえ、アニキ今日から夏休みなんだ」

「ああ！」

「いいなあ。あたし、終了式が来週なんだよねえ……」

「フフン。うらやましいだろうそうだろう」

家に帰った俺は、のんきにアイスを食べながら夏休みと終了式について話し合っていた。ルミの悔しがる顔もまた——カワイイ。

まったくカワイイ妹を持ってしまったものだ。ママンは美人で巨乳だし、親戚のしずか姉さんも美人でナイスバディだし。

俺ってもしかして、至れり尽くせりじゃないか？　こういうのをリア充って呼ぶんだろうな。ってことは——俺は近いうちに爆発させられる運命なのか！？　そんなの嫌だ——っ

「だがルミよ！　おまえなら分かっていると思うが、夏休みだからって遊んでばかりではいかん！　勉強と宿題、そしてお手伝い！　これらをすべてこなして有意義な夏休みを過ごさなきゃな」

「でもアニキの夏休みって遊んでばかりじゃん。勉強してるってことないよ」

「そ、それは誤解だよ。ちゃんとやってるぞー」

「うっそだあ。パソコンとゲームばっかやってるくせに」

「うっぐ！」

「それにアニキって一夜漬けるタイプでしょー？ あたし、お母さんからそう聞いたよ」

「ぶべらああああ！！」

はいダウト！ ルミに論破されてしまった。確かに俺は遊んでいることが多いが、勉強だってちゃんとしているさ。

ルミの見てないところでやってたり、友達の家まで行って宿題やつてもらったりしてっけどな——はわわ。

騒ぐ俺と笑うルミのもとに、ママンが花茶をもってやってきた。

みんな、水分補給は欠かさずになあ。とくに夏場は危険だぜい

「……あら、マサキもルミもどうしたの？ そんなに大きな声出しちゃって」

「い、いやさ……ルミと夏休みについて話し合ってたんだけど、ルミがいきなりビックリするよーなこと言ってきて」

「えー？ アニキが一夜漬けるタイプっていうのが一番ビックリしたけど」

「受験は一夜漬けて夏休みの宿題は友達に全部押し付けて……お父さんはそういうタイプだったらいいけど、マサキはちゃんと勉強するタイプだから大丈夫ね」

なんだと、俺の父さんはそういうタイプだったのか！ まったく度しがたいな……。いや、一夜漬けが悪いとは思わんよ。ただ、夏

休みの宿題を友達に押し付けてやってもらうつちゅうのはちょっと
な——、ダメってレベルじゃねえぞ！

その頃、父さんというと

「へっくしょい！ 誰かわしの噂したか……」

「いや、してませんよー」

「そうか……じゃ、いいや」

職場でくしゃみしていたらしい。

#46 (後書き)

マサキです。

……暑い！ 暑すぎる！

予告なんかやってらんねー、俺は部屋でクーラー入れてねる！

次回、『3Dは目に悪い』お楽しみにッ！ あーもう、暑すぎ！

#47 (前書き)

第九話 『3Dは目に悪い』

さて、夏休みが始まったわけですが——この期間にのみ発生するイベントはいいいくつあると思う？ 海の日はもう過ぎちゃったが、夏祭りに花火大会にプール——とにかく目白押しだ。とくに花火大会と夏祭りはデートの定番だから、この機を逃す手はない！好きなコと仲良くなりたい人は要チェックだ。

だが夏休みのイベントは良いことばかりじゃないんだな、これが——成績が悪かった人はガッコで予習を受けなければならない。更に言えば、遊んでばかりの夏休みにならないように宿題もしなければいけないのだ。これがまた大変でさ、量がとにかく多いんだわ……学校に通っているみんなは、宿題は早めに終わらせようね。でないと8月31日に地獄を見るから——。8月31日といえば夏休みの終わりであり8月最後の日。その日までに宿題をやっておかないと地獄を味わうことになるのだ！残された時間は24時間だけ。だが宿題の数は圧倒的な物量！更にプレッシャーものしかかり、身体的にも精神的にもキツイ。最終手段として友達に押し付けてしまう方法もあるんだが、友情を破壊してしまいかねないので出来ればやめておいたほうが賢いぞ……。苦しみたくないのなら宿題は早めに済ませよう。お兄さんとの約束だぞ！

「エリカーっ」

夏休みが始まったばかりの日のことである。宿題で分からないところがあったので、山科家にお邪魔して教えてもらおうと俺は思ったのだ。ピンポーン！と玄関のブザーを鳴らしてみると——

「あら、マサキくん！ 何しに來たの？」

「うん、ちよつと……宿題の解き方を教えてもらおうと思ひまして」
「えーっ！ しょうがないなあ。ま、いっか……どうぞ上がって」

玄関へ通してもらつた俺は靴を脱いで家へと上がる。なかなか大きな家なんだが、エリカによれば、学級委員長の三ノ宮さんの家に比べたらまだまだ小さい方らしい。お金持ちはやはり格が違うなあ、エリカんちより大きいとは……今度行ってみようかの。

「ありゃ？ 今日はエリノ先生いないの？」

「お姉ちゃんなら今、学校よ。多分もうちよつとしたら歸ってくると思う」

「そっか……」

どうやらわしの天使・エリノ先生はまだ学校の保健室にいるようだ。ちよい残念……まあいっか。せっかく來たんだし、お勉強の解き方をレクチャーしてもらわなきゃね。わりかし得意な国語に社会、苦手な数学に理科——とにかくいろいろな事を取り取り教へてもらった。やっぱりエリカは勉強が得意だなあ。俺とは大違ひだぜい

「はーっ！ 本当に助かつたよ！ サンキュー、エリカ！」

「たまには自力で解いてよー。そっちの方が勉強になるから」

「デヘヘ、すみませーん」

なんて注意を促されて、ほつぺたを搔いていると——ありゃ、インターホンが鳴つたぞ。お客さんかな？

「はーい」

エリカが玄関のドアを開けると、そこにいたのはなんと

「ただいま」

「お姉ちゃん！ おかえりー♪」

な、な、ななんと！ 彼女の姉で六波羅商業高校（略して六商）の校医であるエリノ先生だったのだ！

「あら、マサキ君が遊びに来てたのね」

「はい！ エリカにちょっと宿題のことを教えてもらいに来ました……どうしても解けない問題があったので」

「そうだったの。わたしは自分で解いた方が勉強になると思うけどな」

あうう……妹さんと同じことを言われてしまった。

「それで、その難しい問題は解けましたか」

「はいッ！ お陰様でバッチリです」

「そうだったの。それはよかった。エリカは勉強が得意だし頭の回転も早いから、今日だけじゃなくて今後も参考になると思うよ」

うっ——その天女のごとき優雅で美しい姿はさることながら、おっとりした口調がたまらん！ エリカのことを褒めちぎっているのも、それだけ妹のことを厚く信頼していて深く愛しているっていうのが伝わってきてヤベエ。

「そ、そんな大袈裟な。買いかぶりすぎだよ、お姉ちゃん」

「えーっ。そんなに謙遜することないわよ」

ちよっと照れながら返事をするエリカの姿も、なかなかカワイイ

のう。ああ、これほどすばらしい姉妹愛が他にあるだろうか。なんか俺、邪魔者みたいになってきた――。二人の姉妹愛に水を差してしまわぬうちに帰らなくては。

しつこいようだが夏つてのは大変な季節だ。毎日毎日がうだるような暑さだし、暑いからといって冷たいものばかり食べてると夏バテするし、汗いっぱいかくから塩分とらなきゃいけないるし、水分もしつかりとらなきゃ熱射病になるし――ああもう！ 大変！

「マサキ、ちゃんと宿題やってる？」

「まあまあ進んでるよ母さん」

「そうなの。それで今日はどこ行くの？」

「市民プール！ たまには運動しなきゃって思ってたさ」

「プール行くのね？ それじゃ、あまり周りの人に迷惑かけないようにね」

家にこもって宿題を進めるだけが夏休みじゃない。たまには外に出て日焼けせにゃなるまい！ そう思ってプールの準備をしてマチャリ漕いで市民プールに向かったのだが――。

「オオウ……イイ天気だ。いい風が吹くなあ」

ペダルを交互に踏んで足を動かすこの感覚。道を突っ切る疾走感。どれも徒歩じゃ味わえないんだよね。そこが魅力的でよろしい。ところがどっこい、その道中で急に空が曇りだし、ポツポツと雨粒が――。

「ん……！？」

「ただいまーっ！」

「あら、マサキ。ずいぶん早かったのねえ。それで泳いだの？」

「い、いや、その……雨降ってきた！」

「まあ大変！ 早く洗濯物入れなきゃ……」

夕立とかにわか雨とか、この時期はそういうのがよく降るんよ。だからおいらは慌てて帰ってきたってわけ。雨降ってたら泳げないしなー、ホントやんなっちゃう。

#49

夏休みは長い。いや短い。いやいや長い。まる1ヶ月と2週間だからな。だからといって遊んでばかりもいられない。お手伝いにお勉強、適度な運動と水分補給、あと節電。有意義に過ごさなきゃ意味がない。もちろん俺は、毎年有意義に過ごしているつもりだ。もちろん勉強だってちゃんとやってるぜ。だが、やっぱり――たまには遊びたい！

「……ふう。いいとこまで終わったなあ。さて、どうしようかな。アニメ観るかな。それともゲームしよっかなあ。あ、いやいや、録画した映画も捨てがたい……って全部インドアじゃねーか！ ダメじゃんアウトドアでいかなきゃ！」

まさかの一人でノリツツコミ。これほどむなしく悲しいこともあるまい。せっかくなんだし外出なきゃ。財布の中身を見て余裕があるかないかを確認し、おいらはサブリュックを肩にかけて一階のリビングへ降りていく。

「アニキー、どこ行くの？」

「ちよっとお外で遊んでくるー！ ルミー、何か欲しいものあるかい？」

「ぬいぐるみ取ってきてー」

「ぐふっ！ な、なぜ分かった。俺がゲーセンのUFOキャッチャーで遊ぼうとしていることが」

「うーん……女のカン？」

ルミがいやらしい感じに呟く。この小悪魔めエ……いちいち仕草がかわいすぎるぞ。こうなったらしゃーないな、愛する妹のために

ぬいぐるみを取ってきてやるか。でも、取れるかなあ。UFOキャッチャーって運ゲーなんだよな。物理演算だかなん다가働いててスゲー取りづらいの。テクニクとか関係なしに、リアルラックの勝負なの。ラッキーじゃない人はどうやっても取れない。ムキになって交通費までUFOキャッチャーにつき込んだら負けさ。みんな、このことをよく覚えといてね。

「マサキ、どこにお出かけするの？」

「ちよっとゲーセン行ってくるー」

「あら、マサキがゲームセンター行くななんて珍しいわねえ。それで何しに行くの？」

「UFOキャッチャーやってくる！ それだけだよ！」

「あらあら。でも、遊びすぎたらお金なくなっちゃうからほどほどにね」

「はい！」

外に出ると我が家の女神様ことさきこママンが洗濯物を干していた。黒髪ロングとタレ目がたまらんのう。エプロン姿もいかにも若奥様って感じでなかなか。あと大きなおっぱい！ ちよっとだけおしゃべりしたあと、俺は自転車漕いで近くのゲーセンまで行きました。あ、ちなみにママチャリよ。でなきゃ荷物が乗せられないから大変。

「よし、何して遊ぼうかなー」

ゲーセンに到着。さすが最新のアミューズメントスポットだ！ 内装がメチャきれい。電飾もピカピカ。でも省エネ中なのかそこまでピカピカでもなかった。ま、仕方ないよね。辺りを見渡し何か面白そうなものがないか探したけど、とりあえず今はUFOキャッチ

ヤーとぬいぐるみだ。お小遣いには余裕がある。サイダーのペットボトルもあるし、準備は万端。さあ、行くぞ！

「おーっ。こりゃあ豪華なラインナップ……」

壁の付近にそびえ立つUFOキャッチャーの筐体。ガラス越しに中を見てみたら、ぬいぐるみだけでなしに特撮ヒーローのオモチャにプラモも置いてある。これは意欲が高まるな！ よし、さっそく遊ぶぞー。百円を投入し、クレーンを右へ。インド人じゃないぞ。

「うっし、これに決めた。これならルミも喜ぶぞー」

俺が狙いを定めたのは、東洋の龍をモチーフにしたぬいぐるみ。龍といえば神にも等しいありがたい生き物だ。威厳に溢れた姿をしているが、このぬいぐるみはそれをかわいらしくアレンジしている。それだけでなく細かい部分も凝っていて、遊ぶものの意欲をそるつくりだ。俺もほしい！

「よーし、そこだ。がっちりつかめよ、離すなよ……」

クレーンが龍のぬいぐるみをキャッチ。昔のゴ○ラのぬいぐるみみたいでかわいいなー。是非とも手に入りたい。さあ、穴までそれを運んでくれーってちよっ何やってんだよ！ そこで落としてどーすんのよーどーすんの俺？ どーすんの！？

「まだだ！ まだカネはある！」

しかし俺はあきらめない。落とすたび金をつぎ込み何度もチャレンジしたが、なかなか取れず――。

「すねええええく!! まだだ! まだ終わってない!!」

俺の怒りはついに爆発炎上した。だが、怒ったところでどうにもならぬ。運がすべてを左右する。だから運が悪いと全然とれないのだ。悔しいけれど、事実である。

「く、くそ……」

財布を確認したところ、残っていたのは帰りの交通費のみ。もちろんこれ以上は使えない。あきらめて帰るしか、と思ったとき――。地面に着きそうなが――い髪をなびかせた、きれいな女の子がそこに現れた。

「マサキさーん、どうしたの?」

「か、か、か、かつ神永さん!? どうしてここに!?!」

「宿題がはかどらないからね、ちょっと気分転換に来てみたの。結構楽しいよね」

彼女は神永さん。俺やリヨウとは違うクラスにいる女子だ。とにかく髪が長く、前髪も長めなので片目が隠れちゃうんだとか。

「へえ、そうなの……神永さんってこういうところあんまり行かないイメージがあったけどなあ」

「ううん、そうでもないよー。友達とよく一緒に遊ぶから」

「そうなんだ」

「ところでマサキさんは何してたの?」

「え、俺? 俺はねー……んー。ここでぬいぐるみをキャッチするのに必死になってた」

「なかなかキャッチできないよねー」

もう一回ぐらいチャレンジしたいが、残念ながらお金はない。神永さんとしばらくしゃべったあと、俺は引き返すことにしたが——そこに鶴の一声が！

「……いま、お金ないんだよね？」

「うん、もう帰りの交通費しかないんだ」

「じゃあさ、こういうときは——店員さんに言ってみたら？」

「え？」

「店員さんに言えば出してもらえるかもしれないわよ」

「……それだ！」

その発想はなかった……。神永さん、あつたまいー！

「ただいまー！」

「あっ、アニキ！ おかえりー」

「何かいいのもらってきた？ うふふ」

神永さんに助け船を出してもらい事なきを得た俺は、潔く帰宅した。そして目を輝かせて俺が帰ってくるのを待っていたルミと母さんに、手に入れてきた戦利品をお見せする。例の龍のぬいぐるみだ。そんだけだ。

「じゃじゃーん！！」

「わっ、すごい！ ラゴンくんじゃん！ どうやって手に入れたの？」

「それがねー、実は……」

「実は……？」

「何度やってもゲットできなかったんだ。だから店員さんをお願いして取ってもらったの」

「あらあら。大変だったみたいね……」

「でしょ！？ できればしたくなかったけど、お金の都合でお願いせざるを得なかった！ 良心が痛んだよ……」

龍のぬいぐるみこと、ラゴンくんを片手にUFOキャッチャー相手に死闘を繰り広げていたときの出来事を二人に話す。いや、楽しんでゲットできてラッキー！ なんてこれっぽっちも思っていないからな。本当につらい気持ちだったんだから……これはウソではないぞ。ラゴンくんをルミに手渡し、手洗いうがいをすませた俺はお茶を飲んで一息つく。

「母さーん、今日の晩ごはんーに？」

「今日はカレーよ♪」

「わーい！今日は母さんのカレーだー！わーいわーい！！」

「あらあら、マサキったら可愛いわねえ」

おほほ、とママンが口元を綻ばせて優雅に笑う。クーラーはよく効いてるし、お茶はウマイし、今夜はカレーだし、ルミは可愛いし。至福のひとつときだ。この際UFOキャッチャーでの苦い思い出は忘れよう、そうしよう。水に流しちゃえ。

「……ねー、アニキ。感傷に浸ってるときに悪いんだけどさ」

「なんだ？」

「また今度でいいから、ラゴンくんの色違い……とってきて！」

「オツケー、色違いね。……って、ええええええええええええ！？」

妹というのはかわいいもんだ。だが、ときには悪魔のような一言を言うこともある——まったく恐ろしいのう。

「……というわけなので、ラゴンくんの白いバージョンください！」
「ムリです！一度でいいのでUFOキャッチャーを遊んでからそう言うってね」

「えー、そんなぁ……」

翌日、同じゲーセンで同じ店員さん（爽やかなイケメン）にお願いしたのだが聞いてはもらえなかったという……。そりゃそうだよ。楽しんで手に入れるなんてダメだよ、うん……。

#51

長い夏休みはまだまだ続く。楽しいこともまだまだ続く。でも宿題はまだまだ終わらない――。

「あーっ、ダメだ。今日はもうダメだ、宿題やってらんねー」

宿題つちゅうのを早く終わらせるにはひたすらにやり続けるしかない。ツライよなあ。苦しいよなあ。だけど皆この地獄の苦しみを乗り越えてきたんだ。おれも何とかしなきゃな――。

「そういやおじいちゃんがこう言っていたな……『宿題を終わらせる方法は、宿題をやり始めることだ』って」

――またまたおじいちゃんの言葉を引用してしまった。いま思えばすごく良いおじいちゃんだったなあ。小さい頃はワケわからんことばかり言うジジイって印象しかなかったけど、ホントは哲学的かつタメになる話をいっぱいしてくれる良いおじいちゃんだったんだよね……もっと早くに気付いておくべきだった。まだおじいちゃんは生きてるけどね。

「……でも今日はここまで。気分転換にゲームやろーっと！」

本体をセットしてテレビやコンセントに配線を繋ぎ、ゲーム・スタート。じいちゃん、すまぬ。ここまで宿題を頑張ってやってきたから、今日ぐらいは遊ばせて。

「うわ、もう十機なくなっちゃった……結構難しいんだよなあ、こ

れ」

俺がいまやってるこのゲームは、ここ最近のゲームの中ではすごく難しい部類に入る。だが、あまり理不尽さは感じられない。理由は道中で死にすぎてプレイヤーのストレスがたまらないように、ステージをクリアできないプレイヤーへのお手本プレイやヒント機能などのヘルプが充実しているからだ。要するに理不尽じゃない死にゲーであり覚えゲーである、ってことだな。うん。

「よっしゃあと少し……って、あっ！ あーっ！ やられたーッ
！！」

でもヘルプが充実してるからって油断しちゃいけない。その辺は難易度高めのアクションゲーム、油断してたら今の俺みたいになっちゃうんだぜ。俺も次から気を付けよう……。と、そんな折、携帯電話から着信音が鳴り響く。プレイ中に鳴る携帯電話ほど嫌なものもないけど、ここは出なきゃな。

「もしもーし！」

「おう、マサキ。オレだよオレ、リョウだよ」

「おっ、リョウか！ なになに？」

「今日商店街の方で夏祭りあるんだよな。オレは行くけどお前も来るか？」

「行く行く！」

「オッケー、わかった。オレは神戸のやつ誘ってくから、お前はエリカさんかアヤさん辺り誘ってみな。じゃあな！」

電話は俺のクラスメートであるリョウからのものだった。あいつとは高校に入ってから知り合った仲なんだよな。あいつが言っていた神戸ってのは、俺の幼稚園時代からの友達だ。二人とも気さくで面

白いんだよな。

「夏祭りかあ。金魚すくいに射的に輪投げ、それからウマいもんがいっぱい！ 夏の醍醐味だよなあ、誰を誘おっかな。へへへ」

「いやあ、楽しみ！ さてさて、こっからどうしようかね。ムフフ――」。

「ここかあ、祭りの場所は？」

「ま、マサキ！ 早いなあ。電車混んでなかった？」

「おっ、結構早かったなマサキ！」

「いやあ、お待たせ！」

所変わって夏祭りの場所。射的に輪投げ、それから綿菓子。いろんな屋台が立ち並び、夜の町を星空とカラフルなちょうちんがステキに彩る。実に楽しげで華やかだなあ――。今日はお駄賃もたっぷりもらってきた事だし、楽しんでいこうやないの。

「……んで、マサキさ」

「なんだ？」

「あのさ、なんでさ……なんで両脇に女の子を侍らせてるの？」

レンがうらやましそうに言う。彼が言う通り今の俺の隣には、女の子が二人いる。髪が青くて瞳が緑色、ピンクの浴衣を着ているのが橘アヤさん、地面に届きそうなほどながーい黒髪をなびかせていて瞳が赤く、藤色の浴衣を着ているのが神永さんだ。どっちもきれいだわー！ とくに神永さんは、浴衣がデフォの服装でいいぐらい似合ってる！

「マサキくんから電話来たの。一緒に夏祭り来ないか、ってね」

「わたしもマサキさんから誘われたの♪」

「そ、そうなんだ。すごいな……」

「く、くそっ……いつの間に神永さんやアヤさんと仲良くなったんだ」

「へへへ、うらやましいだろう」

悔しがるリョウとレンを見るのは、何とも気分がいい。だが、このままだと可哀想である。どこかで彼らにいい思いをさせてやらねばなるまい。ちなみにエリカも誘おうとしたけど、姉のエリノ先生と一緒に回りたいとのことでお誘いを断られてしまった。ま、仕方ないよね。とりあえずはこのメンツで回りましょ。

かくして俺たちは別行動をとり、祭りの境内けいだいをいろいろと見て回る事となった。そうと決まったからにはガンガン楽しむぞーい！

「そんじゃー神永さん、どこから行く？」

「うーん、そうねえ……。綿菓子を食べたいな」

「綿菓子ね、りょーかい！」

俺は今、神永さんとペアを組んで行動中。まっすぐきれいに伸びた黒い長髪に雪のように白い肌、そして藤色の浴衣――。素晴らし
い！　そして可愛すぎる！

「綿菓子おいしいしーい♪」

「ホントおいしいよね！」

神永さんがとても嬉しそうに笑う。――なんだろう。よく分からないけど、なんかこう、すっげえほかばかしてきた。世の中もつとほかばかするべきだよな、うん。しかし俺の目に入ってきたのは神永さんの暖かい微笑みだけではなく……。

（おっ……こっ、これは……）

「……どうしたの、マサキさん？」

（たまらんツツツ）

「あの一……」

これは見とれちゃう。いや、見ないわけがない。だってこんな浮世離れした雰囲気のかわいい子が、おっぱい大きいからって少しは

だけていたらどうして目が行っちゃうじゃないか！ え、俺だけだった？ 俺だけですか、そうですね――無念。胸だけに。

（にひひ！ ええのう！ かわええのう！）

「もしもーし」

「えっ！ あ、いや何でもない！ つ、次行こうよ」

「うん！」

それから俺と神永さんは、しばらく屋台を見て回った。屋台めぐりと遊びこそお祭りの醍醐味。金魚すくいに射的に輪投げ！ 昔ながらの伝統ある楽しい遊戯が勢ぞろいだ。

「あつ、マサキくん。今日は神永さんと一緒なんだ」

「うん、まあね。エリカはお姉さんと一緒みたいだな。楽しそうで何より！」

「そういうマサキくんはもっと楽しそうですよ。せっかくのお祭りだから、二人とも楽しんでいってね」

「はい！ 喜んで！」

見て回る途中で山科姉妹に出会った。二人とも相変わらずきれいだ。エリノ先生もエリカも、浴衣が良く似合っている。誰だ、和服は貧乳じゃなきゃ似合わないって言ったやつは？ 出てきんしゃい、巨乳のお嬢さんでも似合うじゃないか。この姉妹を見ればよくわかる！

「お金使いすぎないように気をつけてね」

「それじゃあね、マサキくん！」

「二人ともお元気でーっ！」

「また学校でー！」

山科姉妹と別れてからも俺と神永さんはいろんなところを回って祭りを楽しんだ。食べたり遊んだり、リョウやレンと合流したり笑ったり……。本当に楽しいひとときだった。

あ、でも、一番楽しかったのはあれな。花火大会だ。合流してから一番見通しのいいところを探したんだが、これがなかなか見つからなくてさ。

既に満席だったり後ろの方だったり……。それでも何とかいいところを見つけてることが出来た。もう本当に嬉しかった。花火がいちばん前で見られるんだもん。

「花火まだかなー」

はじまる前のことである。柵の上に腕を乗せて全裸で待機——じやなくて、ほっこりしながら待機。隣には神永さんとアヤさんがいた。二人に挟まれる形だ。

リョウとレンが俺より後ろにいるのが残念だけど、こういうハレムのなのも悪くない。アヤさん、神永さん、エリカとエリノ先生！ みんなは俺の翼だ！ ——あ、二対も翼があった。まあいっか

「あ、上がったぞ！ みんな見てたか！？」

「見えた見えた！」

「もちろん見てたぜ！」

俺が空に上がった花火を指差してるのを見てリョウとレンが答える。返事を聞けたので二人のことはおいといて、俺は隣にいる浴衣のお嬢さん二人と一緒に花火を見る。

「おおっ、今年はめっちゃきれいだな！」

「たーまやー」

「すごい……♪」

花火ってのはいいものだ。見てると童心に返って叫びたくなっちゃうー。そのぐらい美しい。

「おっ！ 今の花の形してたよ」

「あっ、今度はウサギだ」

「星形も上がったわ！」

花火と一口に言ってもその形や種類は様々だ。花とか星とかスマイリーとか、モ〇スターボールとか——どれも形がきれいで見ごたえあり。なかなか良かったぞ。だが一番はやはりスターマインだな。どんなにかつていうと——花火大会見に行ったことがある人ならわかるはず。

「見てみて！ スターマインよ！」

「おおっ、ホントだ！ スッゲー——！」

「目えチカチカしてくらあ！」

「これこそ花火大会の醍醐味！ だね」

「きれい……♪」

スターマインってのは花火大会のシメを飾る連続打ち上げ花火のことだ。当然ながらド派手で迫力があり、毎年これを楽しみにして見に来る人もいるほど。

だからしばらく花火が上がらなくなってもすぐに帰ってはいけないのだ。ま、俺んちはそんなもったいねー事はしないから大丈夫だ。毎年スターマイン見てから帰ってるもんね！

「花火すごかったなア」

「うん。今年はすごくきれいだったよね」

「俺もそう思う！」

楽しい時間はあっという間。俺はリョウやレン、神永さんやアヤさんと一緒に駅へ向けて歩いていた。ここまでは一緒なんだ。でも乗る電車が違うんだよなあ。

「マサキくん、今日は楽しかったわ。誘ってくれてありがとう」

「いえいえ、どういたしまして」

「一緒に歩いてくれてありがとう！ マサキさんと一緒に遊べて、わたしも楽しかったよ」

「いやあそれほどでも……エヘヘ」

「それじゃ、また学校で会いましょ」

「ああ。二人ともお元気で！」

アヤさんと神永さんに別れを告げ、俺は先に待っていたリョウやレンのところに行く。やっぱりうらやましそうな、または恨めしそうな目で俺を見ていた。そんな怖い顔で俺を見ないでくれえ！

「いいよなあ、最近はお前の方がモテてさ……」

「へ？」

「いや何でもねえよ……爆発しろだなんて思ってねえからな」

「だいたい女の子にモテすぎなんだよ君は！ 美少女と美人ばかり、もう何人目なのさ」

「んー……覚えてない！」

「はあ~~~~ッ!?」

ひがむモテない男が二人。本当に何人女性と知り合ったか覚えてないので、とりあえず言い切ってやった。反省はしている。

#52 (後書き)

さーて、次回の『ビビスク』は？

寺辺です。出番なかったけど次回は出るよ！ 多分出るから見逃しちゃーよ。

それはおいといて、休み明けてキツイよなー。夏休みの次の日は休みボケがひどいことになっちまうから、俺みたいにボケやすいやつは大変だ！

まあいっか！ おれたちや人間だもん、少しくらいボケたって大丈夫だよな。

えーと、次回！ 『春と秋なんて無い』 あながち冗談でもねえよ
うな気がすっけど…まあいいや！ 次回も見えてくれよな！

#53 (前書き)

第十話 『春と秋なんて無い』

#53

——終わった。いや、何がって？ やだな、言わせんなよ恥ずかしい。そんなに知りたいですか。ん？

あー、どうやらそのお顔から察するに何があったか知りたいみたいッスね。じゃあ仕方ねえ、教えてあげよう。何が起きたかを！

単刀直入に言おう。ビックリするなよ。ビックリした勢いでそのまま転んでどっか打っちゃやーよ。

じゃあ言うぞ、ズバリ——

夏休みが終わった。なので二学期が始まり、学校に行くことになった。他にもいろいろだ。無論頑張って取り組んでいかなければならない。ただ、その——

「今日から二学期だよ、かったりいいいい」

「俺もだ……ふあゝゝっ」

今俺と話している男子生徒——彼は名を氷室リョウという。悔しいが俺より若干カッコいいクールなクラスメートだ。最初の方はヤツばかりが女子にモテており正直、悔しかった。だが今は違う。俺にもモテ期が到来したのだあ！ いやったーい

「なあ、マサキ。始業式って何時からだっけ？ 聞いてねえか？」

「んー……そろそろじゃね？ ちょうど先生も来そうだしさ」

「そうか、わかった。なら席に戻らねえとな！」

リョウと世間話をして楽しんでいた俺だったが、そろそろ時間だ。席に戻ろうかの。

――さて、皆さんお察しの通り今日は二学期の始業式だ。新たな出会いと始まりを告げる大事な日なのだ。校長先生の大事なのかどうでもいいのかよくわからん話ももれなくついてくるぞ。あ、こっちは別にいいや。

さて始業式だけど、とくに変わったことはなかった。校長先生のスピーチの内容も相変わらずだ。ただ、新しくこの学校にやってきた女の先生がなかなか美人で驚いたな。むっさい長浜先生よりは美人で可愛い先生の方が、俺は嬉しいぞえ。むしろ本望でさえある。

その次の日の昼休み――、俺はリョウやレンと一緒に弁当を食べていた。あ、言っとくけどこの学校に食堂はねえぞ。まあ、学食はないけど購買はある。それがこの六波羅商業高校なのだ。

「しかし、涼しくなったよねー。この前まで超暑かったのにさ」
「ホントホント。オレ暑がりだから助かるわ。うるさかったセミも大人しくなったしな。マサキは？」

「俺？ 俺は……うーん」

「とくにはないか？ お前あんまり気にしなさそうだしな」

「いや、あるよ！」

「へ？ 何が？」

物珍しそうな顔でリョウとレンが俺を見ている。やだなあ、ゴミならついてないぞ。

「……風が涼しくなってクーラーつける必要が無くなった。これは

寂しい！」

「おいおいそう来たか！ 確かに気持ちはわかるが、その方が地球の為だぞ。時代はエコだからな」

「うんうん、リヨウの言う通りだね」

「よせやい、照れるだろが」

ドヤア！ と勝ち誇った顔でリヨウが仁王立ち。その後ろではレンがよいしょと担ぎ上げ。なんか腹立つ……。よし、ならば言い返してやる。

「でもさりヨウ……」

「なんだよ？」

「エコを心がけるんだったら夜中にアニメとかインターネット見るのやめたら？ あれこそエネルギーのムダ遣いだと思うぜ」

目には目を、歯には歯を。ドヤ顔にはドヤ顔を。どうだリヨウめ、俺のスマイルもイカすだろう。ん？

「ぬかせっ！ だったらお前も夏に寝るときはクーラーじゃなくて扇風機かけろよ！」

「なにをーう！ 夜更かしは健康に悪いんだぞ！」

「それ言ったらクーラーつけっぱだって健康によくねえぞ！ 風邪引いても知らねえからな」

「なんだとー！！！」

「文句あんのかぁ！？」

歯軋りしていがみ合う俺とリヨウ。こうなったらお弁当どころじゃないのはわかった。ムシャクシャしてやったが、反省はしている。

「まあまあ二人とも……」

「外野は引っ込んでおい！」

「ゲフツ！」

興奮したりヨウがそのままレンにゲンコツ！ ふらつきながらレンは気絶した。頭上では星が回ってましたとさ、めでたしめでた——いや、めでたくねーわ。どうすんだこれ、自分からケンカおっ始めといてアレだけど收拾つくんかいな。俺にはわかんねーけどさ。——って心配になってたら誰か来た。来ちゃったよおい！ このクラス、いやこの学年でいちばん可愛いけどいちばんこわーい人が！

「マサキくん、氷室くん……」

その子は茶髪のポニーテールで瞳は緑色。胸はそれなり。普段は真面目で優しい彼女だが、怒らせるとメチャメチャ怖い。いま怒ってるから、えーと——鬼のような形相を浮かべて俺たちを睨んでいる！

「あ、あの、エリカ……さん？ なぜそこまでお怒りになられているのしょーか？」

「お、俺たち何にもしてないよ。そ、そう……何にも」

「へえ……」

怒りの炎をたぎらせた学級委員のエリカは、俺とリョウの服の襟を掴むと……頭と頭をこっつんこさせたじゃないか！ や、やめてくれ。本気で痛いから——

「食事中は騒がないの！ いい？」

「はーい……」

#54

夏休みが明け、始業式は終わった。それからとはとくに何事もなく一週間を過ごしたぞえ。そして訪れた週末――俺はレンの家に遊びに行った。いや、決してゲームするだけではないぞ。勉強会だってするぞ。たぶん――。

「お邪魔しまーす！」

「あらマサキくん、いらっしやい！」

「お婆さん、ご無沙汰してます！」

「お茶とお菓子用意してあるから、どうぞ上がって♪」

玄関ではレンのお母さんがお出迎え。このお母さん、元気いっばいでなかなかの美人だ。トシは見た感じ俺のママンとだいたい同じか、少し上ぐらいだな。

なのにレンは俺のママンと変えてほしいだとか抜かしやがる。こんな美人さんなのに交換してほしいとは欲張りなやつめ！ レンよ、お前のような親不孝者はお母さんに百回ぐらいは謝るべきだ。

「レンー！」

「な、何だいお母さん」

「マサキくん来たわよー」

「お邪魔してまーす」

「ま、マサキ！ 来るの早いなあ」

レンのママンと一緒に居間へ上がったら、レンのやつビックリしてこっち向いたな。なんで驚いてたかというところゲーム中だったかららしい。

ちなみにそのゲームはギャルゲー……いやギャルゲーじゃなかった。3Dのアクションアドベンチャーゲームだ。しかもちっちゃい頃よく遊んでたやつじゃないか――。

「それじゃあごゆっくり♪」

「はーい♪　ってお母さんも一緒なの!？」

「別にいいじゃない。ねえ？」

「う、うん。まあいいけど」

「レン、いいお母さんじゃないか。ぐふぐふぐふぐふ!」

「頼むから寝取らないでよ……」

いいなーこれ。このシチュエーション。レンはちよつと嫌がってるみたいだが俺は断然オツケーだ。ちっちゃい頃もレンのお母さんがしつかり見守ってる中で良くゲーム遊んでたからなあ。

もちろん外で遊ぶこともあったけどね。いやー、ホントにあの頃はよかったのお。――って、なんだか俺おじいちゃんみたいなこと言ってるな。

「二人ともこうやって遊ぶの久しぶりでしょ？」

「は、はい、まあ……」

「あ、そうでもなかったわね。マサキくんちよく遊びに来てくれるし」

「でもお母さんも交えて……っていうのは久しぶりじゃないかなあ。って、うわあ!　やられたーっ」

レンのやつ、お母さんに話しかけていたらステージ上の落とし穴に落っこちてしまった。いや、彼はゲーム上手いんだよ。でも油断して落ちちゃったんだよ。いわゆる凡ミスっちゅうやつやね。

「ははは!　油断しちゃダメだぞ、レン」

「う、うん……で、でも次はあんなミスしないぞ」

「まあまあ、次おいらにやらせて」

「いいよ」

この時レンは「ミスしろ、ミスしろ、ミスれ!」と言いたげな表情をしていた気がしたけど――ま、気のせいだね。それじゃあやってみよう!

「たぶんこーいうのはマサキくんの方が上手いんじゃない?」

「ま、まさか。このゲームは僕の方がマサキよりやり込んでるよ。このゲームに限っては負けるはずがない」

「そうかしらねー?」

隣でレンとお母さんがおしゃべりしている中、俺はメチャ集中してプレイしていた。感情移入するタイプなもんだから、ついつい「行け、そこだそこだ、よっしゃー!」とか「よし、あともう少しだ! あっ、やられたー!」とかプレイ中に言っちゃうの。

わかる人いるよね? そうして俺はレンがミスった場所まで来た。このゲームはジャンプしたときの距離感がつかみづらいのだ。最初は少々手こずったが、あっさり飛び越えちゃった。あとはそのままゴールに辿り着いてクリアしちゃった。やーりー。

「マサキくん、すごいわねー! まさかクリアしちゃったなんて!」

「いやあそれほどでも……」

なんとステージをクリアしたらレンのお母さんがオイラを褒めてくれたではないか。きれいだし元気いっぱいだし何より笑顔が素晴らしい! 理想的なママじゃないか。一方レンは「まぐれだ、あんなのまぐれだ!」とぐずっていた。

「くそう……このままじゃ僕のプライドがズタズタだ。お母さん！
さっきの面再チャレンジするから見てて！」

「え？ あ、うん、いいわよ。どうぞどうぞ」

「果たして上手く行くかねー」

なんと、このままでは男がすたると奮い立ったレン君が同じステ
ージを再チャレンジ！　すごい勢いで難関を突破していく！

「レンすげえええッ！！　超うめーじゃん！！」

「へへ、まあね」

「こうなったらとことん応援しちゃうわよ。そら、いけいけー！」

「ファイト、ファイト！」

俺とレンママの声援を受けながらレンはガンガン突き進む。先程
のプレイでは落っこちた穴を飛び越えた瞬間、みんなのテンション
はMAXに。さあ、そのままゴールなるか！？

「いいぞレン！　その調子！」

「あともう一息よー！」

「いける……いけるぞ、僕！！」

ところがどっこい、目前で敵にぶつかり——まさかの1ミス！

「あつ、や、やられたー！　もうちょいだったのにい！」

「あちゃー……レン、やられちったか」

「まあまあ、そういうこともあるわ。あんまり気にしないで……」

かくして中間地点からやり直しとなってしまう。だけどレン—
—お前はよく頑張った。ドンマイ。

#55

「うーん、先生来ないな……」

よっ！ オレはマサキの同級生にして友達のひとり、氷室リョウだ。マサキの野郎はオレのことをやれロリコンだのやれペド野郎だのとボロクソ言ってくるが、そんなことないぞ。

貧乳派ではあるが巨乳も好きだ。いかんいかん、話がそれたな。さて、ある日の教室のことだった。今は休み時間なのでとくにすることもなくペン回しでもして遊んでいると――。

「おーい、リョウウー！ 今日空いてるかー？」

「げっ！ ヒロユキ……」

髪を真っ茶っ茶に染めた如何にもガラが悪そうな男子生徒――寺辺ヒロユキがやってきた。こいつは俺たちとは違う、よそのクラスの生徒だ。

女子に対して露骨に嫌な目線で見たり、校医のエリノ先生（学校でも屈指の美人でスタイル抜群！ 自分は貧乳好きだが好きだ！）に対しても嫌らしい目線で見てたりとあまり評判がは良くない。

普段からすげえ不真面目だし態度も悪いし、オレ自身もこいつのことはあまり好きじゃないな。ご両親の顔が見てみたいよ。

「お前何しに来た。早く帰らないと授業始まっちまうぞ」

「別にいいじゃんよー。もし今日空いてたらさ、放課後ゲーセン行こうぜー。いつもんとこな！」

「はいはい。悪いけど、オレ今忙しいんだ。また今度な」

「ほら行った行った。先生に怒られても知らねえぞ」とオレは頬

つぺたを膨らませるヒロユキを追っ払った。だがあいつは立ち去らずにまたやってきて、懲りずにこんなこと言ってきたんだ。

「そんなこと言わずにさ、遊びに行こうぜー！」ってな。まったく図々しいというか、ふてぶてしいというか、なんというか――。

（ホントしつこいな……。こうなりや、奥の手だ）

「なあなあ、どうなんだよ！　なんとか言ってくれよ！」

「エリカさーん！　授業始まりそうなのにB組のヒロユキが勝手にこっち来て遊んでるー！！」

不真面目な奴にはこうだ！　我が学年の学級委員であるエリカさんと呼んで厳しく叱ってもらう。そしてそいつが別のクラスから来ていたヤツだった場合は追い返す！

どんなにガラが悪くても、どんなに気が強くても彼女にはかありません。そのくらいエリカさんは怖いからなあ――。

「……ひ、ひいっ」

「あのー……寺辺さん？　自分が今なにをしているのかは……わかつてるよね？」

「わ、わわわわ分かりません！」

「じゃあ――ちょっと廊下に出ましようか」

凄い剣幕でエリカさんが寺辺を睨む。あーあ、だから言わんこっちゃない。廊下に出たエリカさんは寺辺をガミガミ叱っていたかと思えばすぐに戻ってきた。なんでも彼女が言うには、授業が始まる寸前だったので手短に済ませて寺辺を追い返したのだという。

「……ふえ？　リョウ、授業まだ？」

――と、そこでさっきまで寝ていたクラスメートのマサキが目を

覚ました。こいつ、寝不足だったらしい。だから今日は授業の合間に寝てるみたいなんだ。昨日なにやってたんだ？　いつもは寝不足で寝たりなんかしないんだが――。

「おはようさん。もうすぐ始まるぞ」

「まっマジで！？　あわわ……な、なあ」

「ん？　どうした」

「さっき外が騒がしかったけどさ、何があったんだ？」

「ああ、実はな……ひそひそ」

「ふんふん、へえー……。あ、ああ！　そうだったんだ！　あいつもバカだなー、ハハハ」

#56

もう皆さんご存知かもしれないが、今の季節は秋。スポーツが盛んになったり芸術的だったり、ウマイもんがいっぱい出てきたりとにかく色々あるシーズンだ。そして涼しくなってくるので暑がりの俺にとってはとても嬉しい季節なのだ。

——だが同時に辛い季節でもある。何故なら……運動会とその練習があるからだ。いや、体育祭というべきだったか？ 内容はだいたいおんなじだから、まあ良しとしよう。

「つべー……朝からぶっ続けで練習だなんてマジやっべー」

「このシーズンは辛いよねえ……」

昼休み、俺はいつも通りレンやリョウと一緒に弁当を食べていた。うっめー、マジうっめー。やっぱりお母さんが作るお弁当は絶品すな。

時間の都合でどうしてもすぐに作れる卵焼きとか冷凍食品が多くなりがちなんだけど、たまに昨日の残りが入っててそういう時はちよつと嬉しかったりする。この嬉しさは購買じゃ味わえない。

「練習しなきゃ本番うまくいかないとはいえ、こうも毎日続くとしんどいよなあ」

「そうだよなー、確かに……それは言えてる」

「おかげで家に帰る頃にはフラフラだぜ」

ため息混じりに語るリョウ。疲れているときは良く寝られるから

普通なら嬉しいのだが、リョウみたいに夜中に起きて深夜アニメを見る人間にとっては辛い。

見たかったアニメを寝過ごして見逃してしまう危険性があるからだ。え、俺の場合はどうかって？ うーん、土日はともかく平日はそんな遅くまで起きてないからなあ。ま、楽って言っちゃ楽かな。

「ま、いいんじゃない？ 文句言っても仕方ないし、とりあえず頑張ろうよ」

「え？」

愚痴るリョウを見かねたか、レンがそう呼びかける。いつもチャライ印象のある彼だが、実は親しみやすく結構いいやつである。レンみたいな明るいやつなら誰とでも友達になれそうだな。

「しんどいのはみんな一緒だし、何より達成感あると思うから」

「レン……お前」

「ま、僕も正直練習ばっかしするのは嫌なんだけどね」

「レンー！ たまにいいこと言うと思ったのに、お前なあー！」

なんてことだ、騙された！ ちょっと腹が立ったので、ポカッ！と軽く一発叩いてやった。「いったあーい！」と、レンは情けない声を上げた。

「たっただいまー！」

「あら、マサキ。おかえりー。早かったわねー」

帰宅すると母さんがお出迎え。相変わらず優しくてきれいだけど、拝む前にまず手洗いうがいしないな。手を洗って服も着替えた俺は、おやつを食べようとおやつが入ったカゴを漁る。

「ありゃ？ コンソメが入ってない……」

ところがどういふことか、いつか食べようと俺がとっておいたポテチのコンソメ味がなくなっていたではないか！ これはいったい――？

「あつ、ごめんね。ポテチなら私が食べちゃった」

「えー、そんなあ！ ひどいよ母さん……」

「また買ってあげるから」

ちょっとショックだ。食べたかったなあ――。それにしても勝手に食べちゃうなんてひどいや、まったく。でもかわいいから許す！

「エリノせんっせーい」

体育祭の練習というのは疲れちゃってかなわん。こうも毎日続いては肉体的にも精神的にも耐えられないよ。そういうことだから俺は保健室に向かう。目的は無論エリノ先生だ！

彼女は学級委員のエリカの姉。優しくおっとりした性格で話していて癒される。姉妹揃って美人さんなんだよなあ。あんなんおったら惚れてまうやろー！

「失礼しまーす」

「あら、マサキさん。今日はどうしたの？」

微笑みながら訊ねてくるエリノ先生。恋の病です！　だなんて言えるわけがなく、じゃあどうするかって？　そうさね――。

「体育祭の練習があったじゃないですか。その時に足をぐねっちゃって」

「まあ大変！　どの辺りが痛むの？」

「かかとの辺りです」

該当する部分を指差して先生に伝える。こういふときって正確に物事を伝えないと本当に痛い部分を診てもらったりできないんだよなあ。やっぱりある程度は表現力があつた方がよいよね。

「そこが痛いよね。じゃあ、かかとに湿布貼りますね」

エリノ先生に優しく声をかけてもらいながら、かかとに湿布を貼ってもらおう。ああっ、ひんやりして気持ちいい！そこにエリノ先生の天使のような微笑みと癒しパワーが上乗せされるわけだから――足のぐねり程度はすぐに治るはずだ。

「これでもう大丈夫よ♪」

「ありがとうございますっ！ エリノ先生のおかげで辛い毎日も乗りきれます！」

「えっ？」

「そのぐらいエリノ先生には感謝しているんですっ」

「あら、そう言ってもらえて嬉しい♪」

ニコツとエリノ先生が笑う。嬉しいって言ってもらえて嬉しいけれど、この反応――やはり恋には鈍感なのか？ もったいない、もったいないよ。こんな美人さんなのに――。

「それにしても、今日は怪我人が多いなあ」

「俺以外にも誰か来てるんですか？」

そう訊ねるとエリノ先生は、「ええ」と答えた。

「この時期は体育祭だから、練習中にケガをしちゃう人が多いの。だから私も毎日大変なんですよ」

「そうだったんですか、やっぱり……」

ちょっと残念がる俺。いや待て、何考えてんだ。エリノ先生は俺だけの先生じゃない。それにガツカリしてどうするんだ。ここはエリノ先生の日々の疲れを労う言葉をかけんといかん――。

「？」

「い、いえ何でもないです。毎日お疲れ様ですッ！」
「あら、ありがとう♪」

エリノ先生ったらすごく嬉しそう。労ってもらえるとみんな嬉しいよね。そうだ、これで良かったんだ――。

「ところで、他に来ている人はいませんか？」

「ええ、いるわよ」

他に誰が来てるか気になったのでエリノ先生についていく。するとそこはベッドで――。

「あっ……マサキくん！」

なんとベッドの上では神永さんが寝ていた。右足の膝を大ケガしたのかガーゼが貼ってあり、その上にはテープがいくつも――。なんて痛々しい傷痕なんだ。それにあの玉のようにつるつるした肌に傷がつくなんて。

「神永さん！ そのケガどうしたの！？」

「リレーの途中で後ろ髪踏んづけちゃって……」

「えーっ！ だからそろそろ髪切らなきゃってみんな言ってたのに……」

「そ、そうだよねっ」

恥ずかしげに神永さんが笑う。神永さんは足首まで髪の毛が伸びていて、走るときはとても危険。下手をすれば踏んづけてコケてしまうんだ。笑顔ではいるけどあんまり大丈夫そうじゃないぞ――。

「それか髪の毛を結ぶか、後ろ髪だけ切ってもらうかしてさ……」

「うーん、とりあえず今日のところは昼からの練習は休んで、安静にした方が良さそうね。神永さん、それでも大丈夫？」

「はい、平気です！」

心配するエリノ先生へ神永さんは元気よくそう答えた。とりあえず俺が余計な首を突っ込まなくとも大丈夫だということと、神永さんは大丈夫ということはわかった。いつまでもいたら邪魔になっちゃうから、そろそろ引き返そう――。

雨にも負けず風にも負けず。リハーサルにも負けず——様々な困難を乗り越え、遂にこの日が訪れた。体育祭の本番だ。

この六波羅商業高校の体育祭の競技は、玉入れや大玉ころがし、綱引きや騎馬戦など小中でも取り組んできたものばかり。実のところそんなに苦にはならないんだ。練習は辛かったけどね——。

「位置について！」

そして俺は今、白い線が引かれたスタート地点で身構えている。今から一年生のクラス対抗バトンリレーが始まるうとしているんだ。俺は先発を任された。

フライングなんて無礼な真似は出来ない。もちろん俺が遅れればあとの奴らが苦戦する羽目になる。——今日ばかりはシリアスモードで行かせてもらう！

「よいい、ドン！」

開始の合図と共に先発の選手たちが全員突っ走る！

A組からは体力自慢でスポーツ万能な窪寺が、B組からはその窪寺のライバルだという伊坂が、C組からは橘アヤさん、D組からは俺が、E組からは勉強家で知られる夙川くんが先発に出ている。みんな強敵ぞろいだ、負けられない！

「いいぞ刃野ーッ！ そのまま突っ走れ！ 窪寺と伊坂を抜けーッ！！！」

長浜先生が叫びながらエールを送ってくれたぞ！ そうだ、先生

もクラスメートも、父さんや母さんも俺のことを応援してくれているんだ。頑張んなきゃ――。期待に答えなきゃ！

「うおおおおッ！」

「なんだ!？」

「D組の刃野が急に加速した!？」

全力疾走だ！ 誰よりも早く走ってバトンを渡すんだ！ 体力自慢の窪寺も伊坂もビックリ、葎屋さんと橘さんはもっとビックリ！

「リョウ――ッ！」

リョウにバトンタッチしたところで燃え尽きた――！ あとは事行く末を見守るだけ。さて、俺の次はリョウが走る番だ。このリレ――は先鋒、中堅、大将の順に走ることになっているんだ。D組は俺が先鋒でリョウが中堅、エリカさんが大将という組み合わせになっている。

「氷室くん頑張って――！」

「ひるむな氷室オオオ!!！」

「おっしゃ、いいぜリョウ！ 走れ走れ――ッ!!！」

いつもはクールなりョウだが今日は珍しくホットになっていた。あいつもまた負けるわけにはいかないからだ。

すべてはクラスの大將であるエリカさんの足を引っ張らないため――。みんなからの熱い声援を受けながらリョウはひたすら突っ走る。悔しいけどカッコいい。でもそこがステキ！

「リョウ、おつかれ――！」

「ん？ ああ、どうも」

「お前あんなに走れるなんてな！。驚いたわ」

「へへ、そうだろう？」

ヘトヘトになったリヨウを励ます。彼によると、自慢じゃないがそこそこ走れるらしい。そこそこっていうけど――あの瞬発力はただものじゃなかったぞ。

そして勝負はいよいよラストパートへ突入――。大将同士のぶつかり合いとなった。C組からはまさかのレン、D組からは我らが学級委員のエリカさん、E組からは敦賀ミカさん――名だたるメンツが勢揃いだ。

それにしてもレンが大将だなんて誰が想像しただろうか。あいつのしたり顔が目には浮かぶようだ。そして腹が立つ！ エリカ、あんな奴に負けるなよっ！

「エリカ、行けッ！」

「そこだエリカさん！ 頑張れ、あんなに行ける！！！」

しかし、なかなかうまくはいかない。周りの連中はみんな早いんだ。陸上部やサッカー部のエースだとかスーパースターキーだとか、運動神経が抜群だったりとか――本当に強敵だらけ。

この中で唯一エリカと対等なのは帰宅部のレンぐらいか？ でも負けてほしくない。頑張れ。走れ。グラウンドの風になれ、エリカ！

「はあっ、はあっ」

ゴールまであと少し。だが少々遅れ気味――大丈夫なのか？ 勝てるのか？

「……負けない……負けたくないのっ！」

「お……おおっ！」

「なんだ……？ ゴールを前にしてエリカさんがヒートアップしたぞー！！」

いらぬ心配であった。なんとエリカはヒートアップし、超スピードで走り出したではないか。ライバルを巻き返し、そのままゴールへ突撃！ やったぜ、一等賞！ 運動部のエースやスーパールーキーがいる中で1位になれるなんて凄いことだよ。奇跡だよ、いや本当に。

こうして体育祭は幕を閉じた。その翌日――。

「エリカさーん、バトンリレー1位おめでとう！」

「氷室くん、ありがとう！」

「頑張った甲斐があったってもんだな！ おめでとう！」

「マサキくんもありがとうー！！」

「本当におめでとう！ 同じクラスの人じゃなくてエリカさんのこと応援してたわ！」

「神永さんもありがとうー！」

勝利のお祝いをしようってことで、俺とリョウと神永さんとでエリカの家でちょっとしたパーティーをすることになった。なお、レンは負けたのが相当ショックだったらしく来なかった。分かりやすいのう。

「エリカをお祝いしに来てくれてありがとう♪ みんな、ゆっくり

していつてね」

「はい！」

エリカの隣では、エリノ先生が微笑んでいた。こうして見てみると、このお二方は姉妹そろって美人さんだなあ。神永さんもきれいだし、おいら幸せだよ。

「しかし、エリカさんがあんなに速く走れるなんてなあ。オレもあれにはたまげた」

「うんうん。わたしもそう思う」

「ちっ、ちっ、ちっ……決め手はそれだけじゃないぜ」

右手の人差し指を立てて揺らして、ちよつとイヤミっぽく言ってみる。一度やってみたかったんだよね。不思議そうにこっちを見るリョウと神永さんへ対して俺はこう答える。

「ゴールテープがあったでしょ？ あれに触れるとき——エリカさんの胸が誰よりも先にテープに当たったんだ」

「えっ？ エリカさんのおっぱいが……？」

「なんだって？ そりゃマジか！？」

戸惑う二人に俺から「想像してみ」と告げると、二人は腕を組んだり顎に手を当てるなりして考え始めた。やがてなんとなくイメーヂが沸いたか納得がいった表情で「なるほどね！ なんとなくわかったぞ！」「やっぱり胸はあった方がいいよね！」と口々に答えた。その傍らで山科姉妹は不思議そうな顔をしていたが——いや、二人には何も言わないでおこう。

#58 (後書き)

……レンです。

………ん？ キャラ違うって？

いや、そういうわけじゃないんです。負けて悔しいの！
ここで活躍しておかなきゃ面目丸つぶれだったんだ。

そう思って頑張ったんだけど結果は見ての通り……くやしーっ！

えーと……次回、『肉まんとおでんがウマイ』！

お楽しみに！ もう知らない！

#59 (前書き)

第十一話 『肉まんとおでんがウマイ』

——地獄のような体育祭は終わった。いや、地獄だったのは練習だけか。跳んだり、走ったり、綱を引っ張ったり。いろいろあったね。どれも大変だった。

本番は緊張したけどそんなにキツくはなかったね。俺も男だ、あれしきでくたばってたまるかい。エリカにカッコいいところ見せられてひとまず安心。

——だが、しかし。一難去ってまた一難というように嵐はまだ過ぎ去ってはいなかった。端から見ればただのクロニクルかもしれないが——でもこれもこれでキツイのよ。いやホント。

その『嵐』とは何かというところ——言わずと知れたジャニーズ系のアイドルユニット。じゃなくて、——文化祭！ 楽しそうに見えるだろう。

けどね——文化祭は出し物やお店の準備をしなきゃいけないし、何より部活やってる人にとっては部活と重なって辛いんだ。ま、俺は帰宅部だけどね。

「くっそー、エリカも三ノ宮さんも人が悪いよーっ！！」

文化祭前日、更衣室にて。俺はあることを悔やみながら服を着替えていた。それは——レストランやカフェのウェ이터さんが着ているスーツ。

「マサキ、文句言っても仕方ねーだろ。決まったもんは今更変えようがないしな」

「そうよ。また来年があるじゃない」

と、そう優しく言葉をかけてきてくれたのはクールなイケメンクラスメイトの氷室リョウと――クラスの学級委員である山科エリカ。リョウの野郎、もうウェイターの服を着こなしてやがる！　しかも似合ってるじゃない――。くそう、爆発しろ。爆発して爆発して爆発しろい！

「だけどさあ……」

「そんなこと言っても何も始まらないわよ。さ、早く着替えて練習、練習！」

「はあーい……」

だけどエリカの前でワガママばかり言うわけにもいかない。未練を振りきるぜ、俺！

そんな俺がなぜさっきまでブータレていたのかというところ――それは、数日前の事だった。

「先生！　文化祭の出し物は個人的にメイド喫茶がいいと思います！」

「おおッ！　メイド喫茶か……。刃野、オマエなかなかいい趣味してるな」

高校で初めての文化祭。催し物を何にするか考えて企画を立てることになったのだが――。俺は開始早々手を挙げてメイド喫茶がいと、担任の長浜先生（三十路で体育会系でうざやかでうっさい人）に進言したんだ。しかし、そこに反論が入った。

「そんなの嫌です！　『お帰りなさいませ、ご主人様』だなんて恥ずかしくてあたしには言えません！」

「えーっ!!」

同じクラスにいた女子が恥じらうあまり反発。彼女はすごく真面目な子だったんだろうな。だからメイドさんになりきるのが嫌だったと――。

「ふざけるな!　じゃあ何がいいんだ!!」

「執事喫茶なんてどうかな?」

その中で、ある一人の腐女子が執事喫茶がいいと意見を出す。他には「妹系メイド喫茶」とか「男装執事喫茶」とかいろいろ出たが、やがて論争が勃発。

「くっそー!　メイド喫茶だ、メイド喫茶以外は認めない!　お前もそうだよな、刃野!」

「え?　あ、ああ……まあ、そうかな」

「とにかくメイド喫茶だぁぁ!　メイド喫茶以外認めねえええええ!!」

「いいえ、執事喫茶よ!　うちのクラスはイケメン多いから絶対イケる!　あたしのカンは大当たる!」

「いいや、ロリからお姉さんまでよりどりみどりのメイド喫茶だ!

これでいろんな層を呼び込める。そしてこっちの方が絶対にウケるぞ!　俺の占いは当たるッ!!　お前のカンは外れる!」

この壮大な論争には俺やリョウも参加した。もちろんメイド喫茶派だ。一度長浜先生が止めにはいるも抗争は止まらずヒートアップ。クラス中で騒乱が巻き起こり、中には殴りあい始める奴もいた。もうメチャクチャだ。

「執事執事ってうるせえんだよおおおおお!　この変態ドM

腐女子があああああああ！！ 黙ってゼブラ執事でも読んでろおおおおおッ！！」

比較的冷静で良識のあるリョウまでブチキレて暴れだしたからさあ大変。戦況はますます混乱を極めた。争い事を嫌うエリカたち穏健派はますます心を痛めた。

もはやどうしようもなくなりつつある……。そんな中、ボコボコにされながらも先生が立ち上がりみんなへこう告げたんだ。

「みんな、こんなことで争うのはやめなさい！ ここは殴りあいじやなくて……話し合いと多数決で平和的に決めよう！」

「えっ……？」

「さ、最初からそうしたら良かったんじゃないですか！ 先生、なんで早く言ってくれなかったんです！？」

「いやあ、話そうにもみんなが先生に容赦なく攻撃してきたからなあ……」

長浜先生が出した助け船、それは多数決だった。争うのをやめてみんなで投票を入れた結果、最終的に執事喫茶に決まった。決め手は――最後にエリカさんが入れた清き一票。

「な、なぜだああああ！！ なぜメイド喫茶がボツになったのだああああ！！」

その時納得が行かなかった俺は、生徒会室へ急行。

「あら、1年の刃野さん？ どうしてここに……？」

たまたまそこにいた、生徒会の一員で強い発言権を持つ――2年

の三ノ宮ユカさん。彼女に地面に穴が開きそうな勢いで土下座してまで、メイド喫茶派の代表として俺はこう頼み込んだのだ。

「お、お願いです！　どうか1年D組の執事喫茶の企画を取りやめて、その……代わりにメイド喫茶の企画を立ち上げさせてください！！　この通りです！　どうかお願いしますッ！！」

「じ、刃野さん——その熱意、しかとこの胸で受け取りました」

何かを決心したような表情で胸に手を当てる三ノ宮さん。だが——！！

「ですが、今更取り止めることはできませんわ」

「そんな……どうして！」

「当たり前前の事を言いますが……既に決まってしまった以上、私たちは全力で取り組まなくてはいけないの」

「た、確かに」

「それにここで中止して企画を潰してしまうのは、その企画を考えた人に失礼ですわ」

「ううっ」

「……刃野さん。お気持ちはわかります。あなたにはまだ来年がありますから、またその時に意見を出してみてはいかがでしょうか」

「はい……そうします」

アタマじゃわかっていたんだ。けどココロでは認められなかったんだ。最後に三ノ宮さんへ頭を下げて深く謝罪したあと、俺は生徒会室を去った。こうして……壮小な大論争は幕を閉じたのだった。

「ううううう……」

頭抱えてまで叫びを上げちゃう俺。悲しいけど、出し物が執事喫茶になってしまったのは事実なのよね。受け入れないと、頑張らないと――。

「そ、それでさ、エリカ。まずは何をしたらいいの？」

「うーん。調理器具は用意できてるんだよね。だからあとは、買い出しかな」

「買い出しか――……」

エリカに何をしたらいいか聞いてみたところ、買い出しに行っほしいとお願いされた。先程執事のコスチュームに着替えたのだが、まさか――このままで行けっというのか!?

「ってちよい待ちちよい待ち！ このまま行けっというのか!？」

「うん、そうよ。また着替えたら、手間がかかるでしょ？」

「それはそうだけど、でも……」

「まあ、そういうことだから行ってきて！」

「はい……」

正直不本意である。だがこれもエリカを喜ばせるためだ。仕方がないんだ――。

「イヤッフウウウウ!!」

思いきって俺は学校を飛び出し、買い出しへと向かう！ テンションは最高潮に達している――。もはや誰にも止めることは出来ないのだ。

「もう何も怖くねえ！ 人の目を気にする必要なんかねえ！！」

走って、飛んで、叫ぶ。傍から見ればただの変質者に見えるだろうが、そんなことは関係ない。俺は行くぞ。この格好のまま――買い出しへ。

「えーと……」

学校の付近にあるスーパーの中。エリカから渡されたメモを見ながら俺はショッピングを進めていく。カフェオレを作るためのコーヒーの素にケーキミックスや生クリーム、トッピングに使うチョコレートにイチゴ、それから適当にジュース――って結構多いなあおい！ 代金は受け取ってあるけど無駄遣いは出来ない。ケーキやコーヒーに使う材料は入れたから、次はジュースだ。

エリカは確かこう言っていたな。「メニューはまず、ショートケーキとかカフェオレとかは確定してるの。次はドリンクね。ドリンクはマサキくんが買ってきたものを見てから決めます」と。――つまり、好きなものを買ってきてもよろしいという解釈でいいのかな。そういうやお肉も焼くとか言っていたが――あ、肉は確か家庭科室に在庫があったな。肉々しい。いつかは上手にこんがり焼けた肉を食ってみたいものだ。男らしくワールドに！

「ジュース、ジュース、じゅーうーすつと。へへっ、何にしようかなあ！」

さあ次はお待ちかね、ドリンクだ！ 本当は何にしようか迷っちゃうねえ。炭酸飲料にオレンジジュース、ぶどうジュースに牛乳。フルーツオレに天然水。そしてお茶。あ、お茶はあったね。それにしてもペットボトルはいくついるだろうね。確かオレンジジュースやぶどうジュースとかは用意してあったと思うし、やはりここは炭酸か。メロンソーダが欲しいところだが――

「喫茶店ならメロンソーダが欲しいところだねー。あり？ ない……」

――ない。メロンソーダなんて上等なもんは置いていない。コーラやサイダーとかの庶民的で馴染みの深い奴なら置いてあるけど――まあいいや。コーラとサイダーと、それからファ○タグレープでも買っただろう。炭酸が飲めない人がいるんなら、その人には別のを出せばいいからね。

「ふう……一応これで全部だな」

メモに書かれていたものはすべて買った。これでおつかいもおしまい――と、レジへ向かいお金を払う。おこづかいは一五〇円ほどだったんだけど、お会計は合計で三〇〇円。割と余裕を残せたな。

「あつ……」

学校へ戻って家庭科室へ向かう途中、ふと足首まで黒い髪を伸ばした赤い瞳の女の子と視線があった。彼女の名は神永さん。髪が長けりゃお胸も大きく、足もすらりとしていて美しい。

「君は神永さん！」

「マサキくん！ あれ、なんでそんな執事みたいな格好してるの

？」

「あ、これ？　うちのクラスは執事喫茶っていうのをやることになったんだ。神永さんのクラスは何やるの？」

「私のクラス？」

人差し指を口に添える神永さん。ちよつと悩んだあと、彼女はな
んと答えたと思います？　ま、すぐにわかるんだけど……。

「1年E組はおばけ屋敷やるんだよ〜♪」

急に目付きが怖くなったと思ったら、聞いたら呪われそうな声で
神永さんは答えた。や、やめて。神永さんがおばけをやったら洒落
にならないから。いろんな意味で。

「そ、そうなんだ……」

「あんまり怖くないと思うから、良かったら遊びに来てね！　楽し
いよー！」

表情をコロツと明るいものに変えて神永さんは去っていった。ど、
どうしようかな。あんまり怖くないなら行ってみようかなー！。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0892p/>

荒唐無稽ビビッドハイスクール！

2011年11月30日21時55分発行